

神奈川県・鎌倉市

長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書

—(仮称)由比ガ浜こどもセンター建設に伴う
由比ガ浜三丁目194番1、262番1地点の調査—

平成 28 年 12 月

株式会社 齊藤建設



石棺墓全景



I区、II区1面全景
(上方が西、下方が東)



4面・5面出土遺物

例言

1. 本書は、鎌倉市長谷小路周辺遺跡（鎌倉市№236）内、由比ガ浜三丁目194番1、262番1地点における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、（仮称）由比ガ浜こどもセンター建設にともなう埋蔵文化財の緊急調査として、鎌倉市こどもみらい部こどもみらい課の依頼を受けた、株式会社齊藤建設（代表取締役：齊藤正朗）が、平成28年（2016）2月1日から平成28年（2016）8月10日にかけて実施した。また整理作業は平成28年（2016）7月1日から平成28年11月30日にかけて行なった。
3. 発掘調査面積は1,307㎡で、株式会社齊藤建設・埋蔵文化財調査部の降矢順子が調査を担当した。
4. 現地発掘調査・資料整理は以下の体制で行った。なお、現在調査・資料整理にはNPO法人鎌倉考古学研究所理事齋木秀雄の指導・助言を受けた。

【現地調査】

調査担当 降矢順子
主任調査員 押木弘己、三ツ橋正夫
調査員 赤堀祐子、村松彩美、和野 明、笠井一典、加藤千尋
調査作業員他 株式会社齊藤建設：条 健一、宮内隆順、新井一男、赤坂 進、尾崎仁宣、落合勝彦、片山直文、楠 健朗、後藤宗彦、佐竹照雄、高松 清、田島節男、中村和弘、野間征一、米山朝彦
鎌倉市シルバー人材センター：石黒 清、岩崎美佐夫、久島忠敬、小口照雄、永野幹晴、南斉敬資、星 栄人、松山豊司、三橋幸雄、山口芳治、吉澤 功、米山公武

【資料整理】

担当 降矢順子
調査員 赤堀祐子、村松彩美、和野 明、岡田慶子、加藤千尋
調査補助員 遠藤君子、亀山利枝子、定谷拓子

5. 本書の執筆・編集は降矢と齋木が分担し、古代の土器については押木が執筆した。
6. 本書に使用した写真は現地遺構他を担当及び主任調査員が、遺物を赤堀が撮影した。
7. 本文中に使用した挿図の縮尺は各図版に指示した。
8. 本書に関わる記録図版類および写真等は鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 現地調査及び資料整理に際しては以下の方々にご指導・ご教授を頂いた。（順不同、敬称略）
奈良貴史、萩原康雄、佐伯史子（新潟医療福祉大学医療技術学部）、米田 穰（東京大学博物館）、安達登（山梨大学法医学講座）、佐藤孝雄（慶応義塾大学文学部）、牧野久美（鎌倉女子大学教育学部）、羽生淳子（大学共同利用機関法人総合地球環境学研究所）、佐宗亜衣子（東京大学総合研究博物館）、北条芳隆（東海大学文学部）、米元史織（九州大学総合研究博物館）、山田俊輔（千葉大学文学部）、岩城克洋（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部）、松島義章（神奈川県立生命の星・地球博物館）、萬年一剛（神奈川県温泉地学研究所）、藤原 治（国立研究開発法人産業技術総合研究所）、中三川昇（横須賀市教育委員会）、金子浩之（伊東市教育委員会）、新井 悟（川崎市市民ミュージアム）、西川修一（神奈川県立旭高等学校）、植山英史、柏木義治（公益財団法人かながわ考古学財団）、竹原弘展、黒沼保子（株式会社パレオ・ラボ）、上本進二（神奈川災害考古学研究所）、玉林美男、鈴木庸一郎、永田史子、米澤雅美（鎌倉市教育委員会）、塚田順正

目 次

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 調査地点の概観	2
第1節 調査地点と歴史的環境	2
第2節 周辺の調査	2
第3節 調査の経過	6
第4節 調査軸の設定	8
第5節 基本堆積土層と堆積状況	9
第3章 検出した遺構と遺物	14
第1節 5面の遺構と遺物	14
第2節 4面の遺構と遺物	22
第3節 3面の遺構と遺物	27
第4節 2面の遺構と遺物	37
(1) 竪穴住居址	37
(2) 溝	53
(3) 土坑	53
(4) ピット	55
(5) 2面出土遺物	56
第5節 1面の遺構と遺物	65
(1) 方形竪穴建物	67
(2) 井戸	82
(3) 溝	85
(4) 土壇墓	88
(5) 貝溜り土坑	96
(6) 土坑	97
(7) ピット	111
第4章 まとめと考察	127
<附編>	
長谷小路周辺遺跡から出土した人骨	131
鎌倉長谷小路周辺遺跡から出土した貝類	159
長谷小路周辺遺跡の砂層堆積環境	170
相模湾沿岸部における古墳時代の臨海性墓制について	179
長谷小路周辺遺跡出土の脊椎動物遺体	191

挿図目次

図1	遺跡の範囲図	3	図44	2面ピット	55
図2	調査地点と周辺の遺跡図	5	図45	2面遺構出土遺物(1)	57
図3	グリッド設定図	8	図46	2面遺構出土遺物(2)	58
図4	基本堆積土層図	9	図47	2面遺構出土遺物(3)	59
図5	堆積土層図	11・12	図48	2面遺構外出土遺物	60
図6	5面全体図	15・16	図49	1面全体図	63・64
図7	トレンチ堆積図	17	図50	1面出土遺物(1)	66
図8	5面遺物分布図	18	図51	1面出土遺物(2)	67
図9	5面土坑(1)	19	図52	1面出土遺物(3)	68
図10	5面土坑(2)	20	図53	攪乱出土遺物	69
図11	5面出土遺物	21	図54	1号、2号、3号方形竪穴建物	70
図12	4面全体図・等高線図	22	図55	1号方形竪穴建物出土遺物(1)	72
図13	遺物分布図	23	図56	1号方形竪穴建物出土遺物(2)	73
図14	4面土坑	24	図57	1号方形竪穴建物出土遺物(3)	74
図15	4面出土遺物(1)	25	図58	2号方形竪穴建物出土遺物	74
図16	4面出土遺物(2)	26	図59	4号方形竪穴建物	75
図17	3面全体図	27	図60	4号方形竪穴建物出土遺物	75
図18	K1号土壙墓	27	図61	5号、6号、7号、8号方形竪穴建物	76
図19	石棺墓(1)	29	図62	5号方形竪穴建物出土遺物	76
図20	石棺墓(2)	30	図63	6号方形竪穴建物出土遺物	76
図21	石棺の構築	31	図64	7号方形竪穴建物出土遺物	77
図22	石棺墓石材の加工痕拓本図	32	図65	9号、10号方形竪穴建物	77
図23	2面全体図	35・36	図66	9号方形竪穴建物出土遺物	77
図24	1号竪穴住居址	38	図67	11号、12号、13号、14号方形竪穴建物	78
図25	1号竪穴住居址カマド	39	図68	11号方形竪穴建物出土遺物	78
図26	2号竪穴住居址	40	図69	13号方形竪穴建物出土遺物	79
図27	3号竪穴住居址	41	図70	14号方形竪穴建物出土遺物	79
図28	4号竪穴住居址	41	図71	15号方形竪穴建物	80
図29	5号竪穴住居址	43	図72	15号方形竪穴建物出土遺物	80
図30	6号竪穴住居址	44	図73	16号、17号、18号方形竪穴建物	81
図31	7号竪穴住居址	45	図74	16号方形竪穴建物出土遺物	81
図32	7号竪穴住居址カマド	46	図75	17号方形竪穴建物出土遺物	82
図33	8号竪穴住居址	47	図76	18号方形竪穴建物出土遺物	82
図34	9号竪穴住居址	47	図77	19号方形竪穴建物	83
図35	10号竪穴住居址	48	図78	19号方形竪穴建物出土遺物	83
図36	11号・12号・13号竪穴住居址	49	図79	1号井戸	84
図37	14号・15号竪穴住居址	50	図80	1号井戸出土遺物	85
図38	16号竪穴住居址	50	図81	2号井戸	86
図39	16号竪穴住居址カマド	51	図82	2号井戸出土遺物(1)	87
図40	17号竪穴住居址	52	図83	2号井戸出土遺物(2)	88
図41	18号竪穴住居址	52	図84	T1号、T2号、T3号溝	89・90
図42	K1号溝、K8、K9、K10ピット	53	図85	T1溝、T2溝、T3溝骨他出土状況	91・92
図43	2面土坑	54	図86	散乱骨(1)	93

図87	散乱骨 (2) ……………	94	図95	土坑 (3) ……………	103
図88	T3号、T4号溝……………	94	図96	土坑出土遺物 (2) ……	104
図89	T3号、T4号溝出土遺物……………	95	図97	土坑 (4) ……………	106
図90	土壙墓 ……………	95	図98	土坑出土遺物 (3) ……	107
図91	土壙墓出土遺物 ……………	96	図99	土坑 (5) ……………	109
図92	土坑 (1) ……………	98	図100	土坑出土遺物 (4) ……	110
図93	土坑 (2) ……………	100	図101	土坑 (6) ……………	112
図94	土坑出土遺物 (1) ……	101	図102	土坑出土遺物 (5) ……	113

写真図版目次

図版 1	1. 調査地前県道鎌倉・藤沢線 (東から) 2. 調査地近景 (北から) 3. 調査地状況 (上空・北から) 4. II区攪乱状況 (部分・北から) 5. II区北壁土層 (部分・南から) 6. III区南壁土層 (部分・北から) 7. I区東壁土層 (部分・西から)
図版 2	1. 1号方形竪穴建物上部 2. 1号方形竪穴建物下部 3. 1号方形竪穴建物上部石臼 4. 1号方形竪穴建物下部石臼 5. 15号方形竪穴建物 (北から) 6. 同、かわらけ皿出土状況 7. 4号方形竪穴建物 (西から) 8. I区東側中世遺構群 (北西から)
図版 3	1. 19号方形竪穴建物 (南西から) 2. 1号井戸 (北東から) 3. 同、井戸枠 4. 同、漆喰残存状況 5. 同、かわらけ皿出土状況 6. 2号井戸 (北から) 7. T18号、T19号、T20号、T21号、T22号土坑 (西から) 8. 同、北から
図版 4	1. T1号、T2号、T3号溝 (西から) 2. T3号溝堆積土 (西から) 3. 骨散乱状況 4. 骨散乱状況 5. 骨散乱状況 6. 骨散乱状況 7. 骨散乱状況 8. 人頭骨出土状況
図版 5	1. ウマ頭骨出土状況 2. イヌ頭骨出土状況 3. T3土壙墓 (北西から) 4. T1号土壙墓 (東から) 5. 同、銅銭、鋏・毛抜き出土状況 6. T1号土壙墓土坑 (西から) 7. T3号土壙墓 (西から) 8. T4号土坑墓
図版 6	1. III区中世全景 (西から) 2. III区西側中世遺構群 (西から) 3. T7号ピット 4. III区東張り出し部中世遺構群 (南から) 5. T32号土坑 (北東から) 6. T31号土坑遺物出土状況 7. T31号土坑具出土状況 8. T3号土坑具出土状況
図版 7	1. T27号土坑完掘状況 2. T32号土坑完掘状況 (東南～) 3. T33号土坑完掘状況 (北から) 4. T35号土坑完掘状況 (北から) 5. T36号土坑完掘状況 (北から) 6. T6号ピット (西から) 7. 遺構241完掘状況 (北西から) 8. 遺構243完掘状況 (北西から)
図版 8	1. I区III層下手づくねかわらけ皿出土状況 2. T1号貝溜り 3. T3号貝溜り検出状況 4. T1号かわらけ皿出土状況 5. 同、内側状況 6. 遺構166貝検出状況 7. T7号土坑硯出土状況 8. K16号土坑遺物出土状況
図版 9	1. 1号竪穴住居址 (東から) 2. 同、堆積土層 (西から) 3. 同、カマド状況 4. 出土遺物 5. 同、出土遺物 6. 同、床面下土坑 7. 5号竪穴住居址 (北西から) 8. 同、カマド
図版10	1. 8号竪穴住居址 (南西から) 2. 同、カマド検出状況 3. 同、土器検出状況 4. 同、掘り上げ状況 5. 同、袖内の土器 (東から) 6. 6号竪穴住居址 (東から) 7. 同、掘り上げ状況 8. 袖内出土の貝
図版11	1. I区東側2面遺構群 (南から) 2. 4号竪穴住居址全景 (東から)

3. I区中世遺構 4. T11号土坑(北東から) 5. T14号土坑(北東から)
 6. 遺構36(西から) 7. T12号土坑他(南西から)
 8. II区北東部2面遺構群(南西から)
- 図版12 1. 石棺墓検出状況(北から) 2. 同、埋葬状況(南から) 3. 埋葬体上半身
 4. 埋葬体腰部分 5. 石棺状況(西から) 6. 石棺墓掘り方(東から)
- 図版13 1. 石棺東石82 2. 石棺西石89 3. 石棺南側石積み状況 4. 石棺南西部石積み状況
 5. 石棺石89側面の加工痕 6. 石棺石83上面の加工痕 7. 石棺状況(東から)
- 図版14 1. 石棺床石と北壁石(南から) 2. 石棺石81、82、83 3. 石棺石5の状況
 4. 石棺石76裏面の加工痕 5. 石棺石84裏面の加工痕 6. 石棺石85裏面の加工痕
 7. 石棺石88裏面の加工痕
- 図版15 1. 石棺石84(左)と83 2. 石棺石83 3. 石棺石88 4. 石棺石85
 5. 石棺石78(右)と80 6. 石棺石78 7. 石棺石76 8. 石棺石77
- 図版16 1. K1号土壙墓(南から) 2. K1号土壙墓(壁内の窪み)と石棺墓(右の高台)
 3. 黒色砂層2までの飛砂堆積 4. II区黒色砂層2の斜面(西から)
 5. 黒色砂層2下遺物出土状況(北西から) 6. 同、(西から) 7. K9号土坑堆積土
 8. K9号土坑甕
- 図版17 1. K8号土坑(北から) 2. 同、掘り方 3. 5面遺物出土状況
 4. 同、土器出土状況 5. 同、土器出土状況 6. 同、骨製品出土状況
 7. I区トレンチ5黒色火山灰堆積状況(西から)
 8. I区トレンチ6黒色火山灰堆積状況(東から)
- 図版18 1. K7号土坑(東から) 2. K1号土坑(北から) 3. K2号土坑(東から)
 4. K3号土坑(東から) 5. K5号土坑(東から) 6. K4号土坑(西から)
 7. K6号土坑遺物出土状況(北から) 8. 5面遺物出土状況
- 図版19 1. 土坑205鹿角出土状況 2. 5面貝包丁出土状況 3. 5面サンゴ・土器出土状況
 4. 作業風景 5. 作業風景 6. 作業風景 7. 作業風景 8. 作業風景
- 図版20 1. ラジコンヘリによる空撮風景 2. 土層剥ぎ取り風景
 3. 堆積土層サンプリング風景 4. 石棺墓人骨取り上げ風景
 5. T1号墓人骨取り上げ風景 6. 現地説明会スナップ 7. 現地見学会スナップ
 8. 現地見学会スナップ

表目次

表1	5面出土遺物観察表	20
表2	5面出土土器観察表	21
表3	4面出土遺物観察表	26
表4	4面出土土器観察表	26
表5	石棺墓石材一覧表	33・34
表6	2面出土遺物観察表	61・62
表7	出土遺物法量表	115~124
表8	土坑・ピット計測表	125
表9	石材計測表	125
表10	出土遺物構成表(点数)	126
表11	かわらけ構成表(重量)	126
表12	かわらけタイプ別比率表	126

第1章 調査に至る経緯

平成27年6月、当該地における土木工事について事業者である鎌倉市こどもみらい部こどもみらい課（以下「事業者」という。）より鎌倉市教育委員会文化財部文化財課へ相談があった。その内容は、現地地表下8m程度に及ぶ杭基礎工事を伴う保育施設等の建築計画であった。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地であるため、事前に確認調査を実施したところ、現況地盤面より深さ70cmで中世遺構面が確認され、当該工事計画が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが避けられないとの判断にいたった。

事業者では、材木座保育園及び稲瀬川保育園の津波対策並びに地域における津波避難場所の確保を目的として、鉄筋コンクリート造建築物の整備を進めており、当該建築物の規模・構造や当該地の土質を考慮すると、遺構の現状保存を図る形での設計変更は難しいとの回答が示されたため、平成27年8月28日付けで事業者より提出された文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知を県へ送付した。これに対して、平成27年9月15日付けで神奈川県教育委員会教育長より発掘調査を実施する旨の指示が通知された。このため、当該地の埋蔵文化財については発掘調査を実施して、記録保存の措置を図ることとなった。

平成27年12月17日付けで事業者と発掘調査の業務委託契約を締結した株式会社 斉藤建設 代表取締役 斉藤隆晴（平成28年4月1日付けで斉藤正朗に代表者変更）は、平成27年12月24日付けで文化財保護法92条の規定に基づく発掘調査の届出を提出し、平成28年1月19日付けで神奈川県教育委員会教育長より発掘調査届出に対する指示通知を受けた。発掘調査に先立つ地上障害物の撤去を行った後、発掘調査は、平成28年2月1日に開始し、8月10日に終了した。

長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目194番1、262番1）発掘調査にかかる届出等の文書

文書種別・内容	文書番号	日付	発信者	受信者	備考
試掘調査					
試掘の承諾	-	平成27年6月12日	土地所有者	鎌倉市教育委員会	-
試掘報告	-	平成27年6月19日			遺跡の所在を確認
取扱いの判断	-	平成27年6月19日			発掘調査が必要
文化財保護法第94条に基づく土木工事の通知					
土木工事の通知	-	平成27年8月28日	事業者	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市を經由
発掘調査の指示	文遺第61061号	平成27年9月15日	神奈川県教育委員会教育長		鎌倉市を經由
文化財保護法92条に基づく発掘の届出					
発掘届の提出	-	平成28年1月8日	株式会社斉藤建設 代表取締役斉藤隆晴	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市を經由
発掘届の受理通知	文遺第50081号	平成28年1月19日	神奈川県教育委員会教育長	株式会社斉藤建設代表取締役 斉藤正朗	鎌倉市を經由
出土品の手続き					
埋蔵物の発見届	-	平成28年8月10日	株式会社斉藤建設 代表取締役斉藤正朗	鎌倉警察署長	-
埋蔵文化財保管証の提出	-	平成28年8月10日	株式会社斉藤建設 代表取締役斉藤正朗	神奈川県教育委員会教育長	鎌倉市を經由
文化財認定	-	平成28年9月13日	神奈川県教育委員会教育長	株式会社斉藤建設代表取締役 斉藤正朗	鎌倉市を經由

第2章 調査地点の概観

第1節 調査地点と歴史的環境

本調査地点は丘陵に囲まれた鎌倉市街地の南西部、由比ガ浜三丁目194番1、262番1に位置する。本地点の含まれる長谷小路周辺遺跡（鎌倉市No.236遺跡）は、その名称が示すように鎌倉時代から続く長谷小路の周辺を含む遺跡である。遺跡は、東は六地藏から由比ガ浜海浜公園に向かう道路、南は江ノ電由比ガ浜駅から東の水道路、西の江ノ電線路、西は長谷観音前の交差点辺り、北は部分的に他の遺跡が入り組むが、丘陵の裾ラインで、広大な範囲を占めている。遺跡範囲内のほとんどは中世には浜地と呼ばれた砂丘地帯で、中世の様相はあまり明確ではない。

長谷小路は、現在の六地藏から長谷観音に向かう県道鎌倉・藤沢線の道筋をあてる説もある。しかし、江戸時代には扇ガ谷村と長谷村の境は今小路の東に接している巽荒神前で、ここから北が今小路、南が長谷小路とされている。『吾妻鏡』には長谷あるいは長谷小路の名称はないが、長谷寺に残る胴鐘の銘や懸仏の銘などから長谷寺は文永年間には成立していたと考えられる。長谷あるいは長谷小路の名称はこれ以降についたと考えられる。中世の長谷小路の道筋は明らかになっていないが、吉屋信子記念館前の道路を長谷小路の道筋とする説が発掘調査の結果から提議されている。その根拠は乏しいが、吉屋信子記念館前の道路より南は砂丘地帯になり、この道路の南に接する発掘調査で現在の道路に平行する方向の道路が発見されている。

本遺跡範囲の西端に位置する稲瀬川は、長谷大谷を源流として高德院の大仏東を流れて由比ガ浜で海に流れ込んでいる。『吾妻鏡』治承四年（1180）の記事に拠ると、伊豆から鎌倉に向かう北条政子は、日次が良くないという理由で稲瀬川辺の民屋に止宿している。この時点では、稲瀬川辺が鎌倉の内ではなかったことになる。

本遺跡の北側に位置する甘縄神明社は鎌倉時代以前から存在する社で、社伝によれば創建は和銅三年（710）、また、本遺跡内ではないが坂ノ下の御霊神社は鎌倉権五郎景政の廟社と伝わっている。景政は大庭の御厨の地を伊勢神宮に寄進した平景政である。『鎌倉市史・総説編』では甘縄神明社や御霊神社は大庭の御厨内に鎮座していた可能性を指摘している。

本遺跡範囲の東には合戦に敗れた和田一族を弔ったとされる和田塚があり、その周辺には下向原古墳群があったと『新編相模国風土記稿』に記されている。この古墳群に含まれる、采女塚を和田塚に比定する説もある。采女塚からは現在京都大学が所蔵している人物埴輪が出土したとされる。しかし、和田塚が墳丘を持つ遺構ではないことは鎌倉市の行った試掘調査で明らかになっている。また仮に古墳群が江戸時代まで存在していた場合、中世の浜地で行われた開発を免れたことになる。開発者に古墳群を残す意図がない限り、このことは考え難い。個人的には、散乱していた中世の人骨などを集めた塚が古墳と間違われたと考えている。

染谷時忠は鎌倉の始祖的な人物で、『大山寺縁起』に「開基良弁は鎌倉由比郷の人、俗姓漆部氏、当国良将染谷太郎大夫時忠の子」とある。時忠邸は甘縄神明社南の長者久保にあったと伝わっている。現在水道路の脇に石碑がひっそりと建っている。

第2節 周辺の調査

長谷小路 周辺遺跡の範囲内では比較的多くの発掘調査が行われている。本項では、後項で触れてい



図1 遺跡の範囲図

る今回の調査で確認された2層の黒色弱粘質砂層（以下、黒色砂層という）のうち、上層を黒色砂層1、下層を黒色砂層2として説明を加える。なお、未報告であるが本地点の西に接する地点Aでは海拔7.50mで黒色砂層1と思われる土層が確認され、古代の竪穴住居址が検出されている。本地点のわずか20m西に位置しているだけで、1.30m～2.20m低いレベルに堆積している。以下周辺の主な調査地点について触れるが、本地点からの方角と距離を記した。

本遺跡範囲内では、西100mに位置する地点2で、黒色砂層の有無はわからないが、中世の遺構群の下から8世紀後半～9世紀代の竪穴住居跡と甕に入れた火葬骨が逆位で埋葬されている。西150mに位置する地点3は周辺で最も早く調査が実施された。海拔9.0m前後の白黄褐色砂層上から13世紀中頃以降の方形竪穴建物が数多く検出され、海拔8.90m前後の黒色砂層から古代の竪穴住居址が検出されている。検出された黒色砂層は、堆積順では黒色砂層1と考えられる。西220mの地点4では海拔7.30mで黒色砂層1が検出され、その上部に堆積した黄褐色砂層上面から13世紀中頃以降の方形竪穴建物、井戸、土坑等が検出されている。黒色砂層上面近くで13世紀初めの手づくねかわらけ片が少量出土している。

南西280mに位置する地点5では中世遺構は削平されて遺存状態は悪いが、海拔4.70m（上面レベル）で河川あるいは湿地を埋めた後に、黒色砂層1が堆積している。南西120mに位置する地点6では中世の方形竪穴建物、東西方向の道路、土坑などの他に古代の両耳に金銅製の耳環を付けた埋葬体が見つかっている。この埋葬体は、頭を北から南に128度傾いた方向においた仰臥伸展葬で、胸部には子供と思われる頭部がのっていた。母子合葬墓と思われるが、詳細は不明。人骨の検出レベルは8.9m。黒色砂層の有無は不明。

南70mに位置する地点7では方形竪穴建物、井戸、東西方向の道路跡が検出され、正嘉元年（1257）の地震に伴うと推測される墳砂痕が見つかっている。南東330mに位置する地点8では、黒色砂層の記述はないが、堆積順から黒色砂層らしき堆積土が確認されており、仰臥伸展葬5体他の埋葬体のほか火葬墓も数基確認されている。埋葬遺体の下端レベルは6.0m～6.74mで仰臥伸展葬は弥生時代中期～古墳時代初頭、火葬骨埋葬は8世紀～10世紀と報告されている。中世の方形竪穴建物、井戸などの遺構は海拔7.5m～8.50mで検出されている。

東100mに位置する地点9では、中世の方形竪穴建物、土坑、井戸、東西方向の道路、溝状土坑等が検出され、その下の黒色砂層1あるいはその下の土層から12軒の竪穴住居址が検出されている。竪穴住居址の年代は弥生時代末～古墳時代初頭、奈良時代から平安時代の年代が考えられている。また、土壙墓が1基検出されている。埋葬体は頭を北から東に110度傾けた仰臥伸展葬で、膝の辺りから鉄鏃6本、骨鏃2本、骨製の曲がった柄の付いた刀子1本が検出されている（註1）。人骨の検出レベルは9.15m前後。北東400mに位置する地点10では、中世の方形竪穴建物を中心とする遺構群が検出され、その下海拔7.40m前後で黒色砂層1が検出されている。

北北東90mに位置する地点11では、鎌倉市の試掘調査の折に確認した結果であるが、海拔9.0m前後で黒色砂層1が確認され、150cmほどの厚さに堆積していたと記憶している。

遺跡範囲の外になるが、地点12では黒色砂層1に近いレベルから仰臥伸展葬の土壙墓が検出され、地点13では海拔2.50m前後で中世の井戸や方形竪穴建物が検出され、その下の海拔2.30m前後で岩盤の波蝕台が検出されている。また、最近の調査であるが材木座二丁目241番地点（図1の地点15）で、石棺墓と仰臥伸展葬の土壙墓が確認されている。



図2 調査地点と周辺の遺跡図

第3節 調査の経過

本地点の現地調査は以下の日程で行った。なお、Ⅱ区の表土掘削とⅠ区の埋め戻し、Ⅲ区の表土掘削とⅡ区の埋め戻しは部分的に重複している。

平成 28 年		3 月 22 日 (火)	Ⅰ区 2 面調査、下層トレンチ調査
2 月 1 日 (月)	Ⅰ区表土掘削、遺構確認	3 月 23 日 (水)	Ⅰ区 2 面調査、下層トレンチ調査
2 月 2 日 (火)	Ⅰ区表土掘削、遺構確認		鎌倉市長他見学
2 月 3 日 (水)	Ⅰ区表土掘削、遺構確認	3 月 24 日 (木)	Ⅰ区 2 面調査、下層トレンチ調査
2 月 4 日 (木)	Ⅰ区表土掘削、遺構確認	3 月 25 日 (金)	Ⅰ区 2 面調査、下層トレンチ調査
2 月 5 日 (金)	Ⅰ区表土掘削、遺構確認	3 月 28 日 (月)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区表土掘削
2 月 8 日 (月)	Ⅰ区攪乱坑掘り上げ	3 月 29 日 (火)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区表土掘削
2 月 9 日 (火)	Ⅰ区攪乱坑掘り上げ	3 月 30 日 (水)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区表土掘削
2 月 10 日 (水)	Ⅰ区攪乱坑掘り上げ	3 月 31 日 (木)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区表土掘削
2 月 12 日 (金)	Ⅰ区 1 面確認		土層剥ぎ取り (1 回目)
2 月 15 日 (月)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 1 日 (金)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区表土掘削
2 月 16 日 (火)	Ⅰ区 1 面調査		土層剥ぎ取り (2 回目)
2 月 18 日 (木)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 4 日 (月)	Ⅱ区表土掘削
2 月 19 日 (金)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 5 日 (火)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区遺構確認
2 月 22 日 (月)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 6 日 (水)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区遺構確認
2 月 23 日 (火)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 7 日 (木)	図面整理他。
2 月 24 日 (水)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 8 日 (金)	Ⅰ区 2 面調査、Ⅱ区遺構確認
2 月 25 日 (木)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 11 日 (月)	Ⅱ区遺構確認・1 面調査
2 月 26 日 (金)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 12 日 (火)	Ⅱ区 1 面調査
2 月 29 日 (月)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 13 日 (水)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 1 日 (火)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 14 日 (木)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 2 日 (水)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 15 日 (金)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 3 日 (木)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 16 日 (土)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 4 日 (金)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 18 日 (月)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 7 日 (月)	崩落土砂の復旧	4 月 19 日 (火)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 8 日 (火)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 20 日 (水)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 9 日 (水)	Ⅰ区 1 面調査、幼稚園児見学会 (園児 18 名、職員 3 名)	4 月 21 日 (木)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 10 日 (木)	Ⅰ区 1 面調査	4 月 22 日 (金)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 11 日 (金)	1 回目空撮準備	4 月 25 日 (月)	Ⅱ区 1 面調査
3 月 14 日 (月)	図面整理	4 月 26 日 (火)	第 2 回目空撮、保育園先生 4 名
3 月 15 日 (火)	1 回目空撮準備	4 月 27 日 (水)	Ⅱ区 1 面調査
	文化財審議委員見学	4 月 28 日 (木)	第 1 回見学会の準備
3 月 16 日 (水)	第 1 回目空撮	5 月 2 日 (月)	第 1 回見学会準備
3 月 17 日 (木)	Ⅰ区 2 面調査、下層トレンチ調査	5 月 6 日 (金)	第 1 回見学会準備
3 月 18 日 (金)	Ⅰ区 2 面調査、下層トレンチ調査	5 月 9 日 (月)	Ⅱ区西側 2 面調査
3 月 21 日 (月)	Ⅰ区 2 面調査	5 月 10 日 (火)	Ⅱ区西側 2 面調査
		5 月 11 日 (水)	第 1 回見学会準備。

5月12日(木)	第1回見学会準備	6月22日(水)	Ⅱ区5面調査。
5月13日(金)	第1回見学会(160名見学)	6月23日(木)	Ⅱ区5面調査
5月14日(土)	Ⅱ区2面調査	6月24日(金)	石棺墓石取り上げ
5月16日(月)	Ⅱ区2面調査	6月27日(月)	石棺墓石取り上げ
5月17日(火)	図面・写真整理		鎌倉市議会議員見学
5月18日(水)	Ⅱ区2面調査	6月28日(火)	図面整理作業。
5月19日(木)	Ⅱ区2面調査	6月29日(水)	石棺墓石取り上げ
5月20日(金)	Ⅱ区2面調査	6月30日(木)	石棺墓下掘り下げ
	保育園児、小学校6年生見学	7月1日(金)	Ⅱ区終了確認
5月21日(土)	Ⅱ区2面調査、石棺墓調査	7月4日(月)	Ⅲ区表土掘削
5月23日(月)	Ⅱ区2面調査、石棺墓調査	7月5日(火)	Ⅲ区表土掘削
5月24日(火)	Ⅱ区2面調査	7月6日(水)	Ⅲ区1面調査
5月25日(水)	Ⅱ区2面調査	7月7日(木)	Ⅲ区1面調査
5月26日(木)	第3回空撮	7月8日(金)	Ⅲ区1面調査
5月27日(金)	Ⅱ区2面調査、石棺墓調査	7月11日(月)	Ⅲ区1面調査
5月30日(月)	図面整理	7月12日(火)	Ⅲ区1面調査
5月31日(火)	Ⅱ区2面調査、4面検出	7月13日(水)	Ⅲ区1面調査
	鎌倉市副市長見学。	7月14日(木)	Ⅲ区1面調査
6月1日(水)	Ⅱ区2面調査、4面検出	7月15日(金)	Ⅲ区1面全景
6月2日(木)	高所作業車による全景	7月19日(火)	Ⅲ区2面調査
6月3日(金)	高所作業車による全景	7月20日(水)	Ⅲ区2面調査
	鎌倉市市長見学	7月21日(木)	図面整理。
6月6日(月)	Ⅱ区4面調査	7月22日(金)	Ⅲ区2面調査
6月7日(火)	Ⅱ区4面調査	7月23日(土)	Ⅲ区2面調査
6月8日(水)	Ⅱ区4面調査	7月25日(月)	Ⅲ区2面調査
6月9日(木)	Ⅱ区4面調査、石棺墓3D測量	7月26日(火)	Ⅲ区2面調査
6月10日(金)	Ⅱ区4面調査	7月27日(水)	Ⅲ区2面調査
	第2中学校生徒見学	7月28日(木)	Ⅲ区終了確認。
6月12日(日)	石棺墓見学会(3850名)、 人骨取り上げ(奈良先生他4名)	7月29日(金)	Ⅲ区2面追加調査
6月13日(月)	人骨取り上げ作業。	8月1日(月)	Ⅲ区2面追加調査
6月14日(火)	Ⅱ区4面調査、石棺墓調査	8月2日(火)	Ⅲ区2面追加調査
6月15日(水)	Ⅱ区4面調査、石棺墓調査	8月3日(水)	Ⅲ区2面追加調査
6月16日(木)	Ⅱ区5面調査	8月4日(木)	Ⅲ区2面追加調査
6月17日(金)	Ⅱ区5面調査、石棺墓3D測量	8月5日(金)	Ⅲ区埋め戻し、機材撤収
6月20日(月)	Ⅱ区5面調査	8月8日(月)	Ⅲ区埋め戻し、機材撤収
6月21日(火)	図面・写真整理。	8月9日(火)	機材撤収
		8月10日(水)	機材撤収

第4節 調査軸の設定

調査で使用した調査軸は、当敷地の測量に際して設置された杭 k108 (x-76092.361、y-26520.779)、k111 (x-76093.991、y-26554.326)、k116 (x-76082.559、y-26543.873) から移動した。なお、これらの杭データは、国土交通省がホームページで公表している都市再生街区基本調査杭 2A160(x-76083.834、y-26563.212) と



図3 グリッド設定図

検証した。

調査に使用したグリット杭は、調査対象地を含む範囲の敷地外南東部に任意の $x_0 \cdot y_0$ ($x-76170.000$ 、 $y-26570.000$) を設定して、そこから北に向かって x 軸を 1 から順に、東に向かって y 軸を 1 から順に付けた。調査対象地のほぼ中央に位置する $x_{30} \cdot y_{30}$ 杭は $x-76140.000$ 、 $y-26570.000$ で緯度 $35^\circ 18' 48''$ 、経度 $139^\circ 32' 28''$ である。海拔高は都市再生街区基本調査杭 2A160 (10.635m) から移動した。

調査前の状況は、北側の約半分が県道鎌倉・藤沢線とあまり高低差の無い平坦地で、南半分は北から南に、東から西に向かってなだらかに下がる地形で、地表面の高さは、北の県道近くで海拔 11.0m、敷地南西で海拔 9.80m、南東で海拔 11.10m である。

第 5 節 基本堆積土層と堆積状況

(1) 基本堆積土層

発掘調査で確認した本地点の基本堆積土層は、各時代の遺構覆土・包含層を一つの層にまとめると、以下の I 層～XIV 層になる。基本堆積土の模式図は図 4 に示したが、各調査区の東壁は I 区東壁の西端は II 区東壁の東 35m、南 6m に、III 区東壁の南端は II 区東壁の北端の北 7.5m、東 1m に位置している。したがって、隣接して提示した各土層には合致しない部分がある。また、図示した II 区の東壁は東西方向に 6m 離れた 2 つの壁と、3m 西に離れたトレンチを合成し、III 区の東壁は 15m 西に離れた井戸 2 の東壁面土層図と合成している。

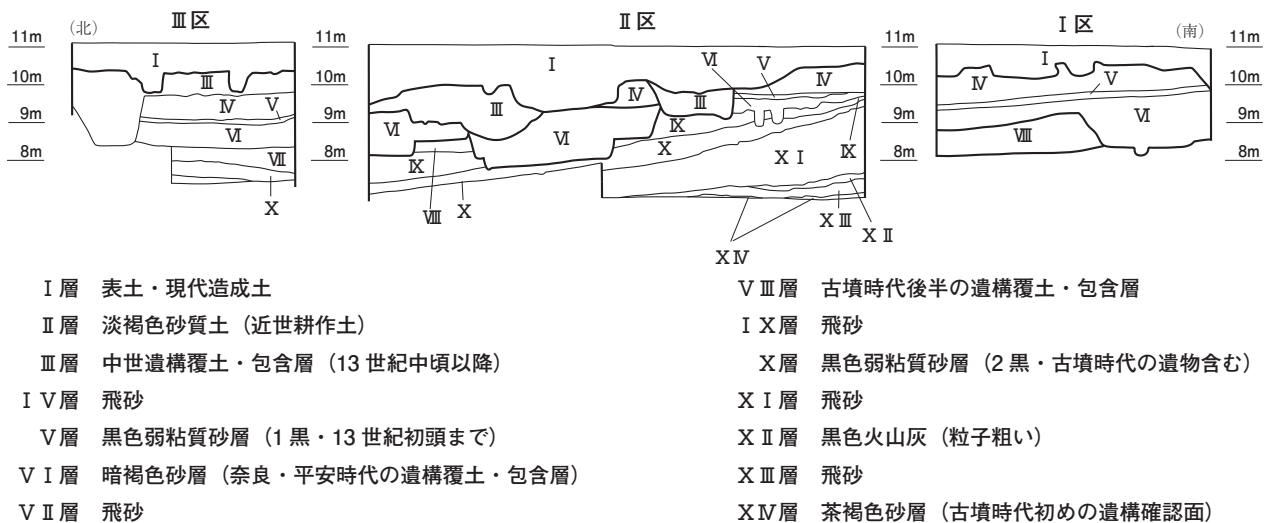


図 4 基本堆積土層図

(2) 堆積状況

本地点で確認された基本堆積土層は、各調査区で複雑な堆積を呈している。そのため、それぞれの面や遺構の項で複雑な堆積状況を個別に説明すると、かえって調査区域全体の堆積状況が捉え難くなってしまうと考えた。本項では調査区内における主な基本堆積土層の堆積状況について説明を加える。

XIV 層は II 区のトレンチ 8～トレンチ 11 内で検出された。上面レベル 7.10m～7.20m で、南から北に、東から西に向かって緩やかに下っている。II 区トレンチ 10 以西では本層の上面に X II 層が薄く堆積している。この部分では X III 層は確認できない。

X II層は粒子の粗い黒色火山灰で、I区の北側からII区にかけて確認できた。III区では調査深度等の制限があって確認できなかった。I区ではx12～x20ライン辺で、1面、2面の遺構群検出面（9.60m～9.70m）に露頭している。これより南では、恐らく削平されて失われている。本層の堆積状況はI区のトレンチ1～トレンチ6（トレンチ3を除く）、II区のトレンチ7～トレンチ11で確認した。その結果、東西方向ではI区のトレンチ2から西に向かって緩やかに下がり、y14辺りで北西に曲りI区の西壁では7.0mのレベルでも確認できない。南北方向ではそれぞれのトレンチで北に向かって下がる斜面堆積が確認できた。I区のトレンチ5では16度前後の傾斜角で北に下がっている。II区のトレンチ部分では傾斜が緩やかになり、II区トレンチ9の南側では7.22m、北側では7.12mで検出される。上本先生の粒度分析の結果では古墳時代前期頃の年代が考えられている。

X層はX II層の上に堆積した南から北に向かって下がるX I層を挟んで、II区とIII区で確認できた。I区ではX II層同様に削平されている。本層は、II区のx30ライン辺で海拔9.60m～9.70mで検出され8度前後の角度で北に向かって落ち込んでいる。III区ではx50ライン辺で海拔7.60m～8.0mで検出されるが、この場所からは逆に北から南に向かって下がっている。したがってx25～x50の間が砂丘間低地と考えられる。II区の北壁際で海拔7.0m～7.45mで検出されているので、幅20m以上、深さ2mほどの低地が東西に延びていたことになる。東西方向では北壁際の東端で7.36m、西端で7.32mを測りほぼ平坦である。

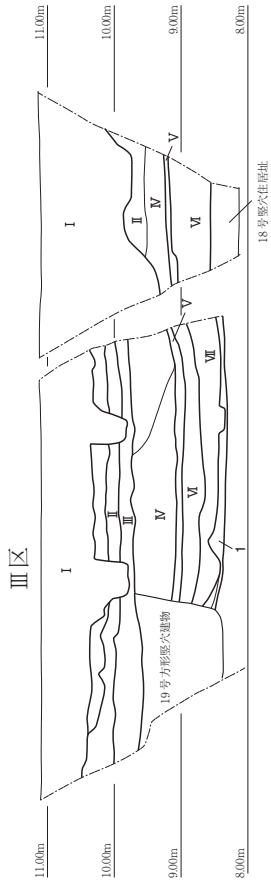
VIII層はX層の砂丘間低地がIX層の飛砂でほぼ埋まった後に、海拔7.70m前後で確認される。II区の石棺墓周辺で部分的に確認した土層であり、調査区内の広がり不明である。石棺墓の石最上部は海拔8.80mで検出されている。

VI層はI区のy42ラインより東、II区の北東側の約半分、III区の東半分で確認できた。I区のy42ライン以西では削平されてVI層は確認できない。II区の西壁では堆積が確認できず、9.10m～9.40mに堆積している宝永火山灰の直下は1面の遺構になる。III区では西側では9.20mのレベルで僅かに確認されるがVIII層との区別が困難で、その下はIX層である。上面レベルはI区の東で9.20m～9.50m、II区の北東部で9.20m、III区の東側で9.0mを測りほぼ平坦な面である。

V層は、I区のy48ラインより東、II区のy24ラインより東、III区のy22より東で検出された。I区のy48ラインの西は基本VI層以下の堆積が露呈し、II区のy24ライン以西、III区のy22ライン以西では基本I層の下が基本VI層になる。本層上面ではI区の北壁際で器肉の厚い手づくねかわらけ大皿が出土している。I区の東壁では傾斜角5度前後で北に下がっている。検出レベルはI区東壁の南で9.80m～10m、北で9.30m～9.40m、II区の東壁の南で9.60m～9.70m、II区の北壁で9.70m、III区の東壁で8.80m～9.10mを測る。しかし、本地点の西20mの地点A（図2）では本層は海拔7.50mで検出されている。

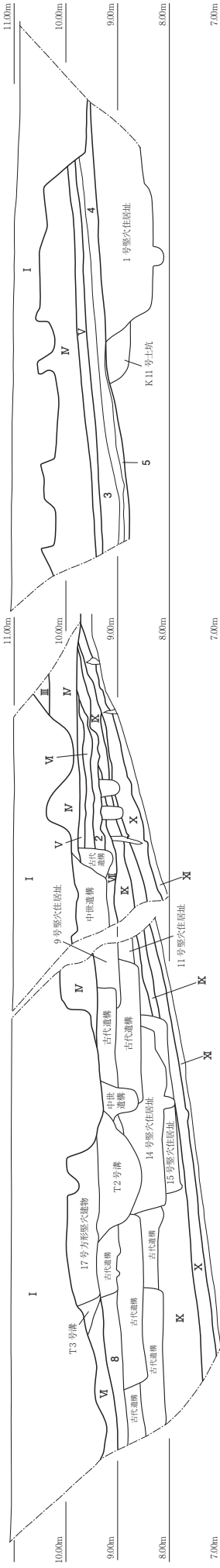
IV層はV層の検出された場所で、50cm～100cmの厚さに堆積している。他の場所では現代攪乱や削平によって失われている。したがって、I区のy48ラインの西、II区のy24の西、III区のy22ラインの西では本層は確認されていない。検出部分ではすべて南から北に向かって緩やかに下がる堆積で、上面レベルはI区の東で9.40m～10m、II区の北東部で9.90m、III区の東側で9.70mを測る。

III層は、IV層を削平・開発した後の生活堆積と考えている。この削平は13世紀中頃と考えている。上面レベルはI区東壁で9.40m～10.50m、III区東壁で9.70m～10.30mを測る。また、II区の西側では、y13ライン辺りで堆積が薄くなり、西壁では9.10m～9.40mに堆積している宝永火山灰直下から1面の遺構が掘り込まれ、本層の堆積は確認できない。

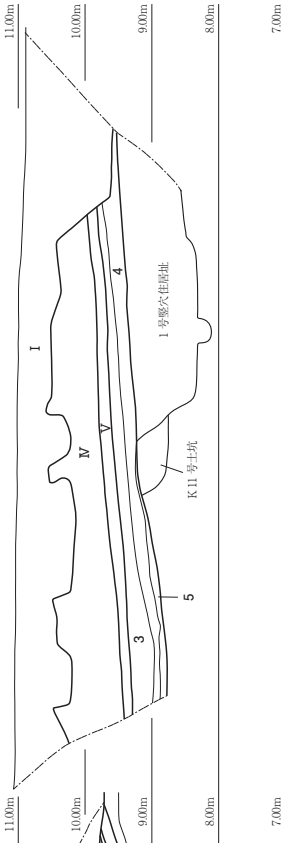


- 1層 灰褐色砂
 - 2層 暗褐色砂質土
 - 3層 灰褐色砂
 - 4層 灰褐色砂層
 - 5層 灰褐色砂層
 - 6層 灰褐色砂質土
 - 7層 粒子の細かい灰褐色砂質土。
 - 8層 貝片を含む灰褐色砂質土。
- V層が斑紋状に点在。
 3層に似るが、V層の薄りが少ない。
 上面に土器片出土。古代の基盤層か。
 炭化物を含み縮まりあり。
 粒子の細かい灰褐色砂質土。

II区東壁



I区東壁



II区北壁

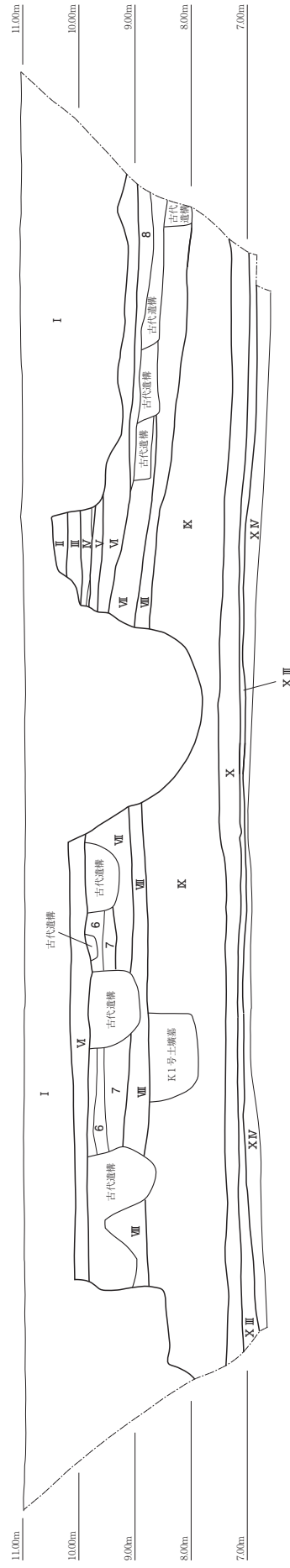


図5 堆積土層図

Ⅱ層は、鎌倉市街地の調査ではⅢ層を削平して堆積している場合が多く、いくつかの地点では層中に宝永火山灰が堆積している。本地点では、明確なⅡ層は確認できなかったが、宝永火山灰がⅡ区の西壁で確認されている。宝永火山灰の確認レベルは北で9.40m、南で9.10mを測り、北から南に向かって緩やかに下がっている。Ⅰ区の西壁ではこの火山灰は検出できなかった。宝永火山灰の上面レベルはⅢ区のⅢ層上面より低い。宝永火山灰の堆積した頃はⅡ区の西壁近くが西に下がる窪地であり、他の場所では削平により失われたと考えられる。

Ⅰ層は本地点における近・現代の宅地造成に関わる堆積である。18世紀始め頃の海浜部は、宝永火山灰の堆積状況から、起伏の激しい砂丘地帯であったことが由比ガ浜南遺跡（由比ガ浜四丁目1101番2・図2地点14）の発掘調査で確認されており、本地点もそうした状況であったと推測できる。近・現代の宅地造成によって砂丘地帯が削平・造成されて本層が堆積したと考えられる。

【註・参考文献】

註1 調査報告書ではこの他に中国製の銅銭3枚が副葬品として提示されているが、調査中の記憶では中世の混入遺物であり、省いた。

地点A 鎌倉市教育委員会にご教授頂いた。

地点2 「長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目204番5）」『鎌倉の埋蔵文化財15』2012年鎌倉市教育委員会。

地点3 齋木秀雄他『長谷小路南遺跡発掘調査報告書』

地点4 齋木秀雄『長谷小路周辺遺跡発掘調査報告書（由比ガ浜三丁目207-1外3筆）』2015年
（有）鎌倉遺跡調査会

地点5 2015年調査。未報告。

地点6 宮田眞他『長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目2番200）』1997年 同調査団

地点7 大河内勉他『長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目194番40）』1997年 同調査団

地点8 宗台秀明他『長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目1262番2、1251番1・2）』2002年
東国歴史考古学研究所

地点9 宗台秀明他『長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目258番1）』1995年 同調査団

地点10 宗台秀明他『長谷小路周辺遺跡（由比ガ浜三丁目228・229外）』1994年 同調査団

地点12 伊丹まどか他「笹目遺跡」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書◎』2001年 鎌倉市教育委員会

地点13 未報告。調査中に確認。

地点14 齋木秀雄他『由比ガ浜南遺跡』

第3章 検出した遺構と遺物

本地点の調査はⅠ区、Ⅱ区、Ⅲ区順に行ったが、各調査区で予測を超えた複雑な堆積土が確認されたため、それぞれの遺構確認面には若干のレベル差が生じている。Ⅰ区では標準Ⅳ層とⅤ層の確認できたy42ラインの東では1面遺構と2面遺構を層位的に区別できたが、標準Ⅳ層と同Ⅴ層が確認できなかったy42ライン以西では、レベル海拔は9.60m～9.70mの標準Ⅵ層以下の面で検出作業を行った。Ⅱ区では、標準Ⅳ層とⅤ層が確認されなかったⅠ区側から表土を掘削したため、東壁～北壁のごく一部に残っていた両層を見逃してしまった。そのため1面と2面の遺構はⅥ層中で確認した。Ⅲ区では標準Ⅳ層中から標準Ⅴ層上面で1面遺構を確認して順次掘り下げて調査を行った。

本来ならば、各区別に遺構・遺物を提示して説明を加えるべきであろうが、ここでは各区の検出遺構を時代区別にまとめて提示した。これによって、当時の砂丘起伏や削平などによる使用空間の変化や遺構の残存状況がより視覚的に理解できると考えている。検出した遺構の時代区分は以下の1面から5面である。

- 1面 中世遺構群（Ⅳ層上面～Ⅴ層上面）
- 2面 古代遺構群（Ⅵ層上面）
- 3面 古墳時代後半（Ⅷ層）
- 4面 古墳時代前半（Ⅹ層上下）
- 5面 弥生時代末～古墳時代初頭（ⅩⅣ層）

以下、各面・各遺構について説明を加えるが、諸々の制約があって検出遺構全部に細かく説明を加えられないので、説明は主要遺構に限った。また、鎌倉石、土丹はそれぞれ砂質凝灰岩切石と破碎泥岩の商品名である。なお、遺物写真図版の右下の番号は各遺構の遺物図版番号と合致している。

第1節 5面の遺構と遺物

基本ⅩⅡ層の堆積を確認するためにⅠ区で6本（トレンチ1～トレンチ6）、Ⅱ区4面下に5本のトレンチを設定した。Ⅱ区のトレンチは既存コンクリート杭の転倒を避けて、コンクリート杭の間に安全を考慮しつつ南北方向に設定した。そのためⅠ区とⅡ区のトレンチの多くは直線的に並んでいない。

調査の結果、トレンチ内のⅩⅣ層上面で覆土に焼土粒を多く含む土坑5基と細かな土器片が集中した遺構1基が検出できた。これらの遺構を5面の遺構とした。遺構が確認できたのは設定したトレンチ内のx26ラインより北、y18ラインより西側に限られる。この遺構確認面を5面とした。確認した遺構覆土の上面にはⅩⅡ層の黒色火山灰が薄く堆積している。この部分で見える限り、両層の堆積には大きな時間差はないと考えている。因みに、ⅩⅡ層は、Ⅲ区では明確に確認できなかったが、Ⅰ区では1面・2面確認面のx12～x20ライン辺で露頭して、Ⅱ区に向かって約16度の傾斜で落ち込んでいる。本面の遺構は砂丘背後のあまり広くない低地に構築された可能性がある。遺構の確認海拔レベルはⅡ区の南で7.20m、北で7.10mである。

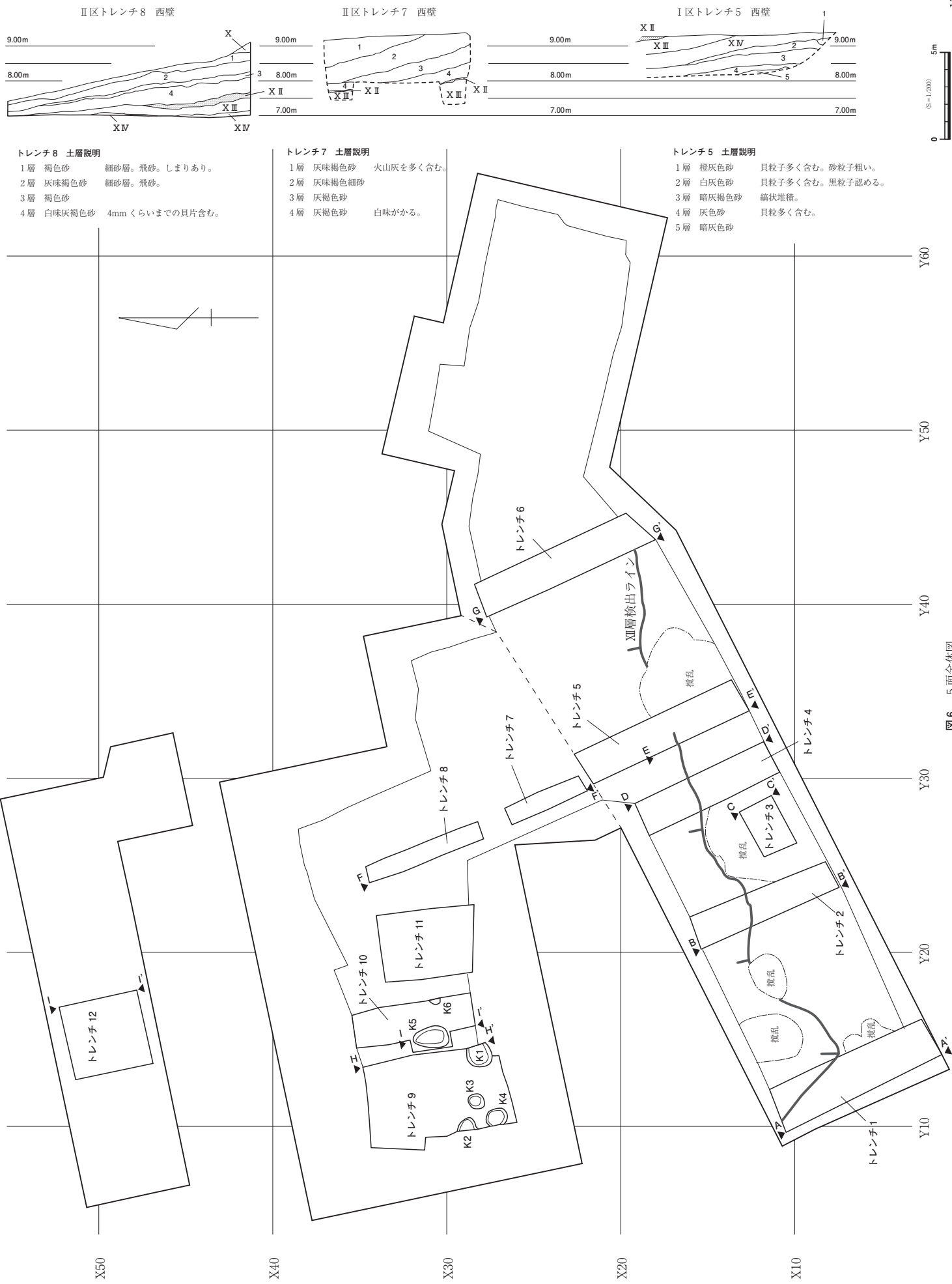
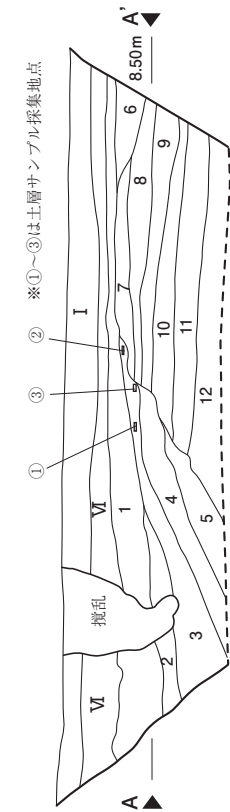


図16 5面全体図

I区トレンチ1 西壁



トレンチ1 土層説明

- 1層 黄白灰褐色砂 (飛砂)
- 2層 黄灰色砂
- 3層 暗灰色砂
- 4層 暗灰色砂
- 5層 灰色砂
- 6層 暗灰色砂 (飛砂)

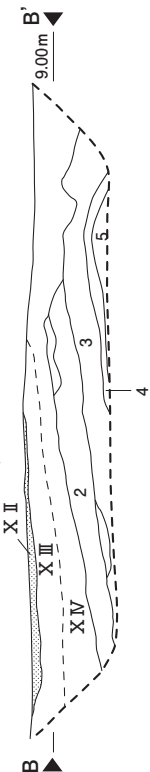
北側で茶褐色砂層が竊状に堆積。
貝粒を多く含む。

- 7層 黄灰色砂 (飛砂)
- 8層 灰色砂 (飛砂)
- 9層 暗灰色砂 (飛砂)
- 10層 灰色砂 (飛砂)
- 11層 黄灰色砂 (飛砂)
- 12層 暗灰色砂 (飛砂)

貝粒を多く含む。
砂粒細かい。

砂粒やや大きい。

I区トレンチ2 西壁



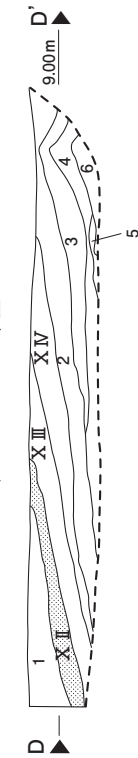
トレンチ2・4 土層説明

- 1層 灰褐色砂
- 2層 白灰色砂
- 3層 黄白色砂
- 4層 暗灰褐色砂
- 5層 暗茶灰色砂
- 6層 灰色砂

貝片を含む。
貝粒子多い。

砂粒やや大きい。

I区トレンチ4 東壁



III区トレンチ12 東壁

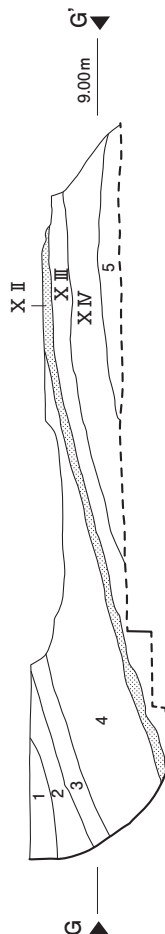


トレンチ3 土層説明

- 1層 暗灰色砂
- 2層 灰褐色砂
- 3層 灰色砂
- 4層 白灰色砂
- 5層 暗灰色砂

貝粒やや多く含む。

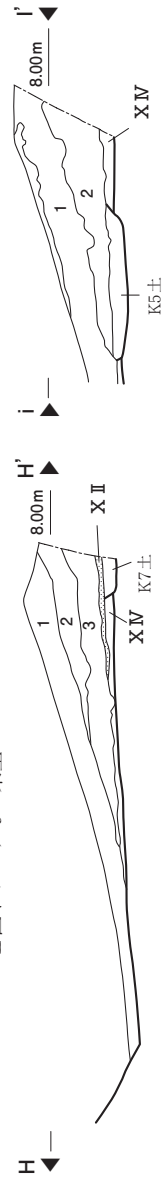
I区トレンチ6 西壁



トレンチ6 土層説明

- 1層 暗褐色砂質土
- 2層 灰色砂
- 3層 茶灰色砂
- 4層 灰色砂
- 5層 暗灰色砂

III区トレンチ9 東壁



トレンチ9・10 土層説明

- 1層 暗褐色砂
- 2層 灰褐色砂
- 3層 灰褐色砂

3mm以下の貝片含む

1の混じりがある。色調は暗め。

微細な貝片多く含む。1、2より粗い。

(S=1/100)



図7 トレンチ堆積図

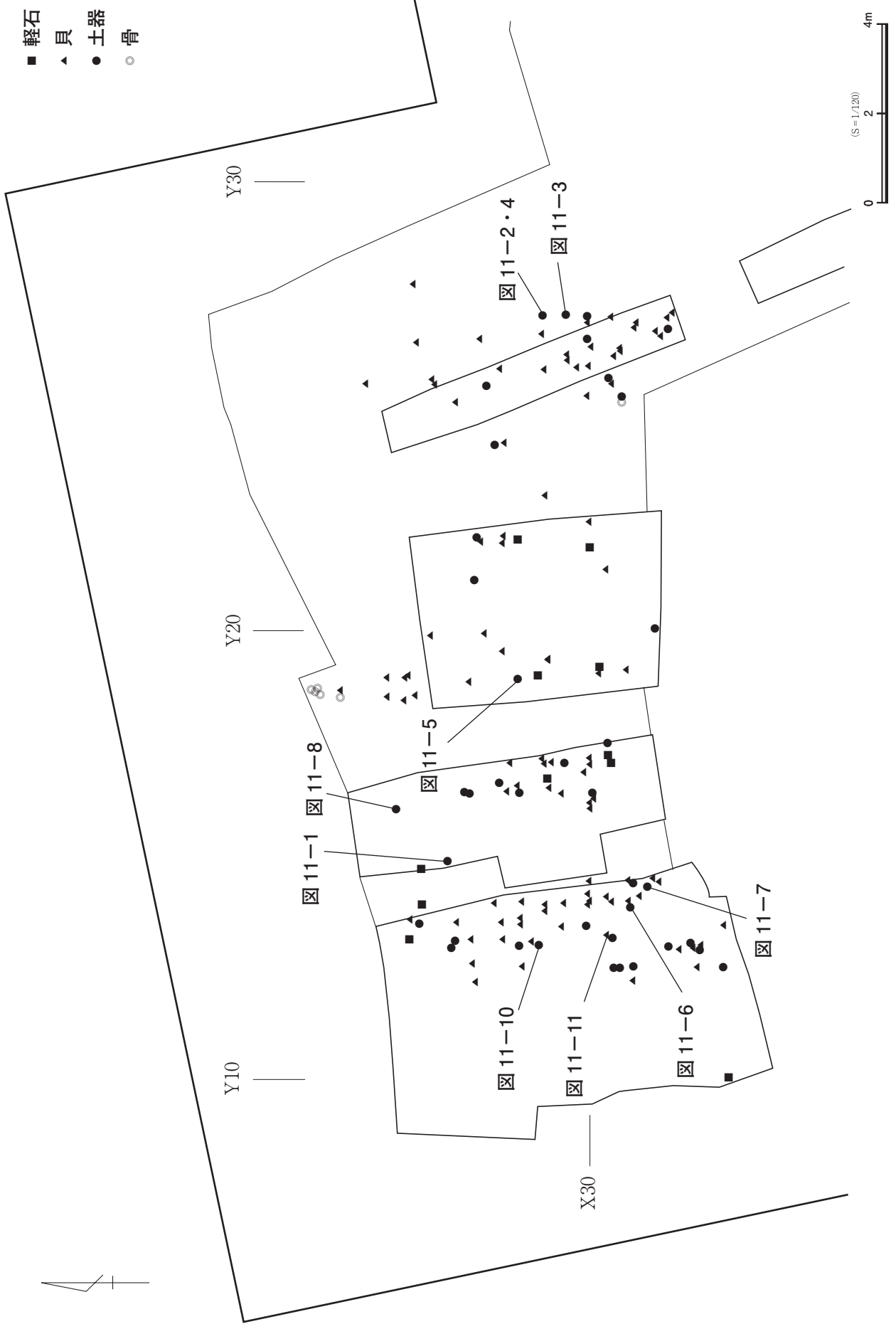
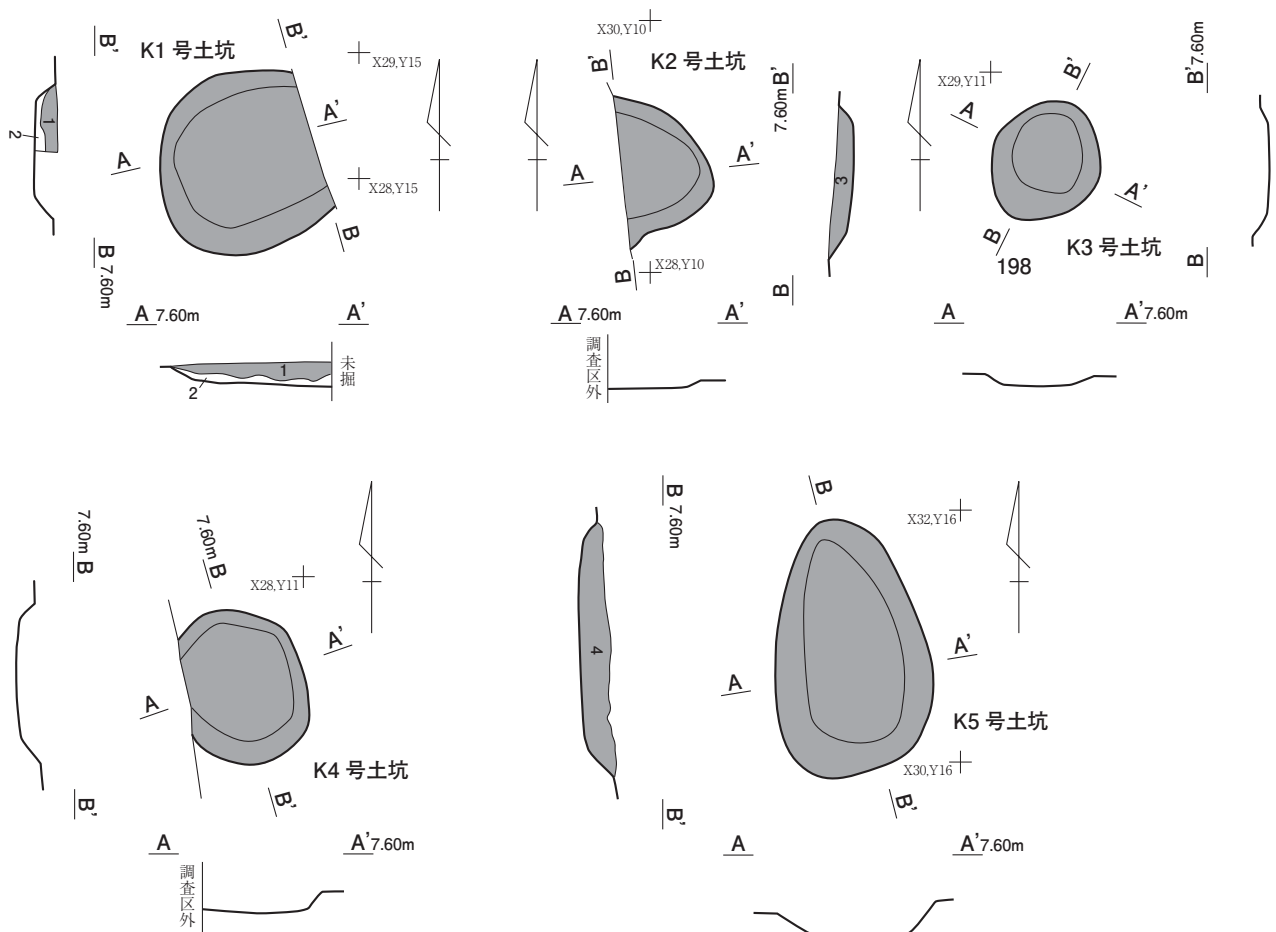


図8 5面遺物分布図



5面焼土土坑 土層説明

- 1層 暗赤褐色砂 焼けた砂。炭化物・土丹粒子を含む。
- 2層 暗黄褐色砂 1層が斑に少量混じる。
- 3層 暗褐色砂 1層と同質も焼けかたが弱く、色調に赤味がない。
- 4層 赤褐色砂 焼けた砂。火山灰が部分的に少量まじる。

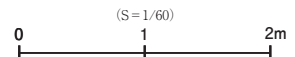


図9 5面土坑 (1)

K1 号土坑

本址はⅡ区の x27～28、y13～14 の間に位置し、東の一部はトレンチ外に延びている。平面形は不整形円で、確認規模は長軸 142cm、短軸 (126)cm、深さ 14cm、底面レベル 7.09m を測る。覆土は 1 層が焼土粒と炭化物を多く含む暗赤褐色砂層、2 層が黄褐色砂層で焼土ブロックが少量混じっている。底面には火を受けた痕跡が残っている。

遺物は土師器甕片が 5 点出土しているが、図示できる遺物はない。

K2 号土坑

本址はⅡ区の x28～29、y9～10 の間に位置し、西側の約半分はトレンチ外に延びている。平面形は不整形円で、確認規模は長軸 110cm、短軸 (82) cm、深さ 5cm、底面レベル 7.09m を測る。覆土は焼土粒と炭化物を含む赤褐色砂層で、底面には部分的に火を受けた痕跡が残っている。

遺物は出土していない。

K3 号土坑

本址はⅡ区の x27～28、y11 の間に位置している。平面形は不整形円で、確認規模は長軸 100cm、短軸 90cm、深さ 7cm、底面レベル 7.11m を測る。覆土は焼土粒と炭化物を含む赤褐色砂層で、底面と東

壁の一部に火を受けた痕跡が残っている。

遺物は出土していない。

K4号土坑

本址はⅡ区の x26～27、y9～10 の間に位置し、西側の一部はトレンチ外に延びている。平面形は不整形円で、確認規模は長軸 125cm、短軸 (92) cm、深さ 12cm、底面レベル 7.15m を測る。覆土は焼土粒と炭化物を含んだ赤褐色砂層で、底面には部分的に火を受けた痕跡が残っている。

遺物は出土していない。

K5号土坑

本址はⅡ区の x29～31、y14～15 の間に位置している。平面形はやや一端がつぼまる楕円形で、確認規模は長軸 203cm、短軸 125cm、深さ 21cm、底面レベル 6.90m を測る。覆土は焼土粒と炭化物を少量含んだ黒褐色砂層で、焼土粒は他の土坑に比べて少なく、底面や壁面にも火を受けた痕跡は見られない。

遺物は土師器甕片が2点出土しているが、図示できる遺物はない。

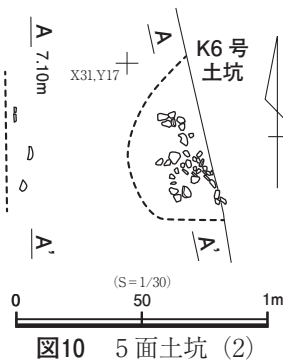


図10 5面土坑 (2)

K6号土坑

本址はⅡ区の x30、y17 の間に位置し、約半分は東トレンチ外に延びている。土器片の集中範囲として捉えたが、直ぐ東のコンクリート杭の打設によって土坑の有無は確認できなかった。集中範囲は長軸 65cm、短軸 (32) cm、土器取り上げ後の海拔レベルは 7.01m を測る。

遺物は土師器甕の小片が70点出土しているが、コンクリート杭の打設によって失われた部分も多く、接合は出来なかった。

5面検出時出土遺物

遺構を確認する際に散乱する貝殻や細かな土器片が多く出土している。実測し得る遺物を図12に示した。1～10は土器。1は壺で肩部は沈線区画内を文様帯(網目状の付加条縄文か)で施文されている。文様帯以外の部分には赤彩がみられる。2～10は甕で、2～4は胎土や色調の特徴から同一個体となる可能性がある。2・3の口縁端部は工具による交互押捺、頸部外面は輪積み成形痕をヘラでナデて潰している。3・4の内面は横位のミガキ調整、4の外面はヘラナデ後に縦位の疎ろなミガキが見られる。5～10も甕で5～7、8・9はそれぞれ同一個体となる可能性がある。5～7は輪積み成形痕を残す頸部片で、指頭痕がよく残る。8・9は、内外面とも細かいハケ調整が施されている。10は脚台。これらの遺物は、弥生時代終末～古墳時代初頭の所産と考えられる。11はアワビの貝殻を使用した貝包丁で、1箇所径0.5cmの孔があげられている。腹縁の端から1cm程は内外面とも使用による摩滅が認められる。12・13は管状のサンゴで錘として使用した可能性を考えている。14は軽石で径1.5～2.0cmの不整形な孔があいている。浮子などの可能性を考えている。

表1 5面出土遺物観察表

図版No.	番号	面	遺構名	器種		法量			備考
						口径/長径	底径/短径	器高/厚	
11	11	5	5面	貝製品	貝包丁	長[11.7]	短[7.2]	厚0.4	穿孔あり アワビ
11	12	5	5面	貝製品	浮	長3.7	巾1.7	厚(0.5)	サンゴ
11	13	5	5面	貝製品	浮	長2.5	巾2.0	厚0.4～0.6	サンゴ
11	14	5	5面	石製品	錘	長10.1	短5.4	高4.5	軽石製

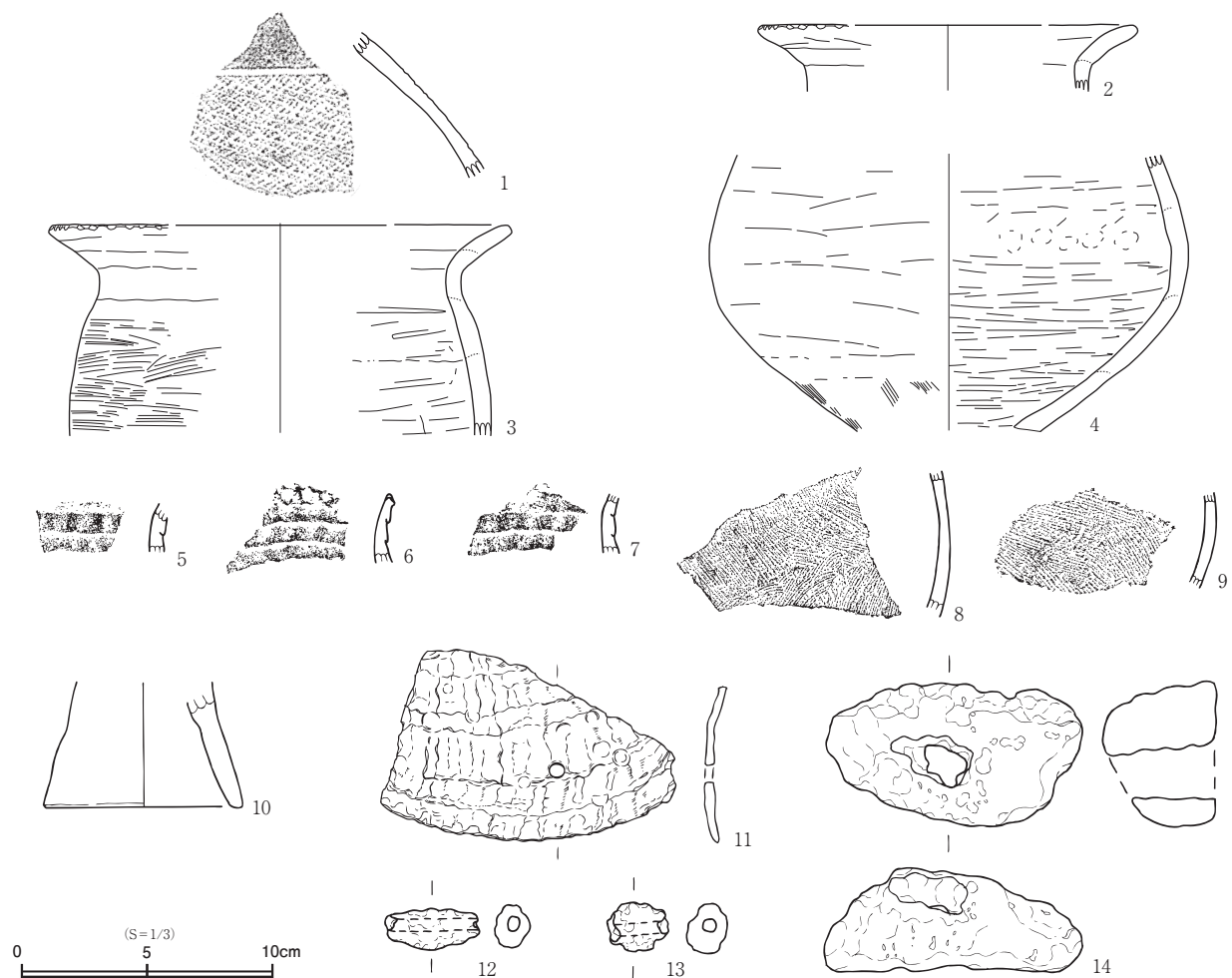


図11 5面出土遺物

表2 5面出土土器観察表

図版 No.	番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
				口径	底径	器高	
11	1	土器	壺	—	—	—	残存：胴小片 焼成：良 胎土：細砂質 色調：淡橙褐色 / 赤褐色
11	2	土器	甕	(14.8)	—	[2.6]	残存：口1/6 焼成：良 胎土：角閃石微量 色調：赤橙色 / 灰黒色 3・4と同個体か
11	3	土器	甕	(18.0)	—	[8.3]	残存：口1/6～胴 焼成：良 胎土：細砂質、白色針状物質微量 色調：橙褐色 / 黒灰色 2・4と同個体か
11	4	土器	甕	—	—	[11.0]	残存：胴1/3 焼成：良 胎土：角閃石微量 色調：赤橙色 / 灰黒色 2・3と同個体か
11	5	土器	甕	—	—	—	残存：頸小片 焼成：良 胎土：白色針状物質微量 色調：橙褐色 6・7と同個体か
11	6	土器	甕	—	—	—	残存：頸小片 焼成：良 胎土：白色針状物質微量 色調：橙褐色 5・7と同個体か
11	7	土器	甕	—	—	—	残存：頸小片 焼成：良 胎土：白色針状物質微量 色調：橙褐色 5・6と同個体か
11	8	土器	甕	—	—	—	残存：胴小片 焼成：良 胎土：細砂質、白色針状物質微量 色調：橙褐色 9と同個体か
11	9	土器	甕	—	—	—	残存：胴小片 焼成：良 胎土：細砂質、白色針状物質微量 色調：橙褐色 8と同個体か
11	10	土器	台付甕	—	[7.9]	[5.0]	残存：頸小片 焼成：良 胎土：長石少量 色調：淡橙褐色

第2節 4面の遺構と遺物

Ⅱ区全域とⅢ区の一部で確認された基本X層の直上から直下にかけて出土した散乱遺物と埋設土器2箇所、焼土遺構1箇所を4面の遺構とした。X層はⅠ区の北東隅で僅かに確認され、Ⅲ区の1面井戸2（遺構256）の掘り込み壁を利用したトレンチの東西の壁で確認されている。

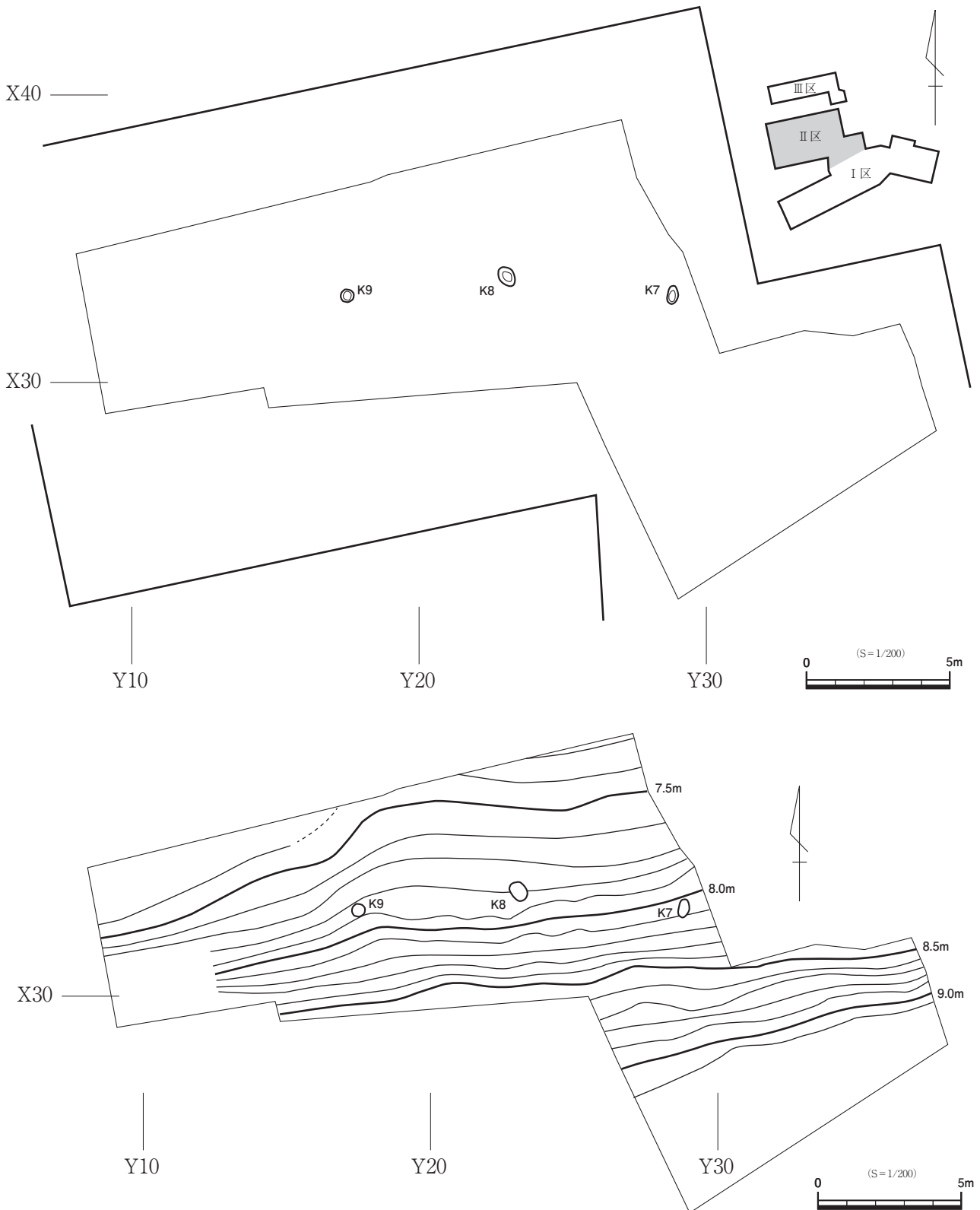


図12 4面全体図・等高線図

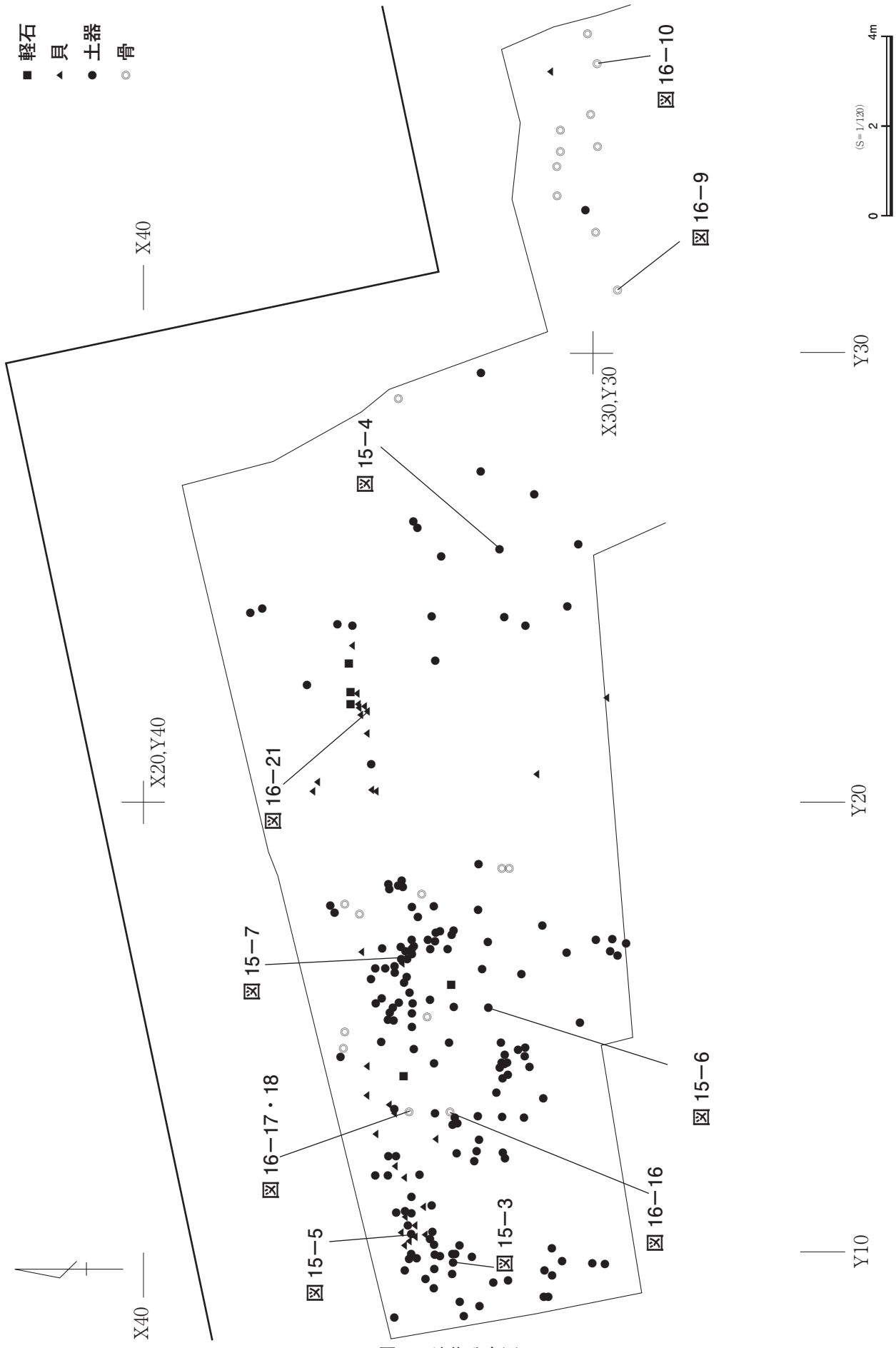
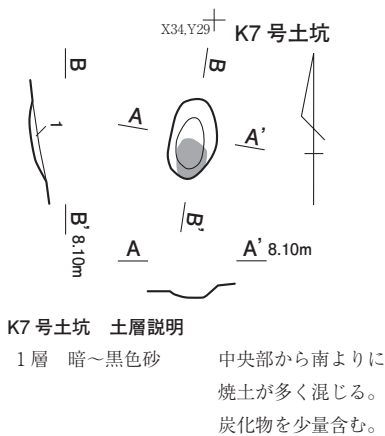


図13 遺物分布図

る。Ⅲ区では掘削深度に制限がありX層上下の調査は行わなかった。X層はⅡ区の北壁近くでは比較的平坦であるが、南のⅠ区に向かっては傾斜角8度前後で上っている。上面レベルは、東壁で見ると、Ⅱ区の南で9.10m、Ⅱ区の北で7.40m～7.80m、Ⅲ区の北で8.0m、南で7.60mを測る。本面の遺構は、幅20m前後の東西に延びる砂丘間低地内に構築されたと考えられ、検出した埋設甕や散乱する土器片の多くは南に向かって上る斜面から見つかっている。竪穴住居址などは確認されていない。

K7号土坑

本址はⅡ区のx32～33、y28の間の斜面上に位置している。平面形は南北に長い楕円形で、確認規模は長軸63cm、短軸37cm、深さ9cm、底面の海拔レベルは7.82mを測る。覆土は黒褐色砂層で炭化物を少量、焼土粒子少量を含む。断面形は浅い皿型で、底面の中央から南壁にかけてやや火熱を受けた痕跡が残っている。屋外の炉の可能性もあるが、ここでは単に火を燃やした痕跡のある土坑としておく。



K8号土坑

本址はⅡ区のx33、y22～23の間の斜面上に位置している。土坑の中に台付甕が倒れた状況で出土している。土坑は不整円形で、覆土は黒褐色砂質土。確認規模は長軸70cm、短軸52cm、深さ18cm、底面の海拔レベルは7.48mを測る。台付甕は、台部が東にあり西に向かって倒れた状況で確認できた。土坑内に倒した状態で埋めた可能性を考えている。

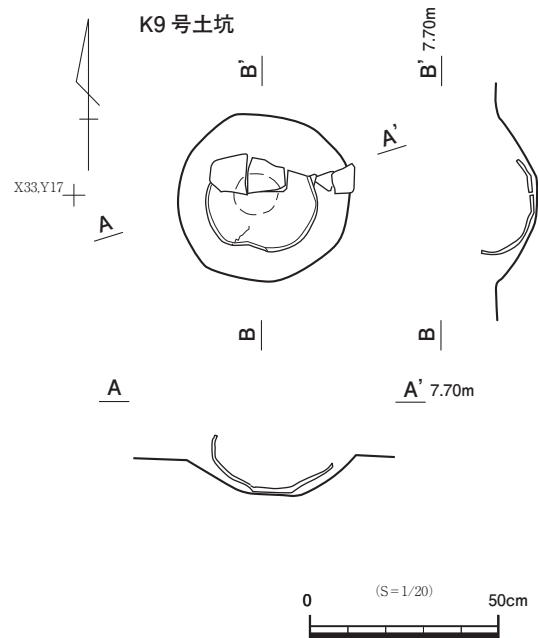
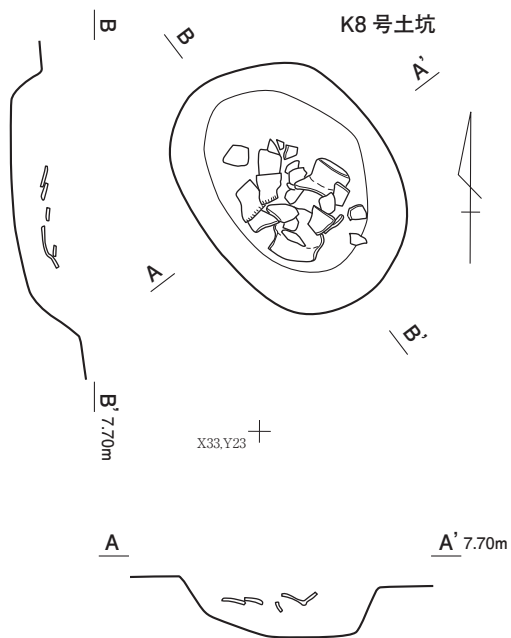


図14 4面土坑

K9号土坑

本址はⅡ区のx32～33、y17の間に斜面上に位置している。土坑は不整円形で、覆土は黒褐色砂質土。土坑の確認規模は長軸45cm、短軸44cm、深さ13cm、底面の海拔レベルは7.46mを測る。土坑内に壺がやや北に傾いた状態で埋められているが、頸部から上は検出できなかった。

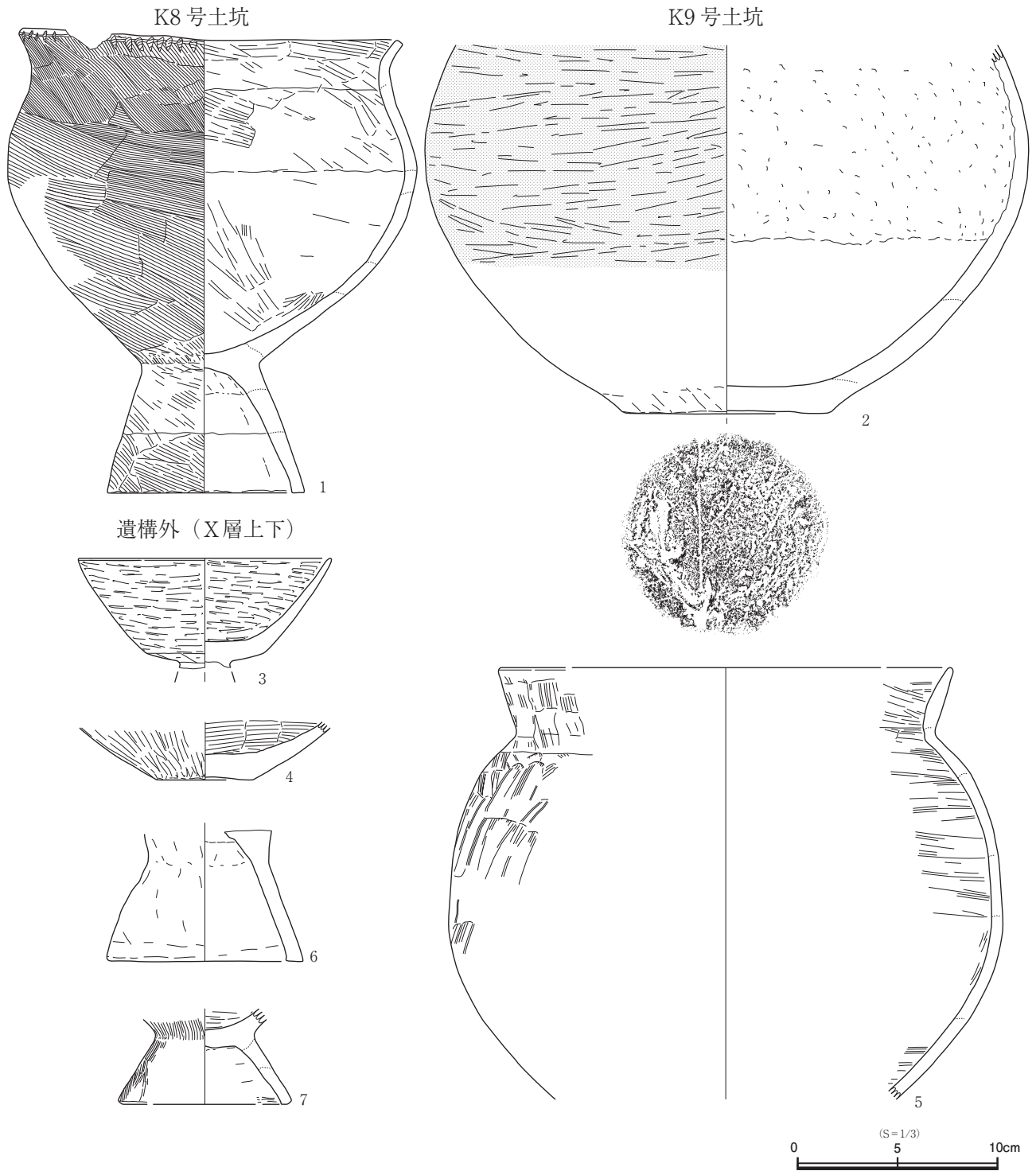


図15 4面出土遺物(1)

図15には4面の出土土器を示した。1はK8号土坑から出土した台付甕。接合により、ほぼ完全な形に復元できた。胴部上位に最大径があり、口縁端部はハケ状工具で面取りした後、端面の下辺にキザミを施している。内面・外面ともに焦げが付着している。脚部～胴部を通じ、成形時の粘土紐積み上げ部分で破断する様子がみられた。2は壺の胴～底部で、全周する。底部外面には木葉痕を残し、胴部外面は赤彩・ヨコヘラミガキを施している。胴部内面は丁寧にナデ調整されているが、上位は器面が剥離して荒れている。3～7は標準X層を挟んだ上下で出土し、遺構への帰属は把握できなかった。3は高坏の坏部で、碗形を呈する。内外面ともに非常に緻密なヨコヘラミガキを施して仕上げている。4は壺の底部片、5～7は甕。以上は古墳時代初頭～前期の所産。

表3 4面出土土器観察表

図版No.	番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
				口径	底径	器高	
15	1	土器	台付甕	18.6	9.8	23.1	残存：ほぼ完形 焼成：普通 胎土：粗砂粒多量 色調：淡橙褐色 / 黒褐色 [1200]g
15	2	土器	壺	—	9.5	[23.3]	残存：胴～底完存 焼成：良 胎土：細砂質、白色針状物質、雲母、角閃石 色調：淡黄褐色 / 赤褐色 胴外面上部に赤彩
15	3	土器	高坏	12.6	—	[5.4]	残存：坏部完存 焼成：良 胎土：密、白色針状物質微量 色調：暗赤褐色
15	4	土器	壺	—	5.7	[3.0]	残存：底1/2 焼成：良 胎土：密 色調：黒色 底部外面ヘラミガキ 外面斜格子文（線描き or 網目の原体押圧か）
15	5	土器	甕	(22.4)	—	[21.5]	残存：口わずか～胴 焼成：良 胎土：白色針状物質、角閃石少量 色調：赤橙色 / 黒灰色
15	6	土器	台付甕	—	9.8	[6.9]	残存：脚完存 焼成：普通 胎土：白色砂粒少量 色調：赤褐色 内外面に白色の付着物
15	7	土器	台付甕	—	(7.6)	[4.8]	残存：脚部 焼成：良 胎土：粗雑、白色針状物質 色調：赤橙色

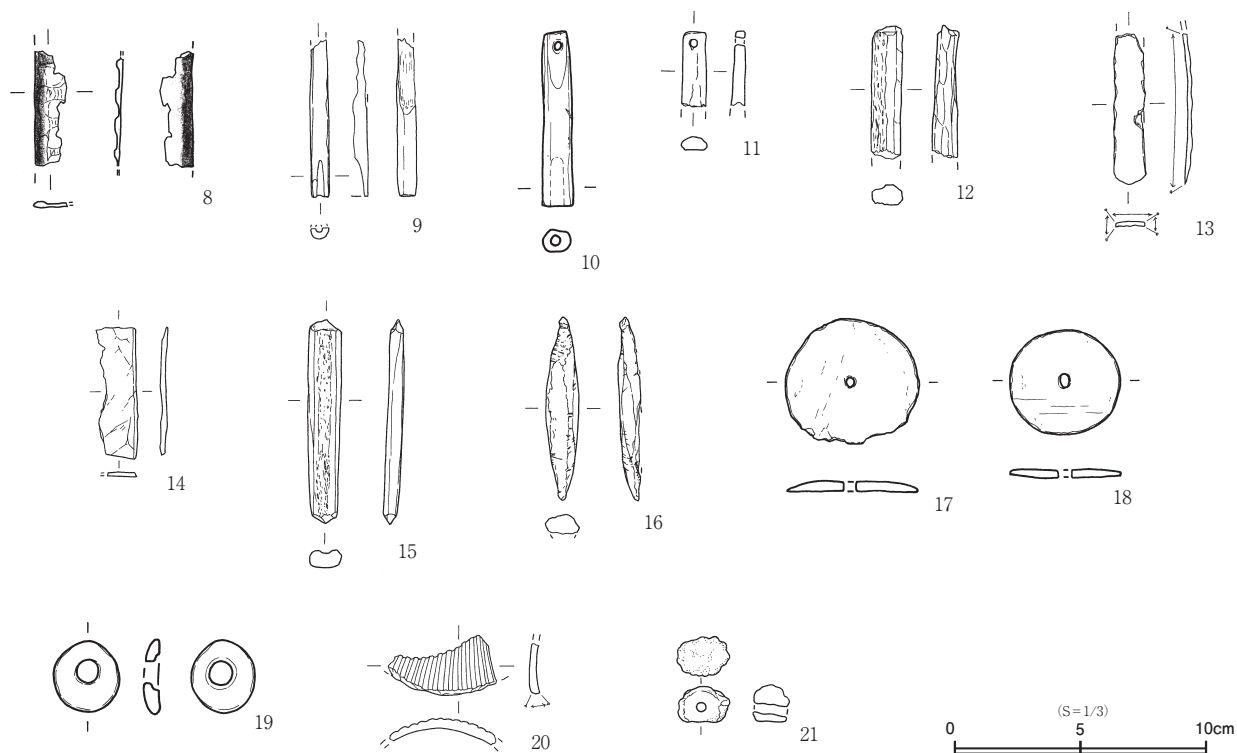


図16 4面出土遺物 (2)

表4 4面出土遺物観察表

図版No.	番号	面	遺構名	器種	法量			備考	
					口径/長径	底径/短径	器高/厚		
16	8	4	4面	骨製品	卜骨	長[4.5]	巾[1.2]	厚0.25	被熱痕あり ウマ肋骨
16	9	4	4面	骨製品	釣針未成品	長(6.2)	巾0.7	厚(0.4)	再利用
16	10	4	4面	骨製品	釣針	長6.8	巾1.1	厚0.9	ウマ、ウシ骨?
16	11	4	4面	骨製品	釣針	長[2.9]	巾1.0	厚0.5	ウマ、ウシ骨?
16	12	4	4面	骨製品	釣針未成品	長[5.2]	巾1.2	厚0.8	シカ
16	13	4	4面	骨製品	加工骨	長[5.9]	巾1.2	厚0.2	
16	14	4	4面	骨製品	加工品	長[5.1]	巾[1.4]	厚0.2	イノシシ牙
16	15	4	4面	骨製品	未成品	長8.1	巾1.3	厚0.6	再利用
16	16	4	4面	骨製品	未成品	長7.1	巾1.2	厚0.7	シカ
16	17	4	4面	骨製品	紡錘車	直径5.2	-	厚0.4	
16	18	4	4面	骨製品	紡錘車	直径4.3	-	厚0.3	
16	19	4	4面	貝製品	貝輪	長2.8	短2.5	厚0.6	イモガイ
16	20	4	4面	貝製品	貝輪	長[4.0]	短[2.3]	厚0.2~0.4	アワビ
16	21	4	4面	貝製品	浮	長2.1	短1.5	厚1.4	サンゴ

第3節 3面の遺構と遺物

基本X層の砂丘間低地が海岸からの飛砂で埋没した後に構築された遺構を3面の遺構とした。石棺墓1基と土壙墓1基が検出されたが、その他の遺構は確認できなかった。本面に関わる堆積土はII区の北壁と東壁の北側の一部で部分的に確認されている。調査地域全体に3面の生活面が広がっていた可能性は低いと考えている。

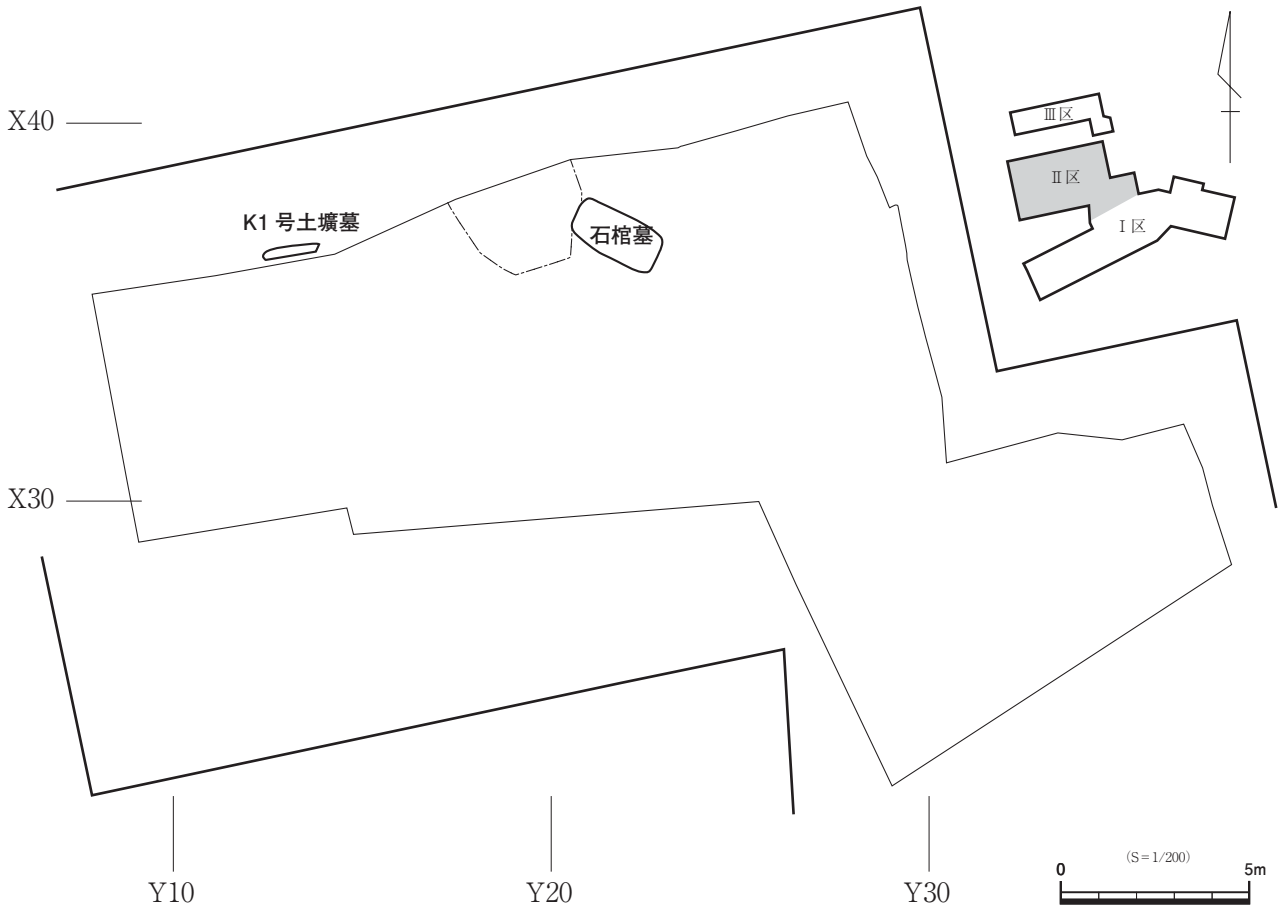


図17 3面全体図

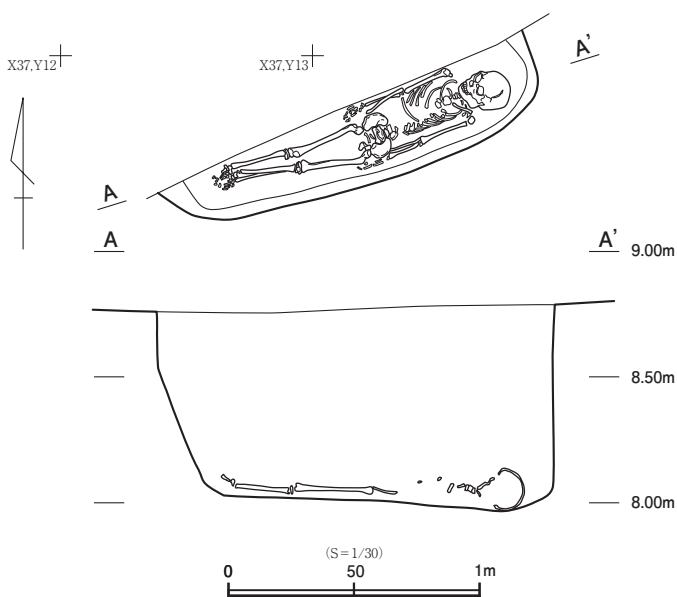


図18 K1号土壙墓

K1号土壙墓

本址は調査区の x36、y12 の間の北壁で検出された。石棺墓より西に約8m離れた場所に位置している。土坑の確認規模は長軸150cm、短軸50cm、深さ40cm、底面の海拔レベルは8.50m前後を測る。遺体は、頭を東南に向けた仰臥伸展葬ではほぼ全身の骨格が検出できた。埋葬方向はN-73°-E。現地で計測した身長は115cm。新潟医療福祉大学の奈良貴史氏の観察では、身長未計測、性別不明、年齢は7～8歳と考えられる。人骨周辺から副葬品は出土していない。

石棺墓

本址は調査区の x36 ~ 37、y19 ~ 22 の間で検出された。西側の一部は現代攪乱によって壊されているが、石棺の残存状況は良い。以下、調査で確認した土坑、石棺、埋葬体について説明を加えるが、使用されている石は、海岸の波打ち際で波に揉まれて丸くなった礫石で、砂質凝灰岩の 1 石をのぞきすべて泥岩である。本址は現代攪乱の壁面に露呈した石を検出する過程で確認した遺構であるが、本址を覆うようなマウンド状の高まりは確認できなかった。

(石棺の構築)

石棺構築の基盤層となっている基本区層（飛砂）と土坑覆土の判別が困難で、石積の外側に幾つかのトレンチを設定してようやく隅丸長方形の土坑を検出した。土坑の確認規模は長軸 248cm ~ 250cm、短軸 108cm ~ 118cm。深さは 20cm、底面の海拔レベルは 8.20m 前後を測る。確認した土坑の深さは 20cm であるが、石積みのレベルを考慮すると 50cm 前後の深さが考えられる。底面は平坦で、土坑の主軸方位は、比較的良好な南壁の下端で計測すると N-118° -E である。

調査では、石棺の構築に際して少なくとも 4 段に分けて積んだ状況を確認することが出来た。底面には泥岩の小片（破片）が敷かれているが、敷きかたは粗く平坦な面を造る意図は少なかったと考えている。底面に泥岩の小片を敷いたのはすべての石積みが終わってからの可能性が高いが、ここでは 1 段目と共に図示している。

1 段目には石棺の基礎となる大きな石を配置している。土坑の規模や埋葬する遺体の大きさを考えたか、まず東と西の石で長さを決めその後北壁に 4 石、南壁に 5 石を並べている。北壁の 4 石は比較的直線を保っているが、北壁の石 77 と石 78 は最後にやや強引に組んだようで、接合部が外側に突出している。1 段目の大きな 11 石には加工した痕跡が明瞭に残っているが、特に石棺内面には平らに削った痕跡が著しい。接合・復元は試みていないが、これらの加工に際して生じた破片が底面に敷かれたと考えている。また 1 段目の組み方などから、現地で石を加工しながら組んだのではなく、石材の加工は本址から少し離れた場所で行い、運び込んで組上げたと考えている。なお、1 段目に図示した石 79、石 86、石 87、石 90 は本来 2 段目に属す石であるが、2 段目では隠れてしまう事もあり、本段で図示した。

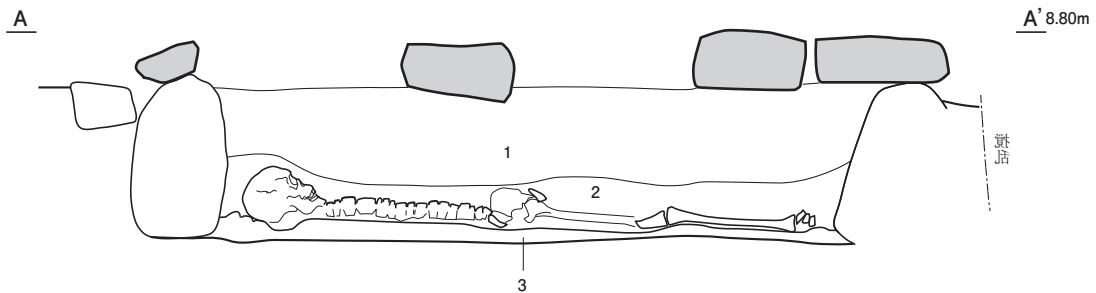
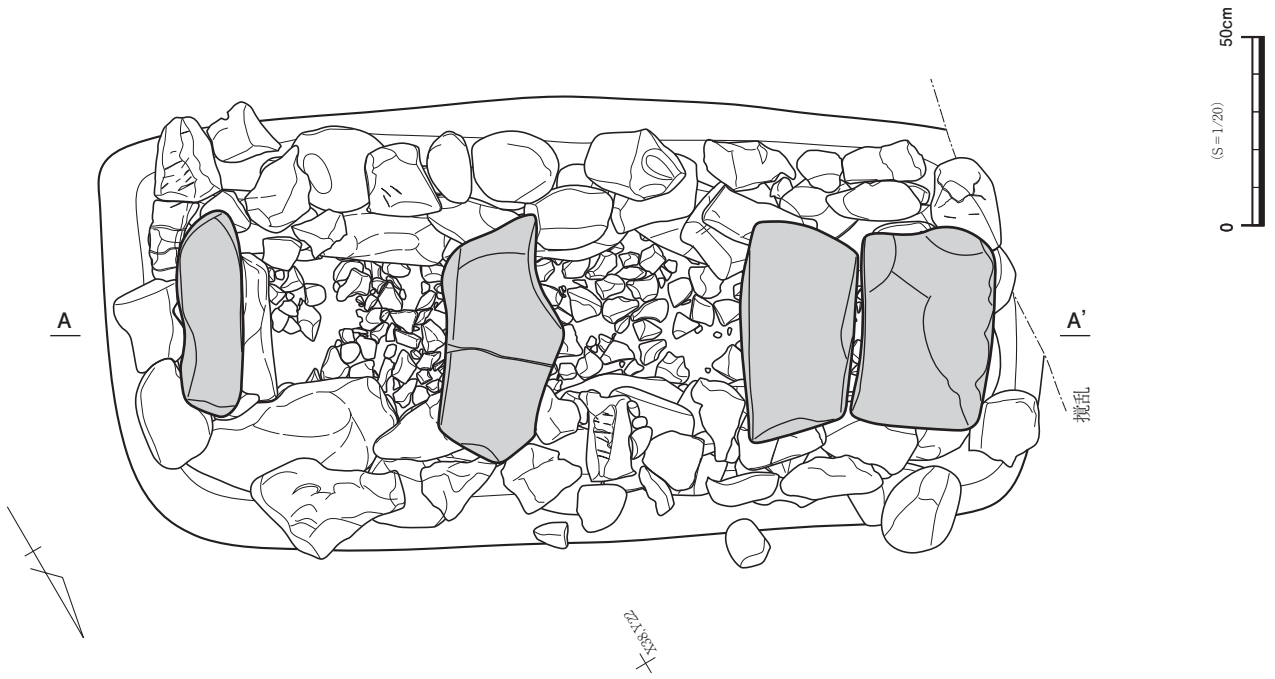
2 段目は 1 段目で生じた隙間を充填するように、主に 1 段目の背後を中心に、北壁で 13 石（内 2 石は 1 段目で図示）、南壁で 9 石（内 2 石は 1 段目で図示）、東壁の南北の隙間で 2 石が積まれている。

3 段目は 2 段目の上と東壁石の背後を中心に、北壁で 5 石、南壁で 5 石、東壁で 5 石、西壁で 1 石を積んでいる。石に残る加工痕は少ないが、石 44 の上部は平坦に削られている。

4 段目は土坑内に石を充填し、高さを調整して天井石を載せられるように北壁で 14 石（石 31 西の小石 3 石を除く）、南壁で 17 石、東壁で 1 石、西壁で 3 石を積み上げている。南壁で見ると、4 段目の石は土坑掘り方に沿って直線的に配され、この時点で土坑内がほぼ石で充満している。上部の加工痕は北壁の石 31 と南壁の石 22 では良好に残っている。

5 段目の天井石は東壁石の上で 1 石、約 50cm 離れて 1 石、約 50cm 離れて 2 石の計 4 石が検出された。他の天井石は後世に持ち去られたと考えている。石は平らに加工され上面レベルは 8.70m から 8.80m を測る。

以上の結果、礫石 93 石を使用した石棺の全体規模は長軸 250cm、幅 118cm で、埋葬施設の規模は 1 段目で計測すると、石 82 と石 89 の間が 152cm、石 80 と石 83 の間が 32cm、石 78 と石 85 の間が 37cm を測る。



※A-A' 人骨は太線のみ断面の実測ライン。細線は推定ライン及び人骨の部位を判りやすくするために加えた補助線。

石棺墓 土層説明

- | | |
|----------|-------------------|
| 1層 黄色褐色砂 | 粒子粗い。2mmほどの貝片を含む。 |
| 2層 暗茶褐色砂 | 腐植土が混じるか。 |
| 3層 泥岩片 | |

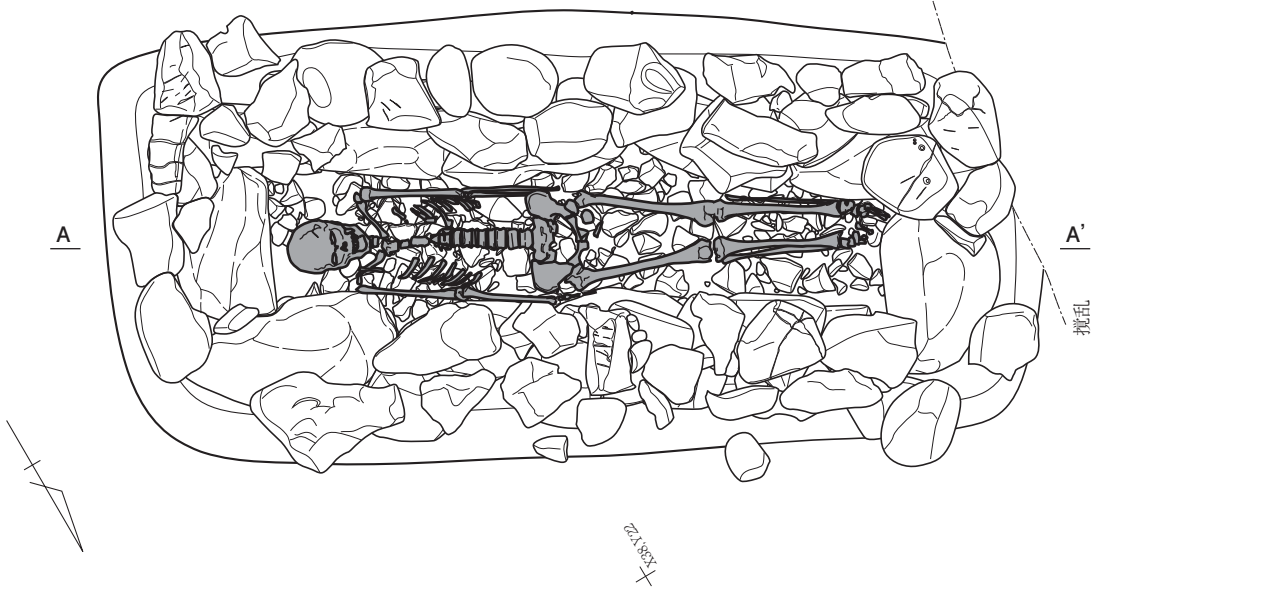


図19 石棺墓 (1)

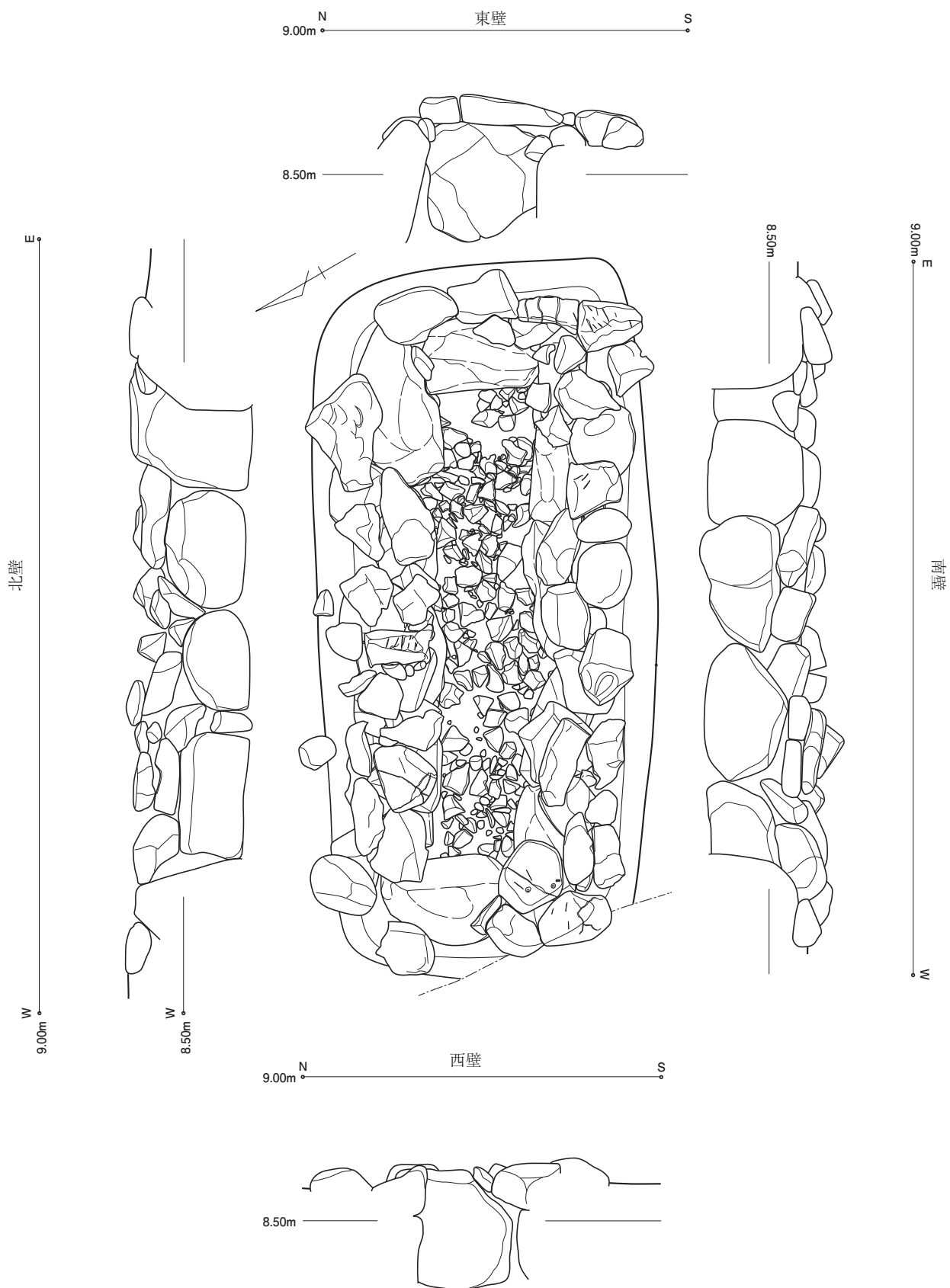
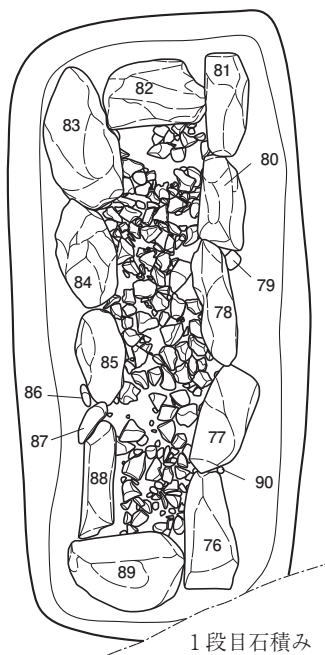
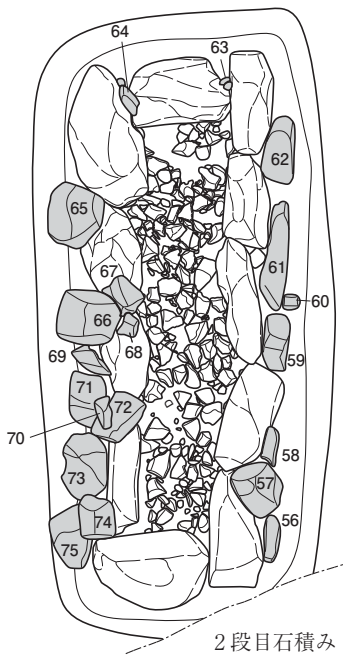


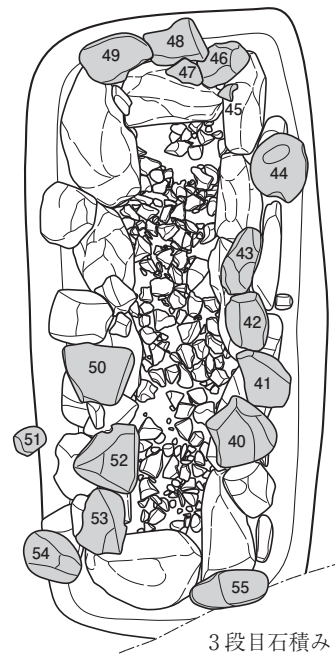
图20 石棺墓 (2)



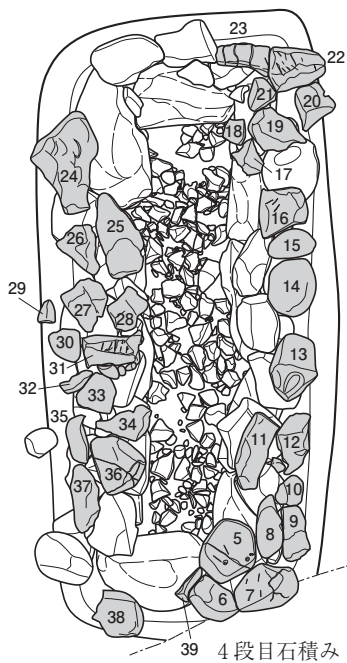
1段目石積み



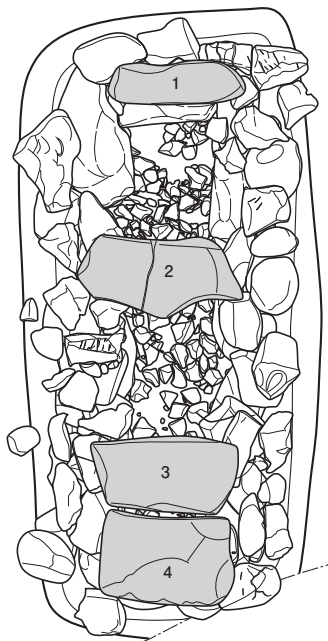
2段目石積み



3段目石積み

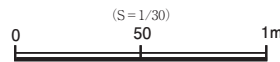


39 4段目石積み



5段目天井石

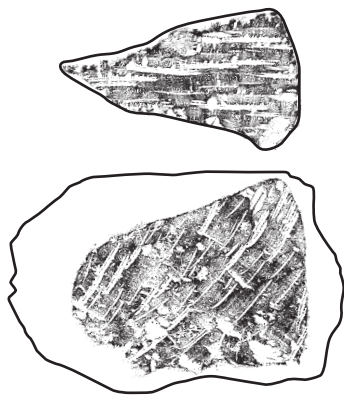
図21 石棺の構築



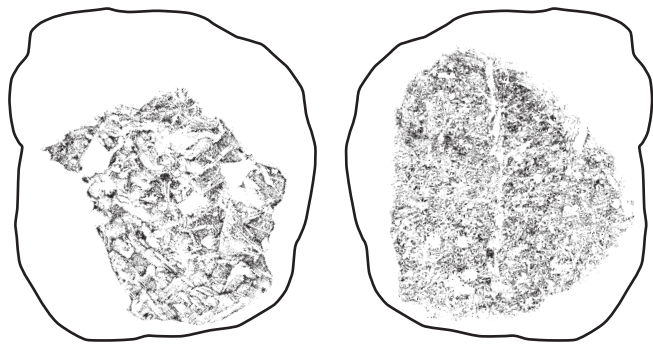
(埋葬体)

遺体は、頭を南東に向けた仰臥伸展葬で、ほぼ全身の骨格が良好に残っている。頭骨と東壁石は約5cm離れているが、爪先は西壁石に沿って検出されている。頭骨に皮膚や毛髪があったことを考慮すると、石棺の長軸と遺体の大きさはほぼ一致している。左の腕は腰骨の下にあり、少し窮屈な姿勢で埋葬されている。腰骨の突起もそのままの状態を確認されていることから、遺体を布等で包んで安置し、直ぐに砂で覆ってから天井石を載せた可能性を考えている。新潟医療福祉大学の奈良貴史先生の観察では身長154.9cm、性別は女性、年齢は10代後半。脊椎分離症が認められ、成長期に腰部に負荷のかかる生活環境にあった事が推測される

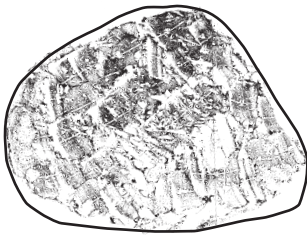
副葬品は出土していない。



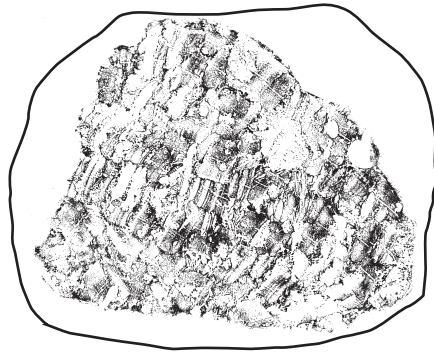
石 76 裏側



石 82



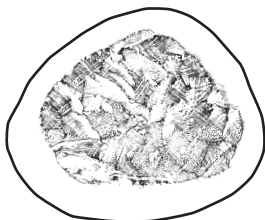
石 81



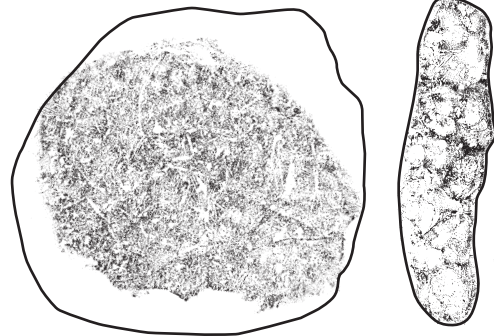
石 83 裏側



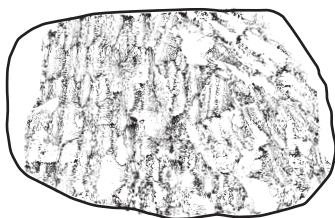
石 84 内側



石 85 裏側



石 89 西壁



石 88 内側

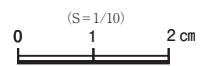


図22 石棺墓石材の加工痕拓本図

表5 石棺墓 石材一覧表

No.	石質	位置	重量(g)	寸法(cm)			個数	備考	No.	石質	位置	重量(g)	寸法(cm)			個数	備考
				縦	横	高さ							縦	横	高さ		
1	泥岩	5段 蓋	6000	27.5	15~18.5	8.5	1		53	泥岩	3段 北	4500	29	20	15	1	
2	泥岩	5段 蓋	27000	46~62	22~31	11~17	1	加工痕	54	泥岩	3段 北	210	26.5	16		1	加工痕
3	泥岩	5段 蓋	20500	51	36.5	13	1	加工痕	55	泥岩	3段 南	6500	35	23	16	1	
4	泥岩	5段 蓋	23500	40.5~57	28	12~14.5	1	加工痕	56	泥岩	2段 南	3050	21.5	21	7	1	加工痕
5	泥岩	4段 南	8000	27	22	10.5	1	加工痕	57	泥岩	2段 南	9500	34	21.5	13.5	1	
6	泥岩	4段 南	2400	19.5	16	9.5	1		58	泥岩	2段 南	3030	23	17	6.5	1	
7	泥岩	4段 南	4500	22	13	9.5~13	1	加工痕	59	泥岩	2段 南	5000	36	15	8	1	加工痕
8	泥岩	4段 南	1900	24.5	10.5	11.5	1		60	泥岩	2段 南	-	-	-	-	1	小片
9	泥岩	4段 南	1500	20	12	10.5	1		61	泥岩	2段 南	12500	46	35	18	1	加工痕
10	泥岩	4段 南	1450	14	13	11	1		62	泥岩	2段 南	6500	34	23.5	11.5	1	加工痕
11	泥岩	4段 南	2490	28.5	15	6	1		63	泥岩	2段 南	130	7	4.4	3.2	2	小片2個
12	泥岩	4段 南	2950	18	14	11.5	1		64	泥岩	2段 北	-	-	-	-	1	小片
13	泥岩	4段 南	3240	27.5	14.5	7.5	1	海中	65	泥岩	2段 北	13900	36.5	24	14	1	加工痕
14	泥岩	4段 南	3780	19.5	22	11	1		66	泥岩	2段 北	12500	8.5	26	13	1	加工痕
15	泥岩	4段 南	1160	19	13	4.5	1		67	泥岩	2段 北	2240	26	16	9.5	1	
16	泥岩	4段 南	2150	19	17	7	1		68	泥岩	2段 北	330	10	7	5	1	
17	泥岩	4段 南	1840	21	11.5	11	1		69	泥岩	2段 北	1600	18	11	8	1	
18	泥岩	4段 南	820	18	10.5	2~5	1		70	泥岩	4段 北	390	8	5.5	6	1	
19	泥岩	4段 南	4500	27.5	13~28	3~8	1	ハクリ	71	泥岩	2段 北	13000	31	30	11	1	加工痕
20	泥岩	4段 南	1920	12.5	14	9.5	1	ハクリ、海中	72	泥岩	2段 北	3230	18	14	11.5	1	加工痕
21	泥岩	4段 南	1200	18	9.5	9.5	1		73	泥岩	2段 北	13500	33	28	16.5	1	
22	泥岩	4段 南	4500	24	13.5	14.5	1	加工痕	74	泥岩	2段 北	31500	18	16	12.5	1	
23	泥岩	4段 東	2300	23	13	6.5	1	5個に割れ	75	泥岩	2段 北	13500	19	15	20	1	加工痕
24	泥岩	4段 北	7000	36	23.5	9.5	1	生痕アリ、20点以上	76	泥岩	1段 南	25000	46	30	20	1	加工痕
25	泥岩	4段 北	5000	35	16.5	10.5	1	海中	77	泥岩	1段 南	22500	44	33	15	1	加工痕
26	泥岩	4段 北	2580	19.5	15	10	1	海中	78	泥岩	1段 南	19000	48	30	12	1	加工痕
27	泥岩	4段 北	8000	21	20	16	1	加工痕	79	泥岩	1段 南	650	14	8.5	4.5	1	加工痕
28	泥岩	4段 北	620	14.5	10.5	4.5	1	海中	80	泥岩	1段 南	27000	37	38	17	1	加工痕
29	泥岩	4段 北	2000	14	12	10	1		81	泥岩	1段 南	20000	39	31	15	1	加工痕
30	凝灰岩	4段 北	2480	18.5	16	7.5	1	凝灰岩層の礫石	82	泥岩	1段 東	56000	43	41	25	1	加工痕
31	泥岩	4段 北	3500	22	13	14	1	加工痕	83	泥岩	1段 北	50000	57	45	20	1	生痕アリ、ニオウガイの仲間
32	泥岩	4段 北	720	11	13	9.5	1		84	泥岩	1段 北	25000	43	34	17.5	1	加工痕
33	泥岩	4段 北	950	14.5	16	5.5	1		85	泥岩	1段 北	14000	40	32	15	1	加工痕
34	泥岩	4段 北	910	15	9	10	2		86	泥岩	1段 北	-	-	-	-	1	小片
35	泥岩	4段 北	1550	20	10	7	1		87	泥岩	1段 北	13500	19	17	8	1	
36	泥岩	4段 北	1900	22	19	5	1	加工痕	88	泥岩	1段 北	1850	47	30	11	1	加工痕
37	泥岩	4段 北	2180	27	12	9	1		89	泥岩	1段 西	40000	46	44	23	1	加工痕
38	泥岩	4段 西	2540	21	16	11	1	海中	90	泥岩	1段 北	-	-	-	-	1	小片
39	泥岩	4段 西	250	14	9	3	1		91	泥岩	剥離片	890.5				28	
40	泥岩	3段 南	5000	31	26.5	8.5	1		92	泥岩	剥離片	1650				21	
41	泥岩	3段 南	5000	26	16	12.5	1		93	泥岩	床	60				1	
42	泥岩	3段 南	5000	20.5	14	12.5	1		94	泥岩	床	30				1	
43	泥岩	3段 南	2800	29.5	10~14	10.5	1		95	泥岩	床	70				2	
44	泥岩	3段 南	7300	24	23	14	1		96	泥岩	床	100				1	
45	泥岩	3段 南	600	7.6	6	2.5			97	泥岩	床	110				1	
46	泥岩	3段 東	7000	28	19~20	13	1		98	泥岩	床	120.5				3	
47	泥岩	3段 東	0.45	14	9	5.4	1		99	泥岩	床	40				2	
48	泥岩	3段 東	4500	22	14	9.5	1		100	泥岩	床	10				1	
49	泥岩	3段 東	5000	27	20	11	1		101	泥岩	床	90				1	
50	泥岩	3段 北	5000	26	29	5~8	1	加工痕	102	泥岩	床	100				1	
51	泥岩	3段 北	890	15	9.5	6	3		103	泥岩	床	150.5				1	
52	泥岩	3段 北	5500	27	27	11	1	加工痕	104	泥岩	床	120.5				1	

No.	石質	位置	重量 (g)	寸法(cm)			個 数	備考	No.	石質	位置	重量 (g)	寸法(cm)			個 数	備考
				縦	横	高さ							縦	横	高さ		
105	泥岩	床	120					一括	157	泥岩	床	60				1	
106	泥岩	床	250				1		158	泥岩	床	220				3	
107	泥岩	床	50				1		159	泥岩	床	100				1	
108	泥岩	床	20				2		160	泥岩	床	60				1	
109	泥岩	床	80				1		161	泥岩	床	60				1	
110	泥岩	床	60				2		162	泥岩	床	220					一括
111	泥岩	床	60.5				2		163	泥岩	床	70				1	
112	泥岩	床	50				1		164	泥岩	床	60				1	
113	泥岩	床	160				1		165	泥岩	床	120				1	
114	泥岩	床	60				2		166	泥岩	床	400				1	骨つき
115	泥岩	床	120.5				3		167	泥岩	床	230					一括
116	泥岩	床	110				1		168	泥岩	床	50				2	
117	泥岩	床	70				2		169	泥岩	床	50				1	
118	泥岩	床	80					一括	170	泥岩	床	200				2	
119	泥岩	床	100				2		171	泥岩	床	90				1	
120	泥岩	床	50				2		172	泥岩	床	100				1	
121	泥岩	床	100				2		173	泥岩	床	190				1	
122	泥岩	床	60				1		174	泥岩	床	260				1	
123	泥岩	床	160				1		175	泥岩	床	170.5				3	
124	泥岩	床	40.5					一括	176	泥岩	床	80				1	
125	泥岩	床	60				2		177	泥岩	床	150				2	
126	泥岩	床	50				1		178	泥岩	床	100				1	
127	泥岩	床	90.5				1		179	泥岩	床	170				2	
128	泥岩	床	120.5				2		180	泥岩	床	280				2	
129	泥岩	床	90				1		181	泥岩	床	300.5				3	
130	泥岩	床	20.5				1		182	泥岩	床	60				1	
131	泥岩	床	50				2		183	泥岩	床	260				1	
132	泥岩	床	40				1		184	泥岩	床	30.5				1	
133	泥岩	床	80				2		185	泥岩	床	40.5				1	
134	泥岩	床	200				2		186	泥岩	床	20.5				2	
135	泥岩	床	50				2		187	泥岩	床	220				1	
136	泥岩	床	50				2		188	泥岩	床	50.5				1	
137	泥岩	床	90.5				1		189	泥岩	床	110					一括
138	泥岩	床	100						190	泥岩	床	90					一括
139	泥岩	床	180				4	一括	191	泥岩	床	40				1	
140	泥岩	床	90.5				2		192	泥岩	床	80				1	
141	泥岩	床	150				2		193	泥岩	床	30.5				1	
142	泥岩	床	100				1		194	泥岩	床	30.5				1	
143	泥岩	床	90				1		195	泥岩	床	40				2	
144	泥岩	床	300				1		196	泥岩	床	70				1	
145	泥岩	床	190.5				1		197	泥岩	床	40				1	
146	泥岩	床	70				1		198	泥岩	床	80				2	
147	泥岩	床	150.5				1		199	泥岩	床	20.5				1	
148	泥岩	床	100				1		200	泥岩	床	50				1	
149	泥岩	床	60				1		201	泥岩	床	40				2	
150	泥岩	床	100				2		202	泥岩	床	50				1	
151	泥岩	床	90				1		203	泥岩	床	60				2	
152	泥岩	床	120				1		204	泥岩	床	220				2	
153	泥岩	床	110				1		205	泥岩	床	110.5					一括
154	泥岩	床	100				1		206	泥岩	床	310					一括
155	泥岩	床	220				1		207	泥岩	床	360					一括
156	泥岩	床	260				2		208	泥岩	床	300					一括

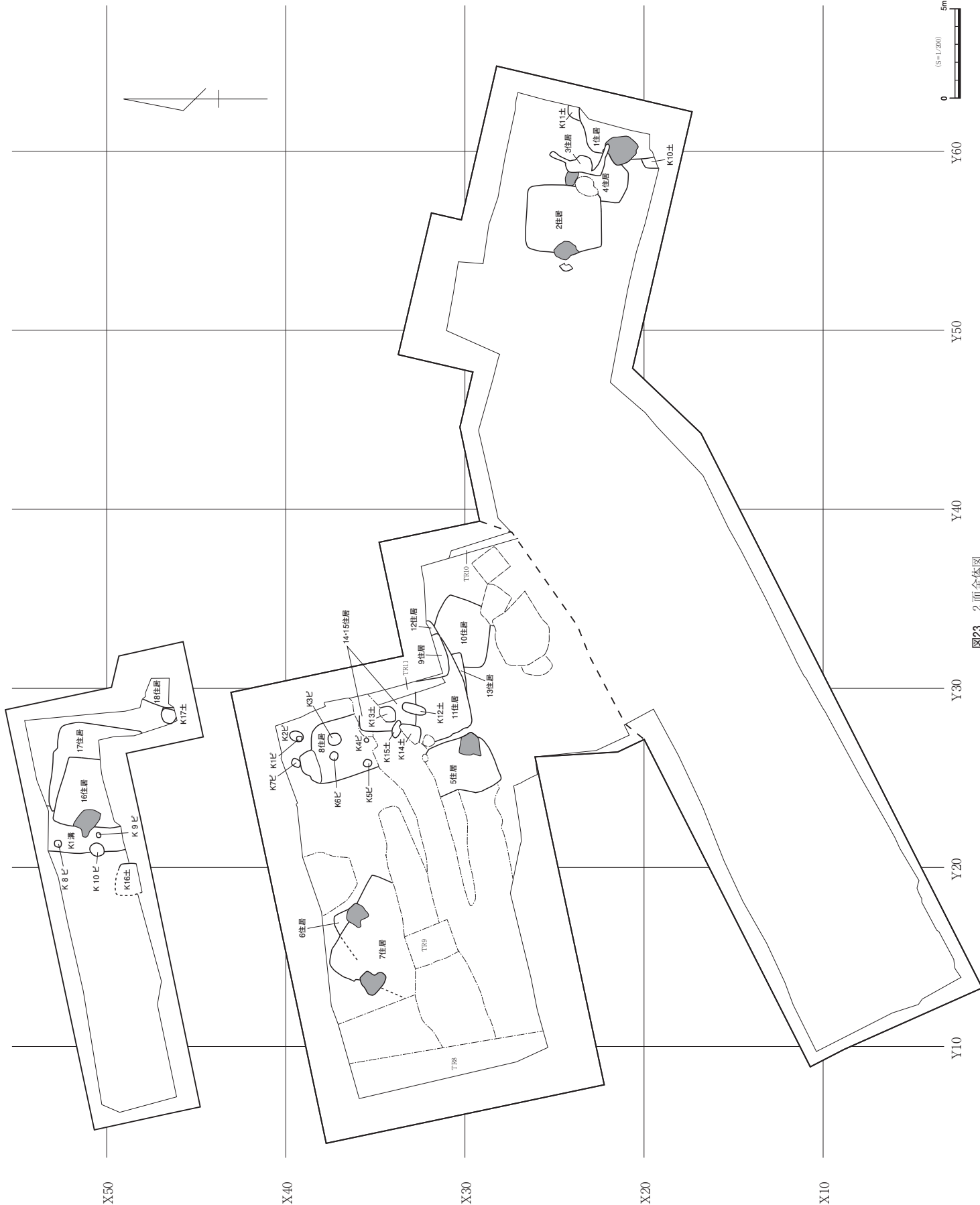


图23 2面全体图

第4節 2面の遺構と遺物

基本V層下から同VI層中で検出した遺構を2面の遺構とした。確認レベルはI区で9.20m～9.50m、II区で9.20m、III区で9.0m。I区のy50ライン以西では海拔9.60m～9.70mで基本X層以下の堆積土が露頭し本面にともなう遺構は検出できなかった。II区の南壁では、薄く堆積した包含層が東で9.50m、西で9.20mで検出される。II区の西壁では明確な堆積が確認できず、海拔9.10m～9.40mに堆積している宝永火山灰の直下は1面の遺構になり、それ以下はVII層あるいはIX層になる。III区の西側では海拔9.20mで僅かに包含層が確認されるがVIII層との区別が困難で、その下はIX層である。

I区の東端部寄り部分、II区の北東側、III区のy21ラインより東の区域で竪穴住居址などの遺構を確認した。確認面はI区の東では基本V層上面であるが、II区とIII区はVI層以下である。本期の遺構が確認されなかった部分はすでに基本VII層以下の堆積土が露呈していて、仮に遺構が存在していたとしても削平されている可能性が高い。

(1) 竪穴住居址

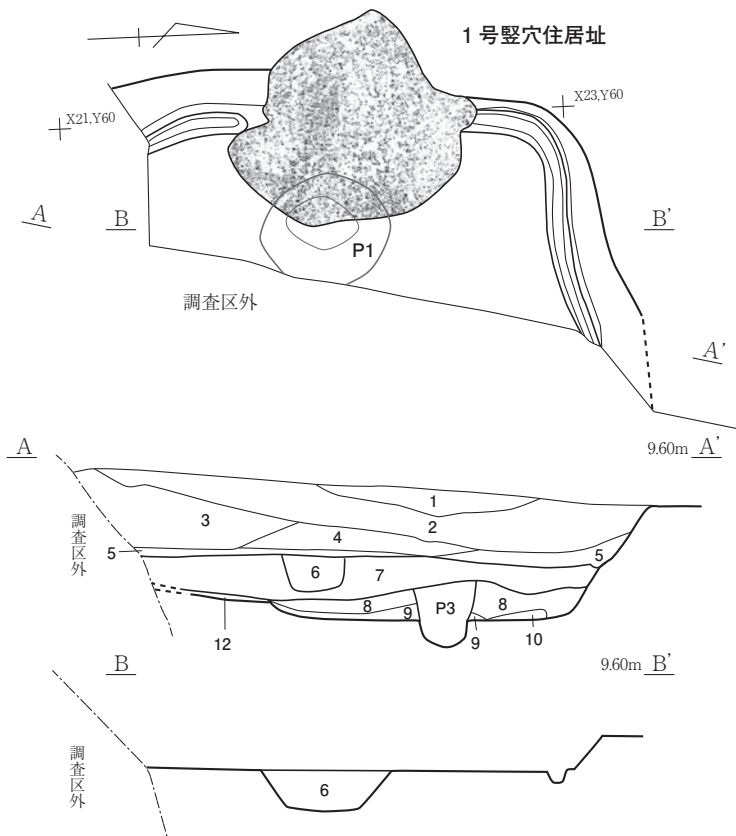
I区の東側で4軒、II区のy11ライン以東で11軒、III区の東側で3軒の計18軒の竪穴住居址を検出した。これ以外にも、土器等の出土状況からII区の北東部に幾つかの竪穴住居址が存在していた可能性はあるが、カマドや粘土・焼土が確認できないこと、中世遺構覆土と古代包含層あるいは飛砂と住居址覆土の区別が平面的に困難な状況であったことなどにより、住居址として把握できなかった。ご容赦頂きたい。また、本面の遺構が検出されなかった地域は基本VI層の堆積が薄いか層自体が確認できなかったもので、1面の造成時に削平されたか、もともと居住地域から外れていた可能性がある。

なお、II区の壁面堆積土層を調査・検討する際に、東壁から北壁にかけて幾つかの竪穴住居址と思われる掘り込みが確認できた。しかし、平面的に検出できなかったため、堆積土層図(図5)には提示したが説明は省いた。I区～III区の東部分に竪穴住居址が集中する傾向が確認できるため、調査区の東側から北にかけて集落の中心部が存在していたと考えている。

1号竪穴住居址

本址はI区のx19～23、y59～62の間に位置し、東と南は調査区外に延びている。2号・3号竪穴住居址、K10号・K11号土坑を壊している。確認面は標準土層VI層上面で、確認規模は南北(420)cm、東西(320)cm、深さ62cm、床面レベルの海拔は8.74～8.86mで北東調査区際が低い。主軸方向はN-92°-Wである。床面はほぼ全体が良好に硬化している。壁溝は壁下を全周、幅はほぼ20cm、深さは2～10cmである。カマド前の床下で覆土に粘土を含む円形土坑(P1)が確認されている。掘り方埋土と考えられる7層下からはP2・P3が掘り込まれ、さらに深い落ち込み(8～13層)が確認されている。落ち込みの底面の海拔レベルは8.30mで住居床面より約50cm深い。北壁側のプランが重なるため本址と別の遺構とは思われない。本址の構造に係わるなんらの施設と考えておく。

カマドは住居の西壁に設置されている。確認規模は奥行き103cm、幅130cm、高さ63cmで主軸方向は住居とほぼ一致する。燃烧部は住居内に収まる位置にあり、火床は床面よりやや高い。9層上の火床底は被熱し赤みを帯びている。煙道部は途中角度を変えながら48°ほどの傾斜を持って立ち上がり住居外へ達する。袖部は土丹粒子を含む粘質土で構築されている。袖前左側からは河原石(安山岩)が、右側からは土師器坏(図45-2)と土丹が並んでいるのが見つかった。いずれも床面直上にあり意図的に置かれたものである可能性が高い。堆積土層をみると3層・4層が潰れた天井部分と推測される。



1号竪穴住居址 土層説明

- 1層 暗褐色砂質土 腐食土を主体とする。しまりあり。
- 2層 暗褐色砂質土 1層より砂質強い。しまりあり。
- 3層 灰褐色砂 しまりあり。
- 4層 暗褐色砂質土 腐食土を主体とする。
カマド1層に似る。
- 5層 暗褐色砂質土 灰褐色砂と暗褐色砂質土がほぼ同量
ずつ斑状に混じる。しまりややあり。
- 6層 暗褐色砂 粘土を含む。P1覆土。
- 7層 灰褐色砂質土 炭化物を含む。
粘性・しまりややあり。
- 8層 暗褐色砂質土 腐植土が部分的に混じる。
粘性・しまりややあり。
- 9層 灰褐色砂質土 きめ細かい。
- 10層 黒灰色土 砂と黒色粘土が混合する。
しまりややあり。
- 11層 灰白色砂質土
- 12層 砂質土

No.	長軸 × 短軸 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	107 × (85) × 27	8.53
P 2	64 × 62 × 12	8.55
P 3	46 × (27) × 52	8.11

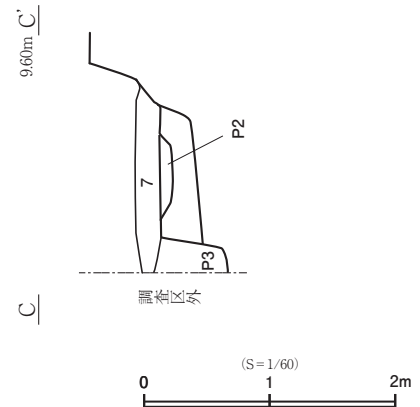
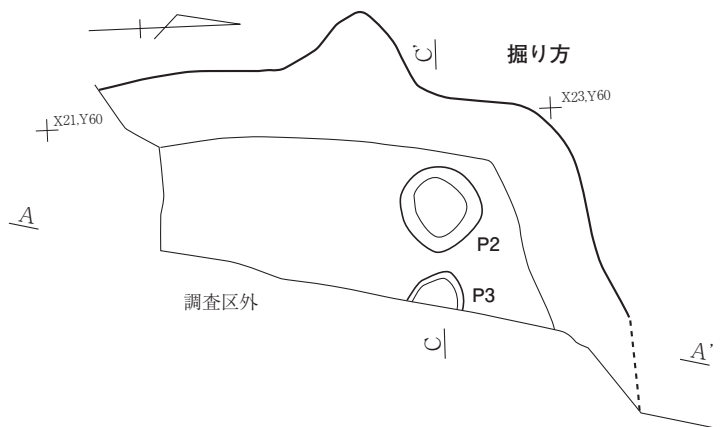


図24 1号竪穴住居址

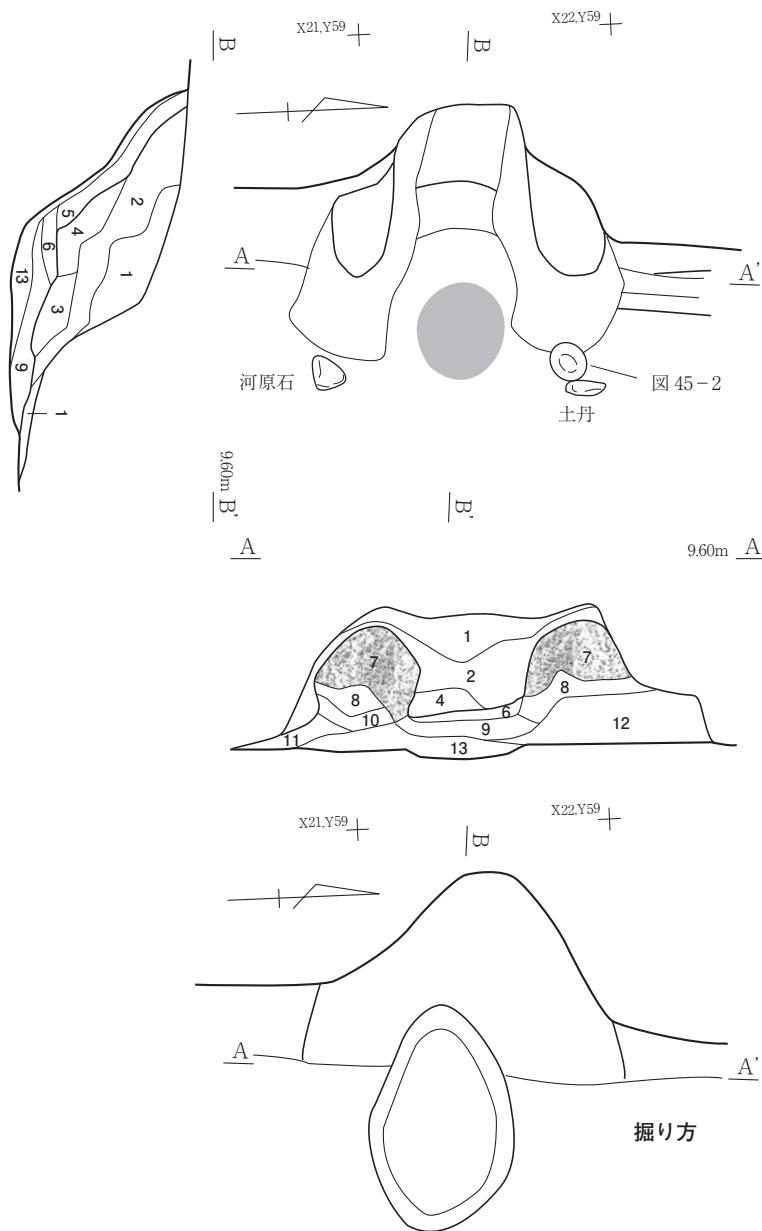
掘り方は住居壁をU字状に掘削し、傾斜面に薄く粘質土（5層）を貼付けている。床面には深さ5cmの浅い楕円形の掘り込みを持っている。

遺物はカマドから土師器甕79点・坏5点、須恵器坏1点が、覆土中から土師器甕240点・坏20点、須恵器甕4点・蓋1点が出土している。（図45-1～6）

2号竪穴住居址

本址はI区のx22～26、y53～57の間に位置し、上部を中世の遺構に削平されている。南東側で4号竪穴住居址を壊している。東側部分はプランを明確にできず、本址より古い別遺構を先に調査してしまったため、床面を失ってしまった。確認規模は東西380cm、南北420cm、深さは24cmで底面の海拔レベルは8.83～8.88m、主軸方向はN-90°-Wである。覆土は褐色砂質土で壁溝は検出されていない。

カマドは住居の西壁に設置されている。西側の離れた部分は、本址の一部か中世遺構に壊された別遺



1号竪穴住居址カマド 土層説明

- | | | |
|-----|--------|------------------------------------|
| 1層 | 黒褐色砂質土 | 粘性・しまりあり。 |
| 2層 | 黒褐色土 | 焼土粒子を少量含む。
粘性・しまり強い。 |
| 3層 | 黒褐色土 | 2層よりしまり強く、
カリカリする。 |
| 4層 | 黒褐色土 | 砂・灰・焼土を少量含む。
カリカリする。 |
| 5層 | 暗褐色砂質土 | 灰色砂と暗褐色粘質土が斑状に
混じる。しまりややあり。 |
| 6層 | 黒褐色土 | 粘質土と腐植土が混合する。
しまりあり。 |
| 7層 | 黒褐色粘質土 | 土丹片を少量含む。しまり強い。 |
| 8層 | 灰褐色砂 | 黒色粘土が少量混じる。
しまり弱い。 |
| 9層 | 黒灰色土 | 砂と黒色土が混合する。
灰・焼土粒子を多く含む。 |
| 10層 | 黒灰色土 | 砂と黒色粘土が混合する。
しまりややあり。 |
| 11層 | 黒灰色土 | 10層より粘土の割合が多い。
しまりあり。 |
| 12層 | 灰褐色砂 | 砂を主体に黒色粘土粒子が
少量混じる。
しまりややあり。 |
| 13層 | 黒褐色砂質土 | 均質。しまりややあり。 |

図25 1号竪穴住居址カマド

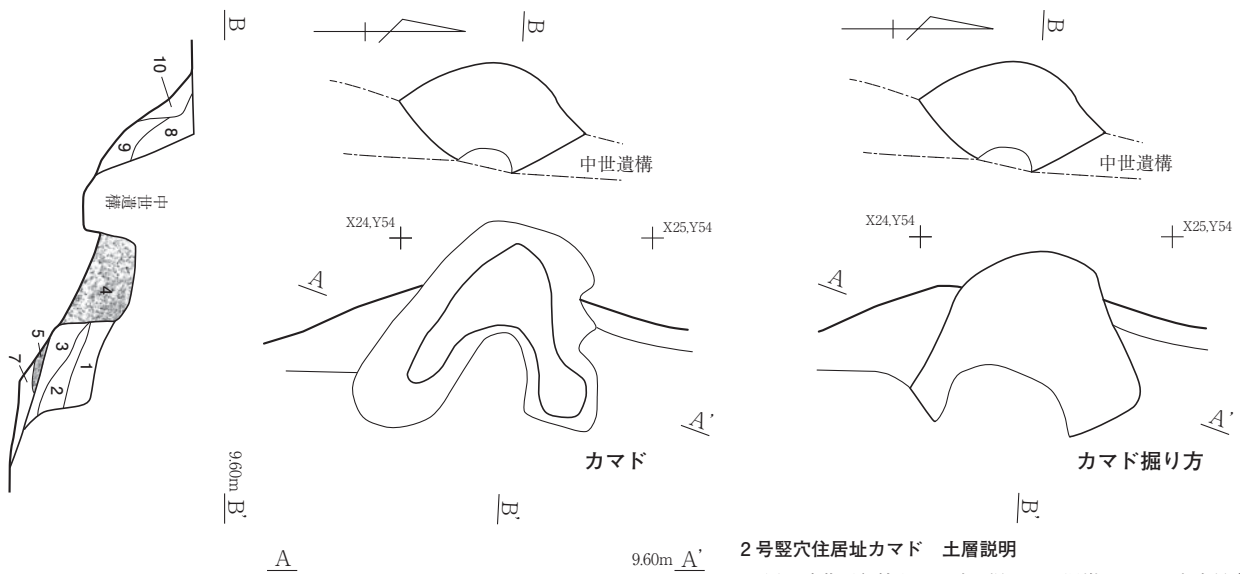
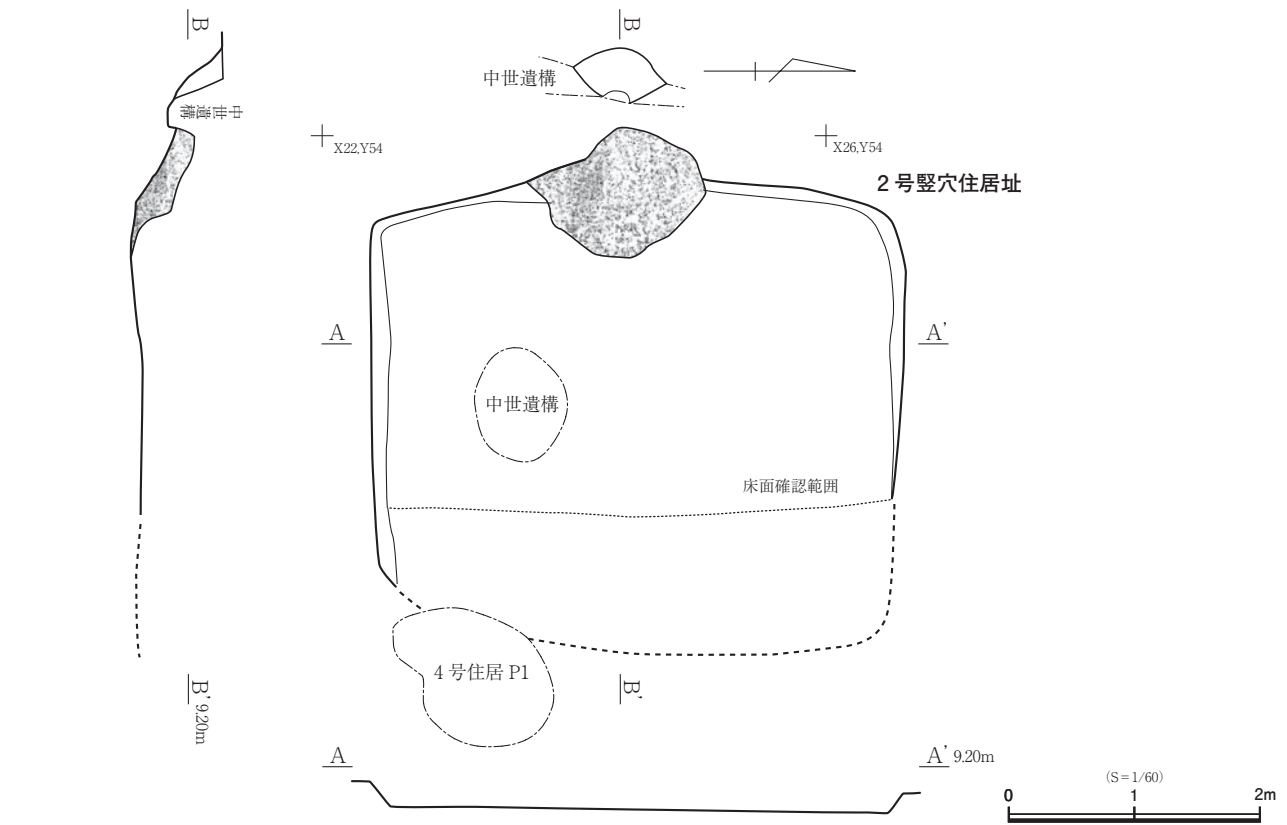
構の残存部分かはっきりしない。本址に含まる場合は煙道部奥の掘り方粘土（4層）の存在からカマドが改築されている可能性を指摘でき、西側部分は旧カマドの煙道部となる。西側部分を含めた場合の確認規模は奥行き143cm、高さ56cm、主軸方位はN-90°-Wで住居の軸と一致している。

以下は確実に本址カマドとなる住居に繋がる部分のみについての記述である。確認規模は奥行き82cm、幅97cm、高さ39cmで、主軸方向はN-80°-W。燃烧部は住居壁付近の5層上で、焼土・灰などの堆積はなく、使用による被熱痕のみが確認されている。煙道部は火床から87°の急角度で立ち上がっている。その先、住居外へ達するまでの道筋は中世遺構による削平のため不明。袖部は砂まじりの灰黄色粘土で構築されている。掘り方は住居壁を掘り窪めて、緩い傾斜がみられる。

遺物は覆土中から土師器甕51点・坏9点が出土している。(図45-7~9)

3号竪穴住居址

本址はI区のx22~24、y58~60の間に位置する。中世遺構による削平のため覆土と床面、北側部分を失っており、壁溝とカマド掘り方とみられる掘り込みのみを確認した。南東端は1号竪穴住居址の覆土上にあり本址が新しい。南側で4号竪穴住居址を壊している。確認面は基本VI層上面で、確認



2号竪穴住居址カマド 土層説明

- | | | |
|-----|--------|--------------------------|
| 1層 | 暗黄灰色粘土 | 砂が混じる。泥岩ブロックを少量含む。しまり強い。 |
| 2層 | 暗褐色砂質土 | 炭を少量含む。しまり強い。 |
| 3層 | 暗黄灰色粘土 | 砂が混じる。しまり強い。 |
| 4層 | 暗黄灰色粘土 | 砂が混じる。泥岩ブロックを少量含む。しまり強い。 |
| 5層 | 黒灰色土 | 粘土主体。しまり強い。 |
| 6層 | 灰褐色砂 | 粘土が混じる。しまり弱い。 |
| 7層 | 灰褐色砂 | 粘土が斑状に混じる。しまり弱い。 |
| 8層 | 暗褐色砂質土 | しまりあり。 |
| 9層 | 褐色砂質土 | 褐色砂と腐植土が混合する。しまり弱い。 |
| 10層 | 暗褐色砂 | しまりややあり。 |

図26 2号竪穴住居址

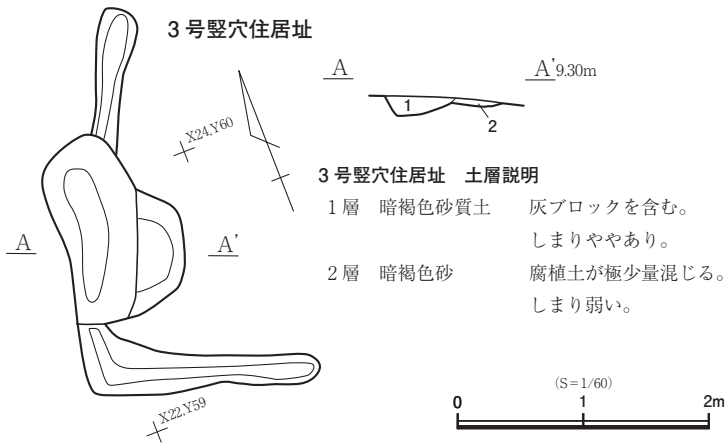
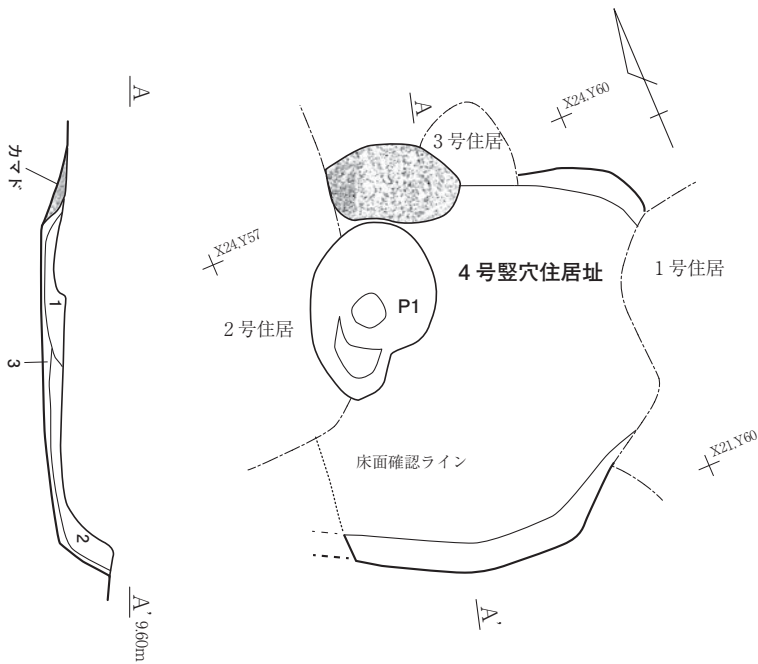


図27 3号竪穴住居址

レベルは 9.08 ~ 9.13m、確認規模は東西 185cm、南北 210cm、主軸方向は N - 70° - W である。覆土は褐色砂質土を基調とする。壁溝は上幅 21 ~ 40cm、深さ 6 ~ 9cm を測る。西壁沿いの掘り込みは奥行き 110cm、幅 150cm で、深さは 15cm である。遺物は土師器甕 24 点（うち掘り込み中から 17 点）・蓋 1 点が出土している。



4号竪穴住居址 土層説明

- 1層 灰褐色砂 しまり弱い。
- 2層 灰褐色砂 1層より褐色味がある。しまりややあり。
- 3層 暗褐色砂 腐植土が少量混じる。

No.	長軸 × 短軸 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P1	142 × 100 × 73	8.17

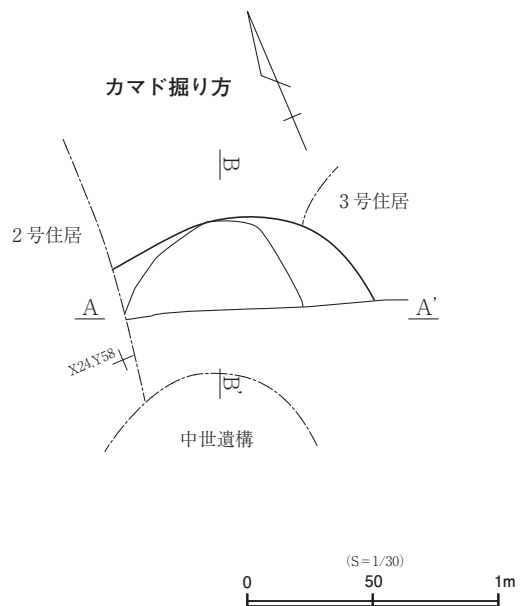
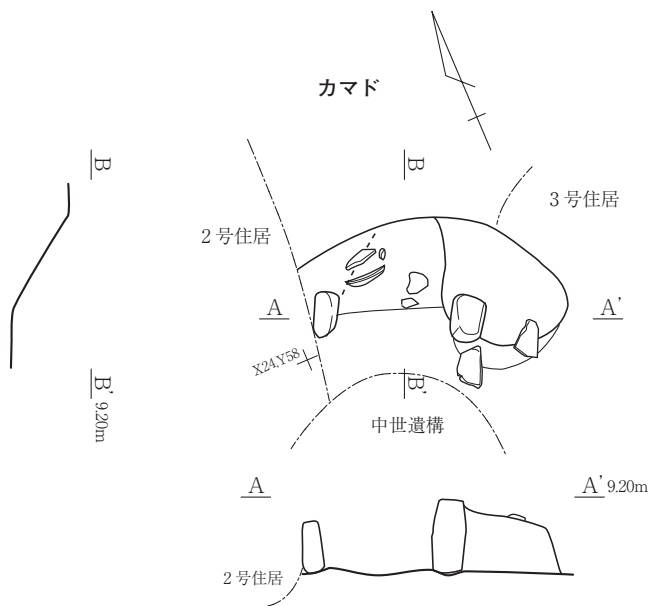


図28 4号竪穴住居址

4号竪穴住居址

本址は I 区の x20 ~ 24, y57 ~ 60 の間に位置する。西側で 1号竪穴住居址に、東で 2号竪穴住居址に、

北側で3号竪穴住居址に壊され、上部を中世遺構に削平されている。確認規模は、南北(330)cm、東西(250)cm、深さ35cmで底面レベルの海拔は8.86～8.96mである。主軸方位は南北の壁を基準にすればN-25°-E前後を指す。

カマドは住居の北壁に設置されている。両袖石と右袖部を検出したほかは遺存状態が悪く、構造ははっきりしない。確認規模は奥行き62cm、幅104cm、高さ23cm、主軸方向はN-25°-Eである。焚口部は袖石間の幅で87cm。燃烧部は焼土の堆積などの使用の痕跡を確認できない。袖部は先端に泥岩製の切り石を据える構造とみられる。切り石は左側が幅18cm、厚さ10cm、長さ15cm、右側が幅19cm、厚さ13cm、長さ21cmで形状は方柱に近い。カマド内とその付近からは土師器甕(図45-10)が壊れて散乱する状態で見ついている。出土レベルは、カマド底面より20～30cmういた位置にあり、北西から南東に向かいレベルが下がっている。

遺物は覆土中から土師器甕175点・坏7点・蓋1点(赤彩)、カマドから土師器甕50点(同一個体)・坏3点、須恵器坏1点が出土している。(図45-10～12)

5号竪穴住居址

本址はⅡ区のX28～32・Y24～27付近に位置する。北側、南西側を中世の溝に壊され、北西側はトレンチにより失われている。確認規模は東西336cm、南北358cm、深さは47cmで床面の海拔レベルは8.73～8.76m、主軸方向はN-62°-Eである。床面は掘り方を持ち、カマド周辺で粘土ブロックが混じる貼り床が確認されている。

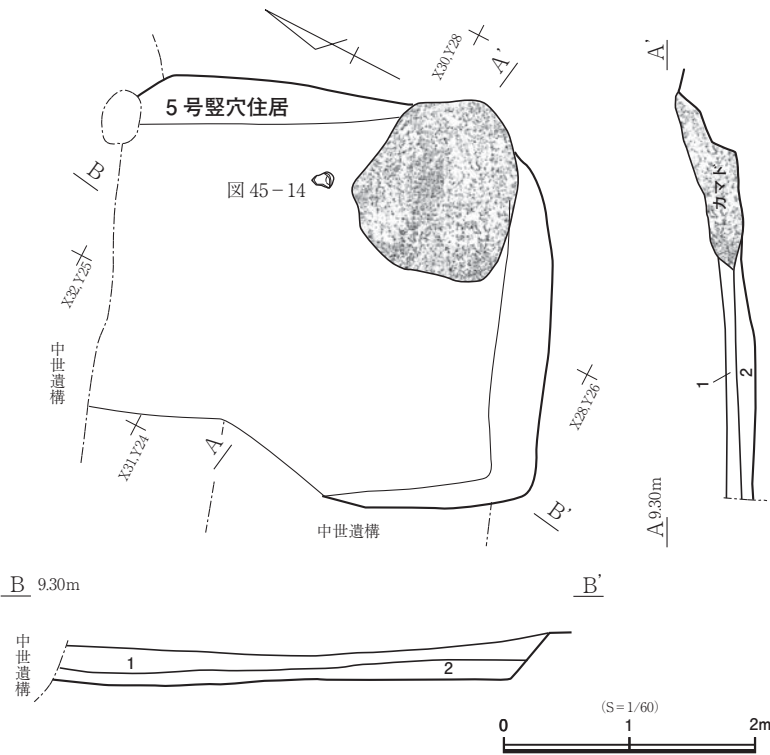
カマドは住居北東コーナーに設置されている。確認規模は奥行き127cm、幅115cm、高さは51cm、主軸方向はN-88°-Eである。燃烧部は住居内に収まる位置にある。火床は床面より7cm掘り窪めてあり、被熱し赤みを帯びた灰が最大で11cmの厚さまで堆積している。カマド内部は全体に赤化ブロック化しており、長い間高熱にさらされていたことが伺われる。煙道部は約67°の傾斜で立ち上がるが、遺存する範囲では住居の壁外へ達していない。袖は地山砂層を掘り残して基礎とし、その上に粘土を盛って構築されている。堆積土層をみると5層が袖部の粘土と同質で天井部がずり落ちたものと推測される。掘り方は住居壁側にテラス状の平坦部を持っている。袖部の地山を掘り残しているとはいえ、袖の基礎部分上端が住居底面より高く馬の背状に残ってしまうことや、煙道部が住居内に収まってしまうことなど構造に不安が残る。カマド設置部周辺の住居プランも疑ってみる必要があるかもしれない。

遺物は覆土中から土師器甕28点・坏21点(内赤彩1)が出土している。(図45-13・14)

6号竪穴住居址

本址はⅡ区のX34～37・Y15～18付近に位置する。本址より古い7号竪穴住居址の調査が先行したため、住居址の覆土と床面の多くを失っている。カマドとその北側のコーナー部分のみを検出。破線部は土層断面をたよりに復元したが、竪穴住居址のプランとしては不安がある。土層は、存在を見逃した別遺構の立ち上がりであったかもしれない。重複関係はカマド付近の遺存状態により把握、本址が7号竪穴住居址より新しい。確認規模は東西330cm以上、南北290cm以上と推測され、深さは最深で41cm、床面レベルの海拔は検出できた範囲で海拔8.52～8.57m、土層断面の海拔レベルは8.52～8.62mである。主軸方向は東壁ラインを基準にすればN-65°-E付近か。床面は炭化物が薄く散らばる程度で、明瞭な硬化面は見受けられない。貝溜まりは本址の覆土下層から床面に存在した可能性が高い。海拔8.56～8.64mの位置に50×39cmの範囲で貝がまとまって出土している。取りあげた貝の組成はハマグリ27点、アサリとサザエが1点ずつである。

カマドは住居東壁に設置されている。確認規模は奥行き112cm、幅114cm、高さは31cm、主軸方向はN



5号竪穴住居 土層説明

- 1層 黄茶褐色砂 1~2mm貝片を含み、やや粗い。
- 2層 茶褐色砂 粒子細かい。南側下位に腐植土が少量混じる。カマド近く上面は粘土ブロックが混じる。

5号竪穴住居カマド 土層説明

- 1層 灰褐色砂 粘質土ブロックを少量含む。しまりなし。
- 2層 黒褐色砂質土 灰褐色砂が少量混じる。3~4cmの橙褐色粘土ブロックを含む。
- 3層 灰褐色砂 2層がブロック状に少量混じる。
- 4層 灰褐色砂 粒状の粘質土が少量混じる。
- 5層 黒褐色粘土 粘土塊。焼土粒子・土丹粒子を含む。
- 6層 黒褐色粘質土 焼土粒子・土丹粒子を含む。堅くしまる。
- 7層 黒褐色粘質土 灰褐色砂を主体に6層がブロック状に混じる。
- 8層 暗灰褐色砂 灰褐色砂を主体に腐植土が混じる。灰を少量含む。
- 9層 白桃色灰層 ブロック状の焼土を含む。
- 10層 黒褐色粘土 土丹粒子を含む。堅くしまる。
- 11層 黒橙色粘土 3~4cmの粘土ブロックを固めている。カマド内側は被熱ブロック化している。
- 12層 黒褐色粘土 土丹粒子を含む。堅くしまる。
- 13層 灰褐色砂 粘土ブロックを少量含む。
- 14層 灰褐色砂 粘土ブロックを少量含む。

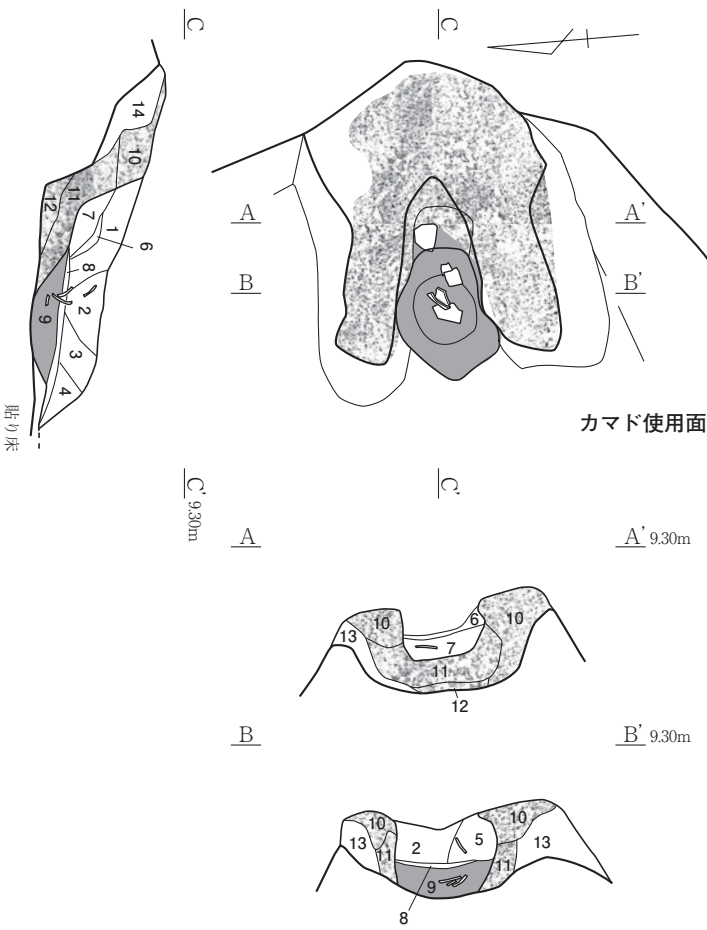
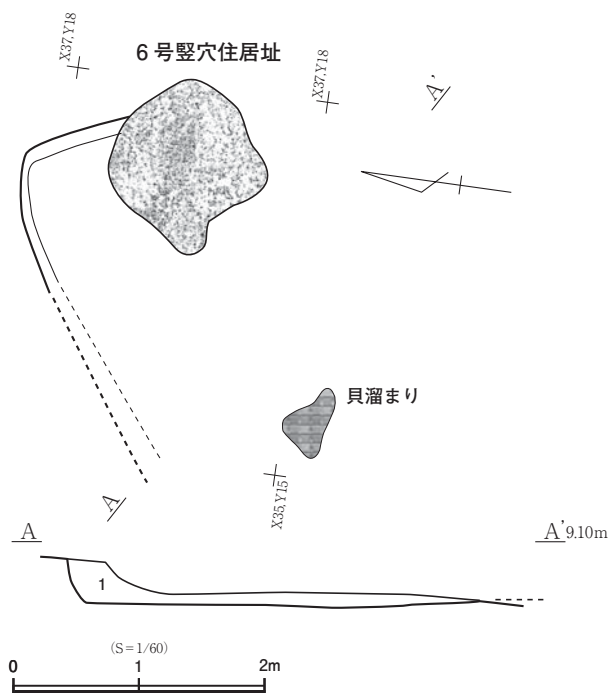
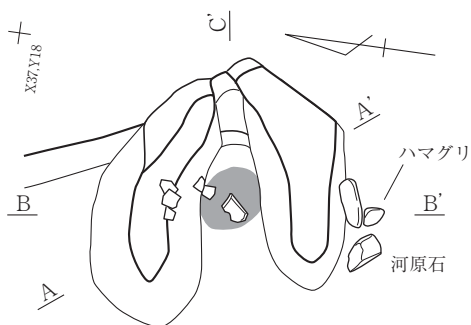
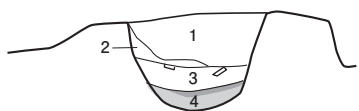


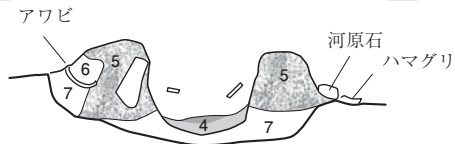
図29 5号竪穴住居址



A A' 9.10m



B B' 9.10m



5号竪穴住居 土層説明

1層 灰褐色砂 ~3mmの貝片を多く含む粗い。

5号竪穴住居カマド 土層説明

- 1層 暗褐色砂 腐植土が混じる。しまりなし。
- 2層 暗褐色砂 1層を主体に焼土・炭化物を含む。
- 3層 暗褐色砂質土 粘質土が多く混じる。焼土ブロック・炭化物を含む。しまりあり。
- 4層 暗灰褐色土 灰を主体とする。中央上面は被熱して赤みを帯びる。炭化物を多く含む。しまりなし。
- 5層 茶褐色粘質土 粘土ブロック。焼土ブロック・炭化物を多く含む。しまり強い。
- 6層 灰褐色砂 粘土の小ブロック・炭化物を少量含む。しまり弱い。
- 7層 灰褐色砂質土 5層に灰褐色砂が多く混じる。。

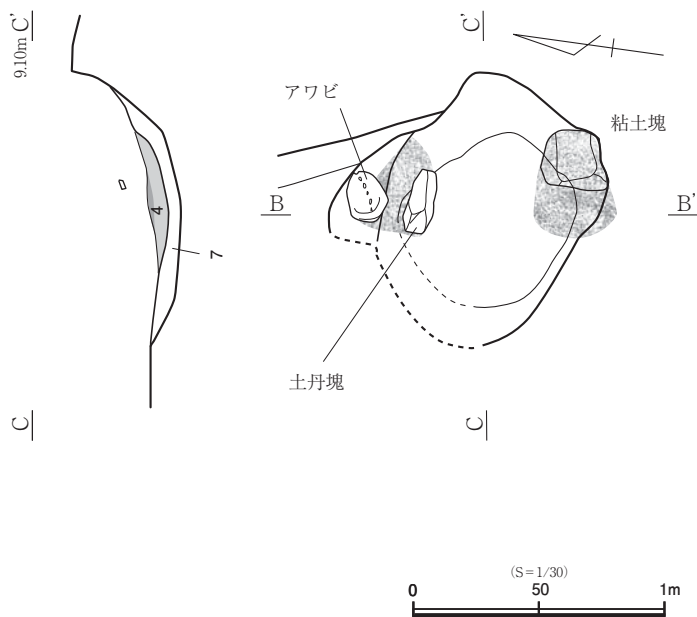


図30 6号竪穴住居址

- 78° - Eである。燃焼部は住居内に収まる位置にある。火床は床面より6~7cm低い傾斜はなだらかで意図的に掘り窪めた様子は見受けられない。底から8cm程灰が堆積しており、その上面は被熱し赤褐色色を帯びている。煙道部は緩く延びて、住居壁付近で約65°の傾斜を持って立ち上がり住居外へ達する。袖部は粘土塊と土丹塊を芯に粘質土を固めて構築されており、内側はよく被熱し赤化ブロック化している。右袖脇で河原石2点とハマグリが出土しているほか、左袖内粘土下では大型のアワビが埋められているのを確認した。掘り方は床面より13cm掘り込まれ、粘質土と砂の混合土で埋められている。

遺物は覆土中から土師器甕121点・坏25点・器台1点、須恵器甕2点・坏17点、カマド調査中の覆

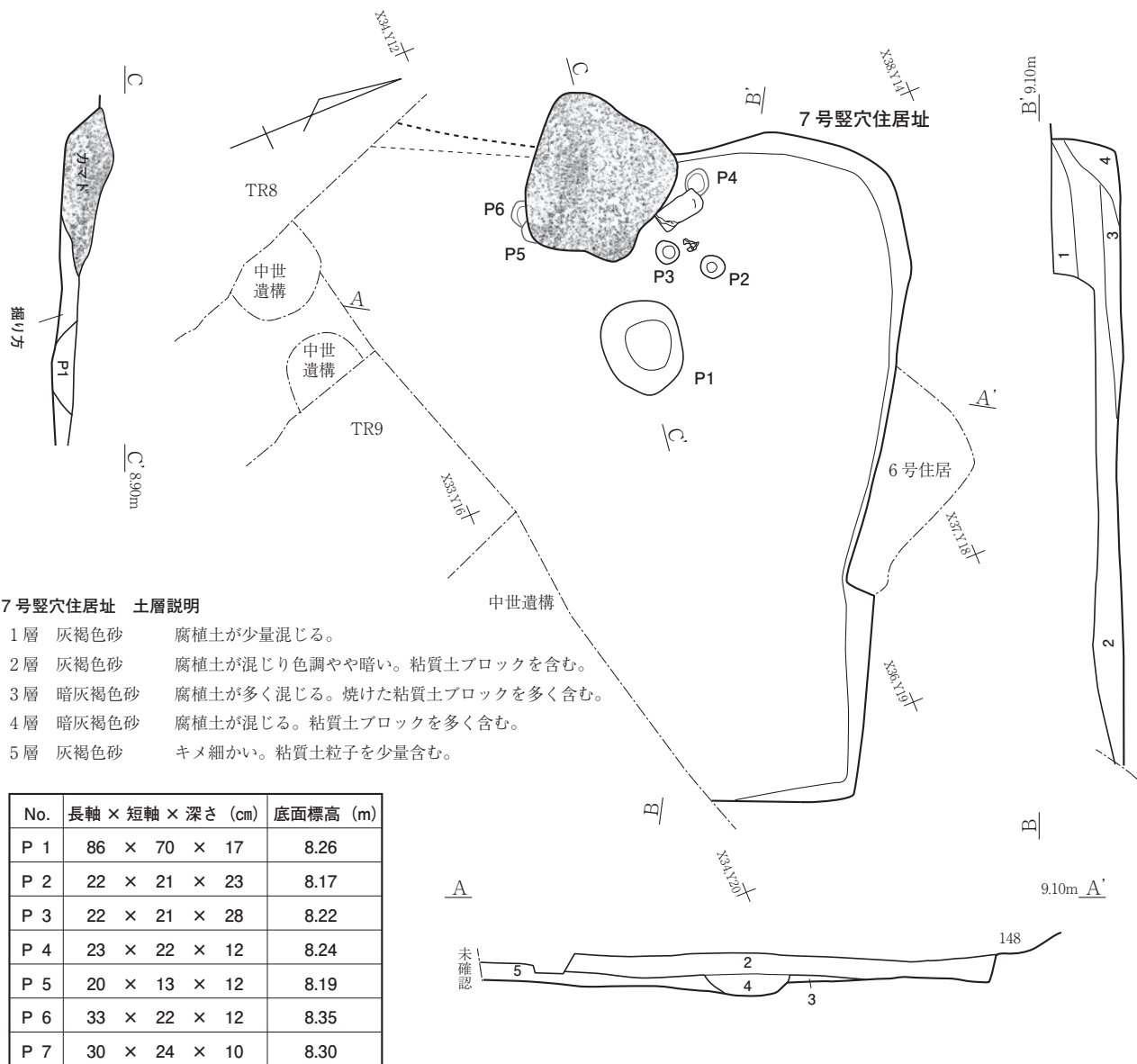


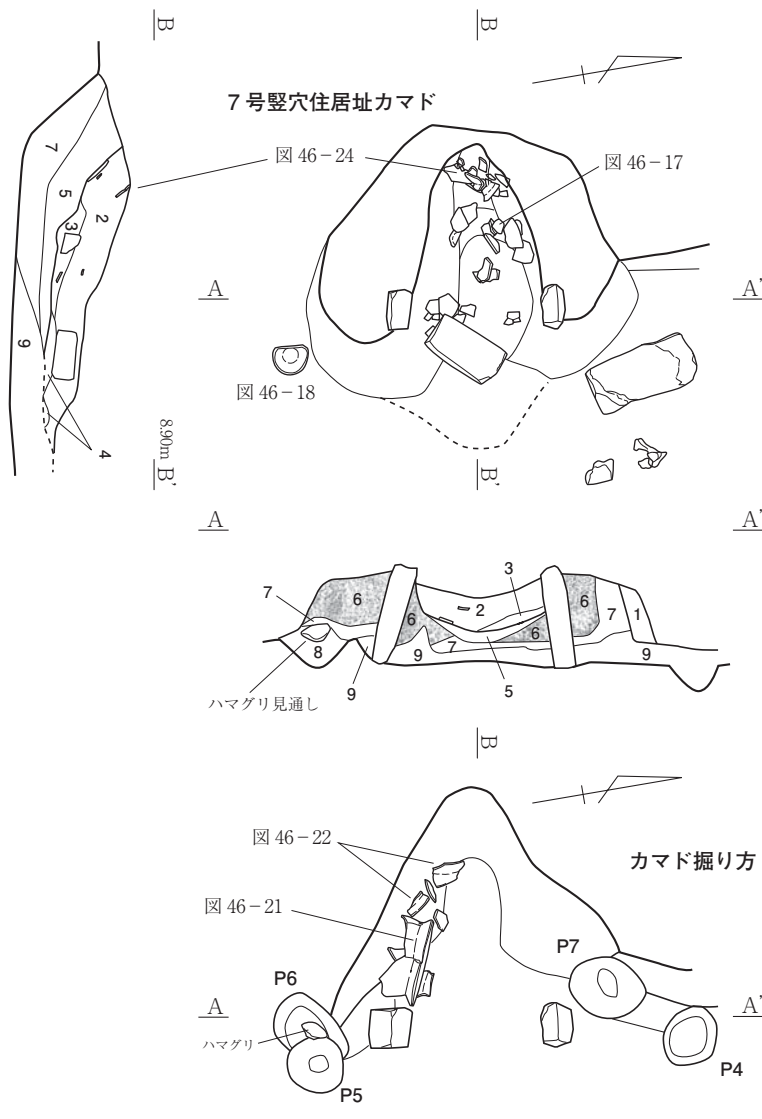
図31 7号竪穴住居址

土（カマド2層相当）からは鉄族が出土している。（図45-16）

7号竪穴住居址

本址はⅡ区のX33～37・Y12～19付近に位置する。6号竪穴住居に切られる。南壁は確認トレンチにより消失し未確認。南東側は中世の遺構に壊されている。確認規模は東西（695）cm、南北（550）cm、深さは最深で65cmで床面レベルの海拔は8.34～8.50m、主軸方向はN-66°-Wである。床面は南側に掘り方を持ち、カマド前辺りが弱く硬化している。床面で開口している掘り込みはP1～P3で、P1は覆土に粘質土ブロックを多く含む土坑である。

カマドは住居西壁に設置されている。確認規模は奥行128cm、幅134cm、高さは32cmで、主軸方向はN-84°-Wである。焚き口部は幅48cmで、高さは25cmと推測される。燃烧部は住居壁付近から住居外へ延びて位置する。焼土が溜まった様子などはなく、明瞭な使用の痕跡は見受けられない。火床は床面より5cm掘り窪めているようだが、掘り込みのプランは落下した天井石を取り上げる際に壊してしまった。煙道部は途中緩い段差を持って、約48°の傾斜で立ち上がっている。煙道内からは多くの土器片が出土している。2層中の土器（図45-24）は煙道として利用していた甕が潰れて落下したものかもしれない。袖は先端に泥岩製の切り石（袖石）を据え、周りを粘質土で囲って構築されている。切り石



7号竪穴住居址カマド 土層説明

- | | | |
|----|--------|---|
| 1層 | 灰褐色砂 | 粘質土ブロックが斑状に少量混じる。 |
| 2層 | 褐色砂 | 腐植土が混じる。下位に焼土粒子を含む。粘質土の小ブロックが混じる。しまりなし。 |
| 3層 | 暗褐色砂質土 | 焼土粒子を含む弱粘質土主体。しまりややあり。 |
| 4層 | 暗褐色砂質土 | 灰が少量混じる。焼土粒子を多く含む。しまりあり。 |
| 5層 | 黒褐色粘質土 | 径1cm程の土丹・焼土粒子のブロックを含む。 |
| 6層 | 黒褐色粘質土 | 砂質粘土。焼土ブロック・炭化物を含む。しまりあり。 |
| 7層 | 暗褐色粘質土 | 6層と褐色砂が混合する。しまりあり。 |
| 8層 | 暗茶褐色砂 | 粘質土ブロック・炭化物を少量含む。 |
| 9層 | 褐色砂 | 粘質土ブロックを含む。しまりややあり。 |

図32 7号竪穴住居址

は幅14.5cm、厚さ8.5cm、長さ76cmの方柱状に工具で丁寧に整形したものを2つに折って、左右に設置している。また、左袖には芯材として土師器甕の口縁部片(図46-21・22)が埋設されている。左袖脇の床面直上からは須恵器坏(図46-18)が出土している。天井部は残っていないものの、袖石上から落下して折れた状態の切り石(天井石)が遺存している。天井石は袖石と同じ石材で、同様の丁寧な整形がなされており、幅15.5cm、厚さ9.5cm、長さ70cmの方柱状を呈する。掘り方は住居壁外へ70cm程突出して掘り込まれている。左右の袖下、袖脇の小ピットはカマドの構造に係わる付帯施設かもしれない。P6の上面からはハマグリが出土している。

遺物は覆土中から土師器甕71点・坏5点、須恵器甕4点・坏7点、灰釉碗1点が、カマドから土師器甕21点・坏3点、須恵器甕1点・坏2点、が出土している。(図46-17~25)

8号竪穴住居址

本址はⅡ区のx34~39、y24~28の間に位置し、南の一部を1面の溝状遺構に壊されている。平面形は方形で、北壁の西半分に80cmほど張り出した部分がある。この張り出し部は、調査当初にはカマドの可能性を考えたが、焼土や粘土が確認されなかったため、性格不明な張り出しとした。張り出し部の規模は173cm、奥行き75cm、深さ22cm、底面レベルの海拔は8.90m。主体部は東西350cm、南北

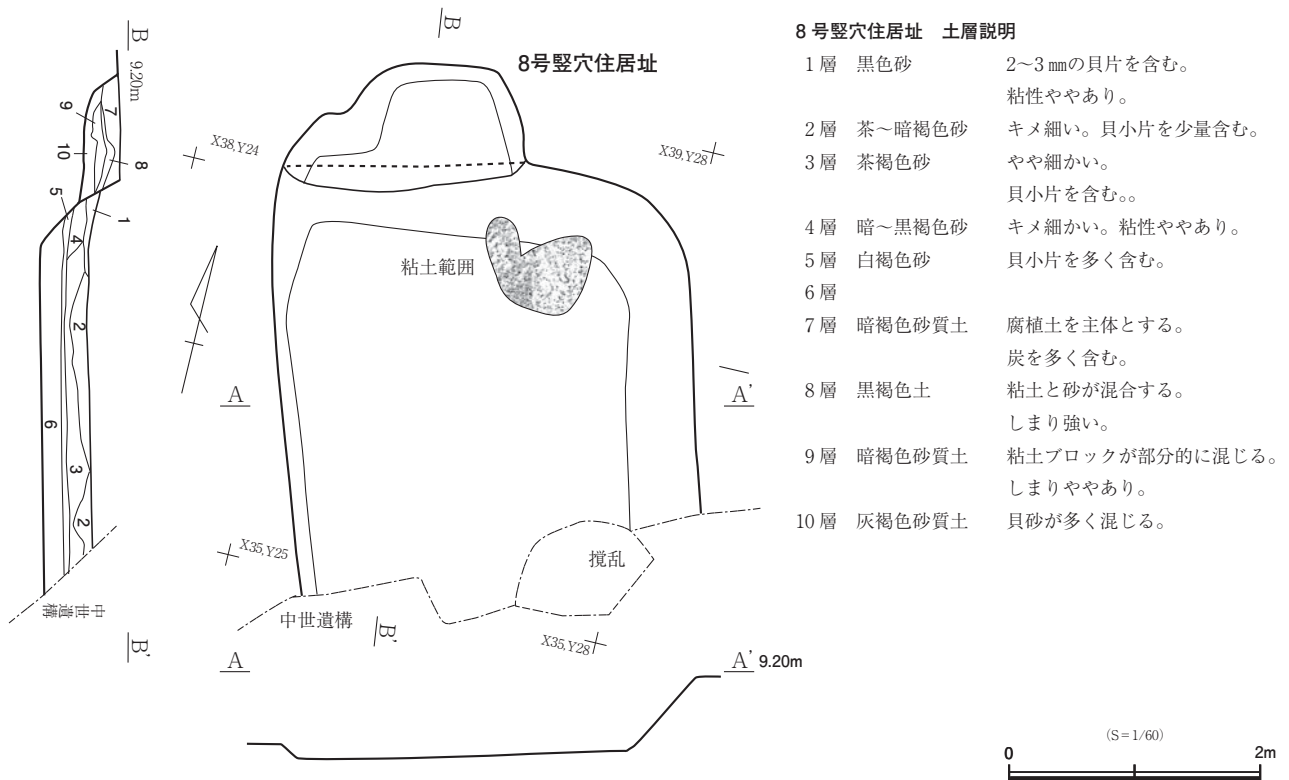


図33 8号竪穴住居址

328cm、深さ13cm~61cm、底面レベルの海拔は8.58mを測る。主軸方向は東壁を基準にすればN-16°-Wを測る。床面と思われる面は掘り方底面から15cm上で確認されたが、良好な硬化面は検出されていない。覆土上部から粘土の混じった範囲が確認されている。

遺物は覆土中から土師器甕492点・坏68点、須恵器甕8点・坏36点・壺1点・蓋4点が出土している。(図46-26~30)

9号竪穴住居址

本址はⅡ区のx30~32、y30~33の間に位置する。南で10号竪穴住居址を壊し、全体が11号・12号竪穴住居址の覆土を削平している。本址のほとんどが北の調査区外に延びており、平面的には住居址南側の一部分だけを検出、西壁、南東コーナー部分は調査区壁の土層をたよりに復元した。復元規模は南北200cm以上、東西(325)cm。深さは53cmで底面レベルの海拔は8.95m、主軸方向は南壁を基準にす

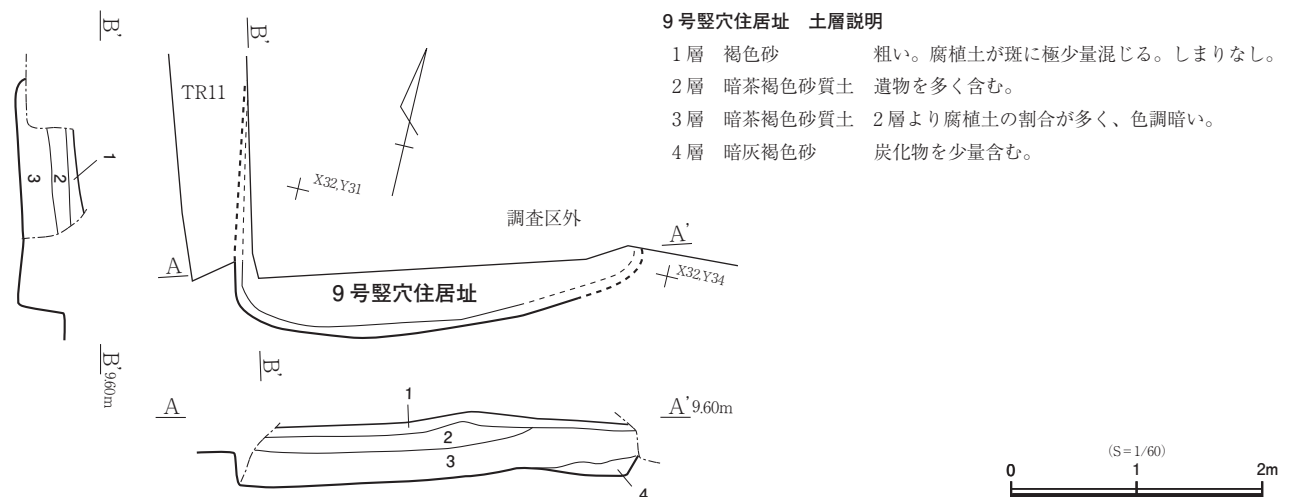


図34 9号竪穴住居址

れば N - 15° - W 付近と推測される。

遺物は覆土中から土師器甕 69 点・小型甕 1 点・坏 6 点、須恵器甕 1 点・坏 12 点・蓋 1 点が出土している。

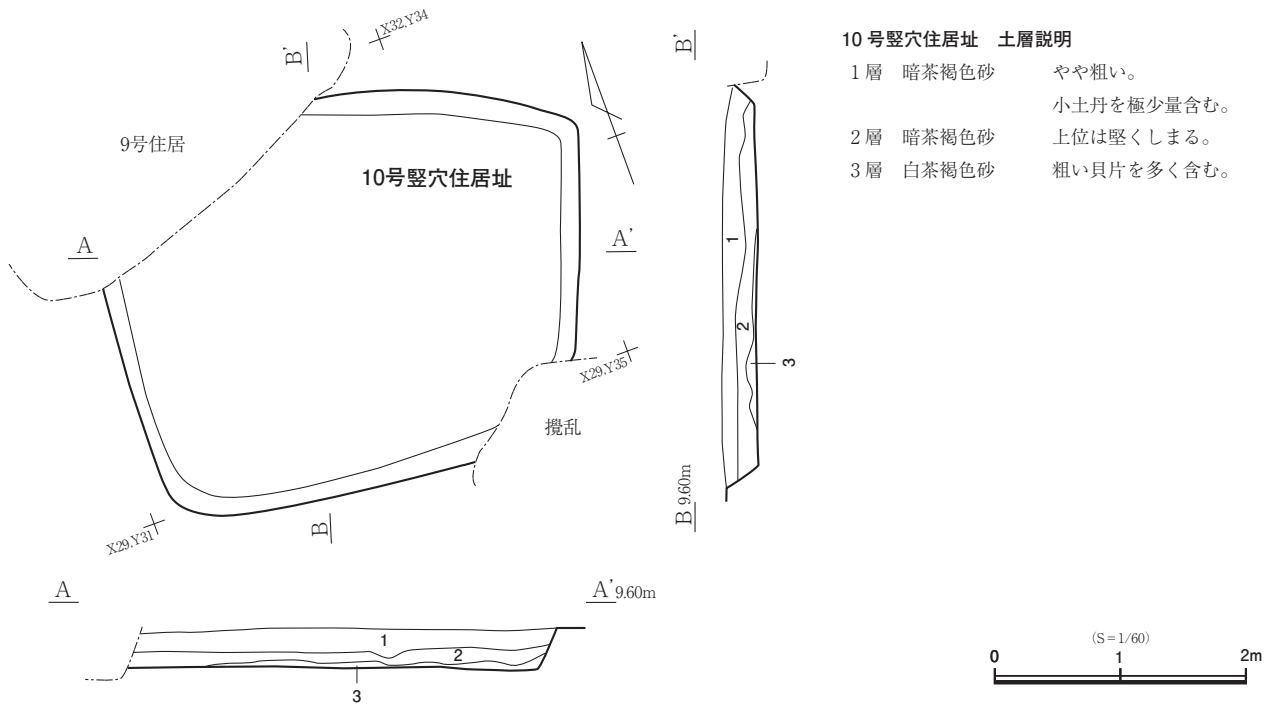


図35 10号竪穴住居址

10号竪穴住居址

本址はⅡ区の x28 ~ 31、y31 ~ 35 の間に位置し、北西隅を9号竪穴住居址に壊され、南東隅を現代攪乱に壊されている。11 ~ 13号竪穴住居址との重複関係は十分に把握できていないが、検出順に従えば本址の方が新しい。確認規模は東西 380cm、南北 312cm、深さ 36cm で底面レベルの海拔は 9.05 ~ 9.10m、主軸方向は西壁で N - 4° - E を測る。覆土は茶褐色砂質土で、付帯施設は検出されていない。

遺物は覆土中から土師器甕 69 点・坏 13 点、須恵器甕 2 点・坏 5 点・蓋 1 点が出土している。(図 46 - 31)

11号～13号竪穴住居址

Ⅱ区の x29 ~ 34、y27 ~ 34 に位置する。重複関係は 11号竪穴住居址が最も新しく、12号、13号の順に旧くなる。11号の北側は中世溝に壊されている。11号・12号は9号竪穴住居址に覆土上層を削平されている。12号・13号と10号竪穴住居址との新旧関係は不明である。

・11号竪穴住居址

本址はⅡ区 x30 ~ 34、y27 ~ 31 の間に位置し、東側は調査区外に延びている。確認規模は南北 415cm、東西 523cm、深さ 24cm (調査区壁土層では 40cm) で底面レベルの海拔は 8.69 ~ 8.83m、主軸方向は N - 20° - W である。中央南寄りで床面砂層が被熱して赤味を帯びているのを確認した。被熱砂は 35 × 24cm の楕円形プラン内にあり、炭化物を含んでいる。厚さは 1 ~ 2cm で掘り込みは確認されていない。

遺物は覆土中から土師器甕 180 点・坏 27 点 (内暗文 6 点)、須恵器甕 8 点・坏 10 点・蓋 4 点が出土している。

・12号竪穴住居址

本址はⅡ区の x31 ~ 32、y32 ~ 34 の間に位置し、北側は調査区外へ延びている。住居の南東部分のみの検出である。平面形は残存部から方形と考えられる。確認規模は東西 (105)cm、南北 (30)cm、深さ



11号竪穴住居址 土層説明

- | | | |
|----|--------|-------------------|
| 1層 | 暗茶褐色砂 | キメ細かい。貝小片・遺物片を含む。 |
| 2層 | 茶褐色砂質土 | キメ細かい。貝小片を少量含む。 |
| 3層 | 黄茶褐色砂 | キメ細かい。貝小片を含む。 |
| 4層 | 黄茶褐色砂 | キメ細かい。貝小片を多く含む。 |
| 5層 | 焼土層 | 焼けた砂層。炭化物を含む。 |

13号竪穴住居址 土層説明

- | | | |
|----|-------|-----------------|
| 6層 | 暗茶褐色砂 | 腐植土が混じる。貝小片を含む。 |
|----|-------|-----------------|

12号竪穴住居址 土層説明

- | | | |
|----|-------|-------------------|
| 7層 | 茶褐色砂 | キメ細かく砂質に近い。 |
| 8層 | 茶褐色砂 | 7層より砂に近い。 |
| 9層 | 暗灰褐色砂 | 腐植土の混じりがなく、色調明るい。 |

図36 11号・12号・13号竪穴住居址

43cmで底面レベルの海拔は8.70m。主軸方向は南壁でN - 20° - Wを測る。

遺物は出土していない。

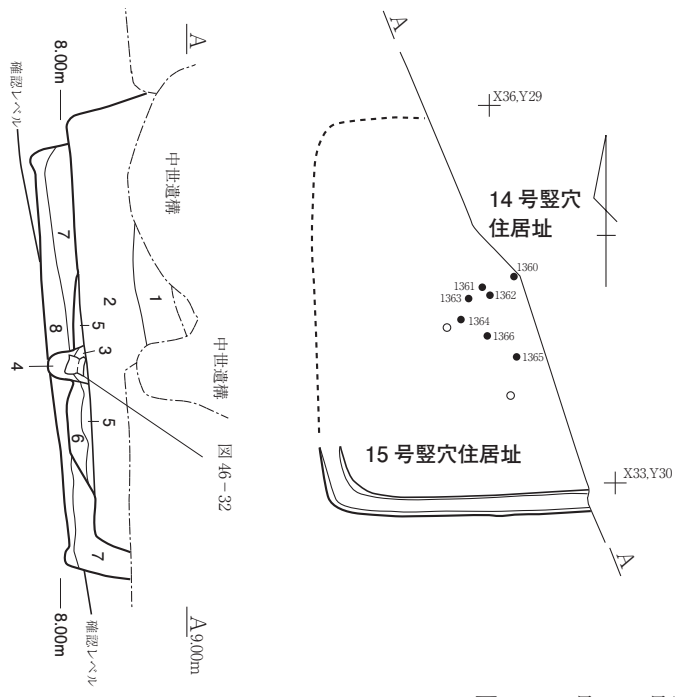
・13号竪穴住居址

本址はⅡ区のx30～31、y29～31の間に位置する。住居の南東コーナー部分のみの検出である。平面形は残存部から方形と考えられる。確認規模は東西243cm、南北54cm、深さは25cmで底面レベルの海拔は8.83m。主軸方向は南壁でN - 18° - Wを測る。

遺物は覆土中から須恵器甕1点が出土している。

14号竪穴住居址

平面調査では住居プランを検出できず、調査区壁の土層で存在を確認した。9号・11号竪穴住居址より旧く15号竪穴住居址の覆土土層を壊している。土層で確認できる規模は南北364cm、深さは72cmで床面レベルの海拔は8.04～8.26mで南から北へ向かい傾斜している。床面下にはピット(4層)と浅い掘り込み(5・6層)があり、4層中から下半部を欠損した土師器甕(図46-32)が出土している。また、図中に示したドットの検出レベルは海拔8.05～8.08mで本址の5～6層中にあたり、風化粘土化したような礫の分布である。



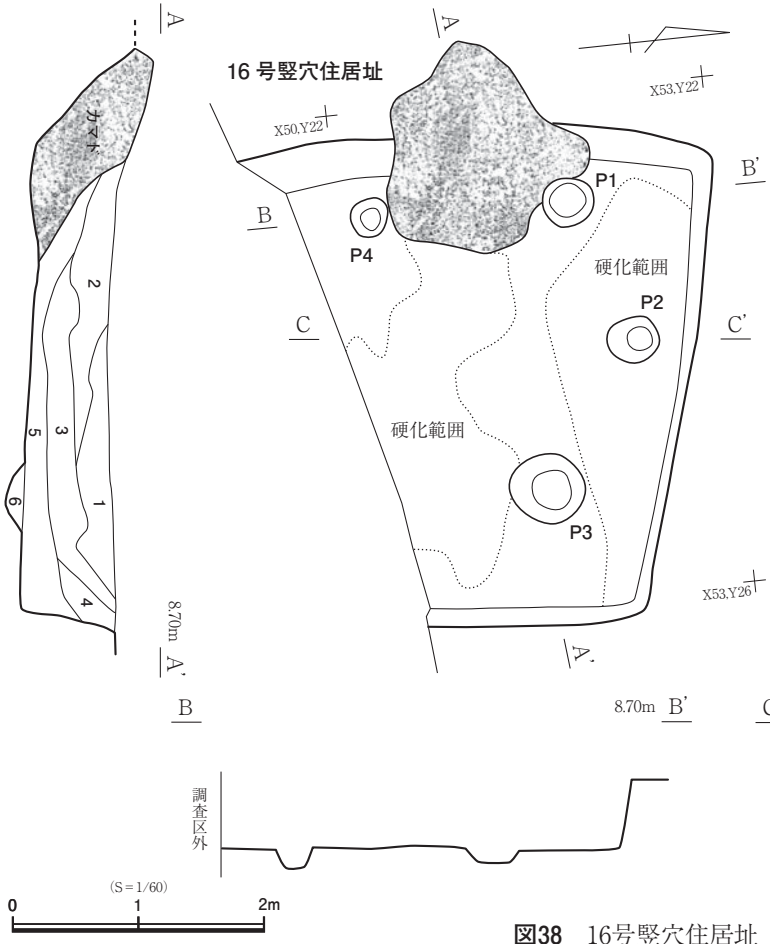
14号竪穴住居址 土層説明

- 1層 茶褐色砂 やや土壌化した砂。
- 2層 暗褐色砂 ~1cm貝片・炭化物を含む。
- 3層 暗褐色砂 炭化物を含む。
- 4層 暗褐色砂 3層よりキメ細かい。
- 5層 暗褐色砂 6層が少量混じる。
- 6層 暗褐色砂質土 ~1cm土丹を多く含む。
炭化物の混じり多い粘質土ブロックを含む。

15号竪穴住居址 土層説明

- 7層 灰褐色砂
- 8層 灰褐色砂 黒褐色土が少量混じる。

図37 14号・15号竪穴住居址



16号竪穴住居址 土層説明

- 1層 黒褐色砂
- 2層 茶褐色砂
- 3層 黒褐色砂 黒褐色土のブロックが多く混じる。
- 4層 黒褐色砂 3層より砂の割合が多い。
- 5層 白褐色砂
- 6層 ピット3覆土

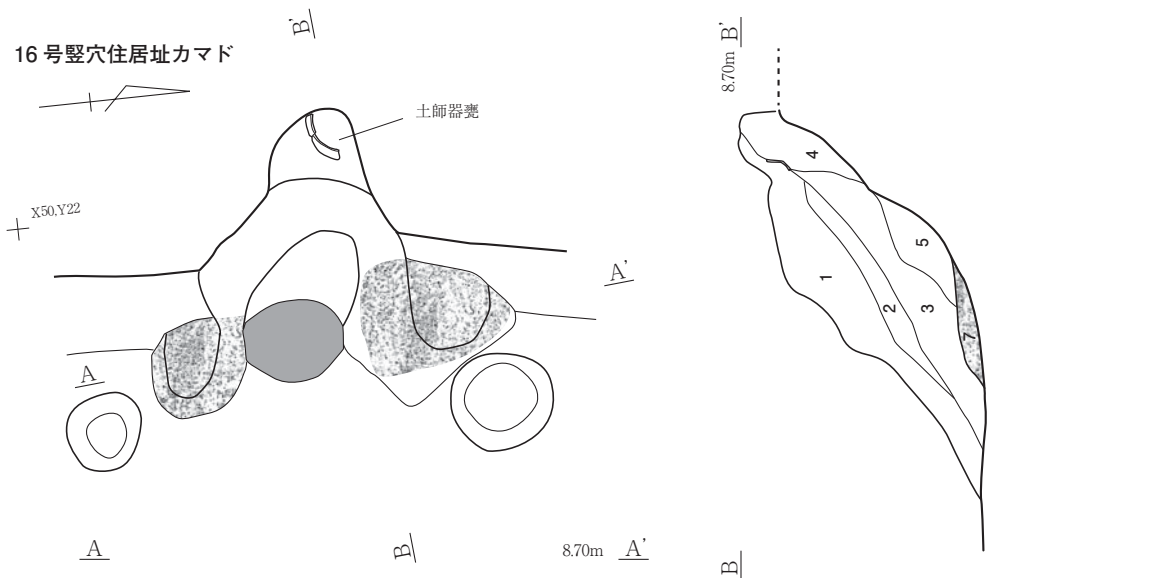
No.	長軸 × 短軸 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P 1	41 × 39 × 10	7.58
P 2	42 × 37 × 14	7.51
P 3	61 × 55 × 21	7.45
P 4	32 × 30 × 13	7.53

図38 16号竪穴住居址

遺物は4層中から出土した土師器甕1点である。

15号竪穴住居址

本址はⅡ区のx30～35、y27～29に位置し、上部を14号竪穴住居址に壊され、東側は調査区外に延びている。北側は平面プランを検出できず調査区壁の土層をたよりに復元した。平面形は方形で南壁か



A B 8.70m A' B'

16号竖穴住居址カマド 土層説明

- | | |
|------------|-------------------|
| 1層 茶褐色砂 | 粘土粒子を少量含む。 |
| 2層 暗茶褐色土 | 3層に1層が混じる。 |
| 3層 暗茶褐色粘質土 | 多量の焼土ブロック・灰を含む。 |
| 4層 暗茶褐色粘質土 | 3層より焼土ブロック・灰が少ない。 |
| 5層 白灰色灰層 | 焼土粒子を含む。 |
| 6層 茶褐色砂 | 焼土・灰を含む。 |
| 7層 黒褐色粘質土 | |
| 8層 黒褐色土 | 7層に砂が混じる。 |

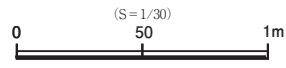
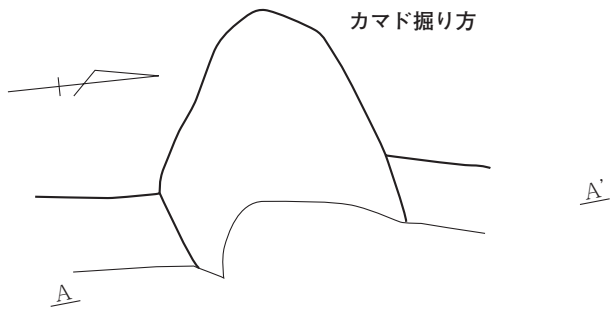
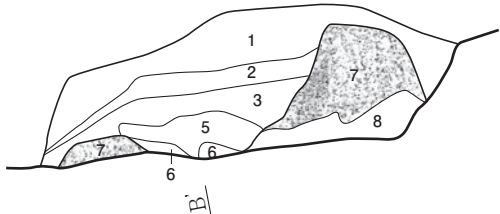


図39 16号竖穴住居址カマド

ら西壁にかけて壁溝が検出されている。確認規模は南北 315cm、東西 210cm、深さ 30cm で底面レベルの海拔は 7.68 ~ 8.04m で北から南に向かって傾斜している。主軸方向は南壁で $N - 5^\circ - W$ を測る。壁溝は幅が 14 ~ 20cm、深さは 9 ~ 12cm である。

遺物は出土していない。

16号竖穴住居址

本址はⅢ区の x49 ~ 52、y21 ~ 26 の間に位置し、南は調査区外に延び、南東側で 17号竖穴住居址を壊している。西側は K1 号溝と重複し本址の方が新しい。平面形は方形で、確認規模は東西 400cm、南北 (380)cm、深さ 68cm で底面の海拔レベルは海拔 7.66m、主軸方向は $N - 86^\circ - W$ である。覆土は黒褐色砂質土で、下層は褐色砂の混じりが多い。床面は 1.5cm ~ 2cm の厚さで硬化している。特に良好な硬化が認められる部分を範囲で示した。床面でピット 4 基が検出されている。このうち P1、P4 は配置からカマドの使用に係わるものかもしれない。P3 からは須恵器甕 1 点、坏 2 点が出土している。

カマドは住居の西壁に設置されている。確認規模は奥行き 119cm、幅 147cm、高さ 87cm で、主軸方向は $N - 79^\circ - W$ で住居の軸より北に振れている。燃焼部は住居壁付近にあり、焼土・灰が厚く堆積

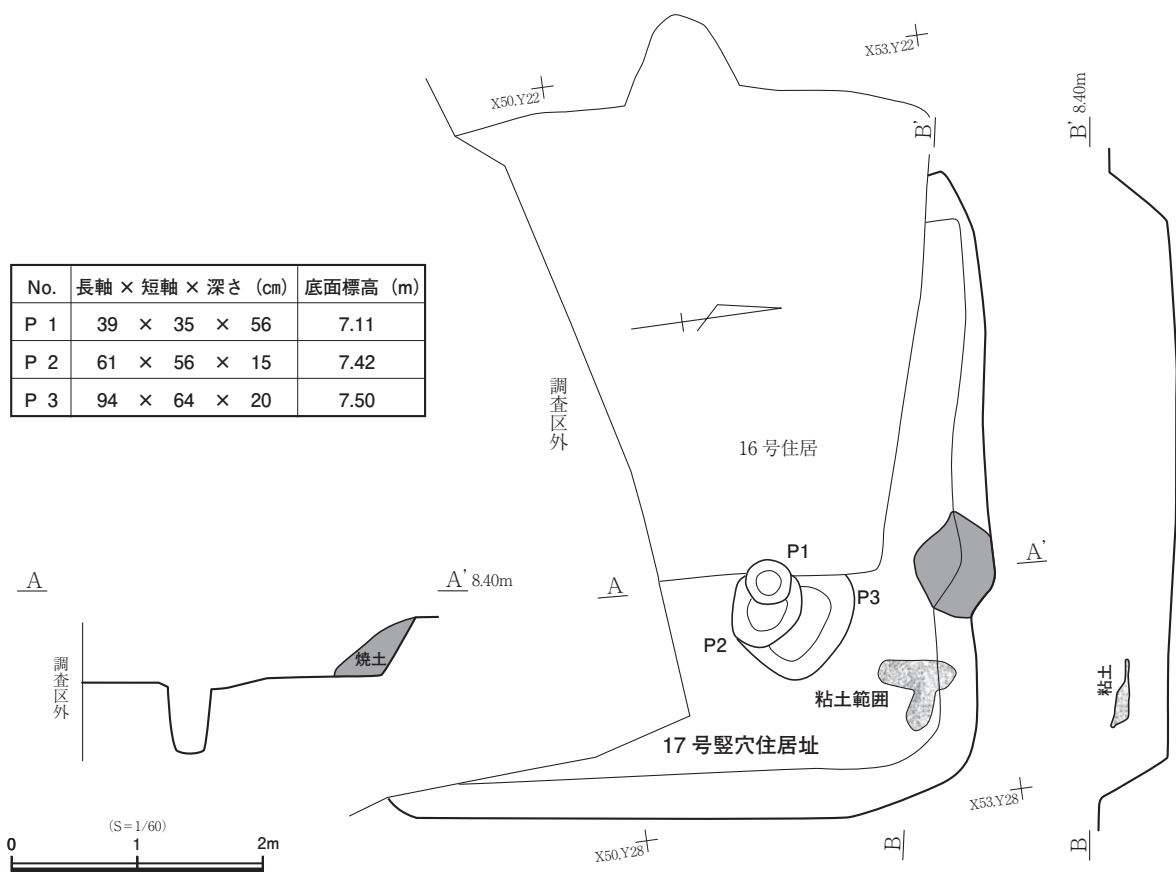
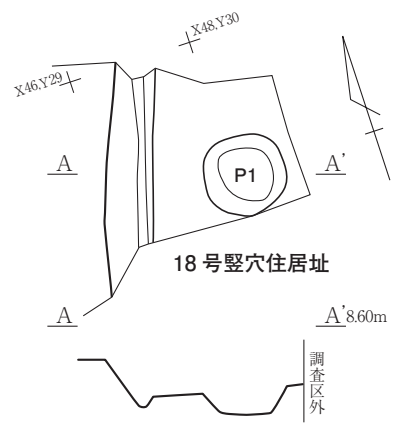


図40 17号竪穴住居址



No.	長軸 × 短軸 × 深さ (cm)	底面標高 (m)
P1	66 × 66 × 25	7.90

図41 18号竪穴住居址

し、長期間の使用があったものと考えられる。火床は床面よりやや低いが見瞭な掘り込みは見受けられない。煙道部は途中角度を変えながら50°ほどの傾斜で立ち上がり住居外へ達する。袖部は黒褐色粘質土で構築されており、右袖の遺存状態は良いが、左袖は潰れて床上の基部しか残っていない。堆積土層をみると3層が多量の焼土ブロック・灰を含んでおり、潰れた天井部分と推測される。袖部の遺存状況や堆積状況から本カマドは右袖側から左側に向かい引倒されたように潰れたものと思われる。カマド内部や周辺からは補強材として使用された多くの土器片が出土している。掘り方は住居壁をU字状に掘り込んで傾斜面を作り出している。

遺物はカマドから土師器甕144点・坏21点、須恵器甕1点・坏11点・壺1点・蓋1点が、覆土中からは土師器甕186点・坏22点・須恵器坏32点・蓋1点が出土している。(図47 - 33 ~ 40)

17号竪穴住居址

本址はⅢ区のx49～53、y23～28の間に位置し、南西側は22号竪穴住居址に壊され、南は調査区外に延びている。平面形は方形で、確認規模は東西519m、南北468m、深さ64mで底面レベルの海拔は7.72～7.78m、主軸方向N-81°-Wである。覆土は黒褐色砂質土を基調とする。床面で検出されたピットのうち、P1は深さ56cmと柱穴となり得る規模を持っている。北側のやや東寄りには住居壁に沿って焼土が検出されている。カマドが設置されていた部分ではないかと推測されるものの、その構造はほとんどが失われており、カマド痕と確定するには至らない。また、住居北東コーナー近くの覆土上層で

は、粘土・炭化物がまとまって検出されている。

遺物は焼土範囲周辺から土師器甕が15点、覆土中から土師器甕402点・坏115点(赤彩2点)・高坏1点、須恵器甕7点・坏24点・壺1点・蓋1点が出土している。(図47-41~44)

18号竪穴住居址

本址はⅢ区のx46~48、y28~30の間に位置している。大部分は調査区外に延びており、住居西側の一部のみの検出である。確認規模は東西160m、南北180m、深さ30cmで底面レベルの海拔は8.07m、主軸方位はN-28°-Eを測る。覆土は暗褐色砂質土で、床面から土坑1基と壁溝が検出されている。壁溝の幅は13~20cm、深さは9cmである。

遺物は覆土中から土師器甕12点、坏2点、須恵器坏2点が出土している。(図47-45)

(2) 溝

K1号溝

本址はⅢ区のx49~53、y20~23間に位置している。東側は16号竪穴住居址に壊されている。北側、南側は調査区外へ延びる。確認面は標準土層Ⅵ層上面で、確認規模は長さ435cm、上端幅222~253cm、下端幅160~176cm、深さは34cmである。底面レベルの海拔は8.48~8.63mで西側から東側へ緩く傾斜している。主軸方向はほぼ真北を指している。溝底は比較的平坦で、断面形は逆台形を呈する。K6~K8号ピットは本址と共に検出されたもの。単独のピットとして考えているが、溝に伴う可能性もないとはいえないため、本址とともに説明する。確認規模は、K8号ピットが長軸46cm、短軸40cm、深さ27cmで、底面レベルの海拔は8.41m。K9号ピットが長軸30cm、短軸25cm、深さ8cmで、底面レベルの海拔は8.47m。K10号ピットが長軸84cm、短軸71cm、深さ44cmで、底面レベルの海拔は8.36mである。

遺物は出土していない。

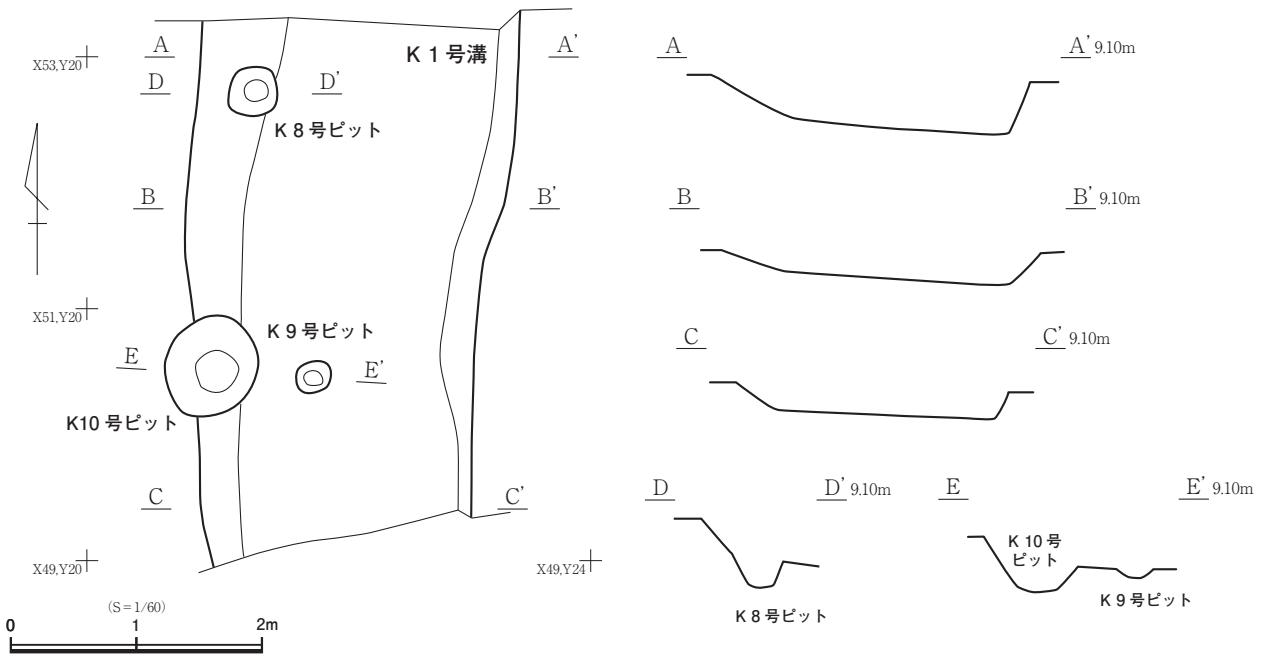


図42 K1号溝、K8~10号ピット

(3) 土坑

2面に属すと判断した土坑は8基である。遺物はK12号土坑から土師器甕12点・坏1点が、K13号土坑から土師器甕7点・坏4点が、K16号土坑から土師器碗1点が、T17号土坑から土師器甕7点が出

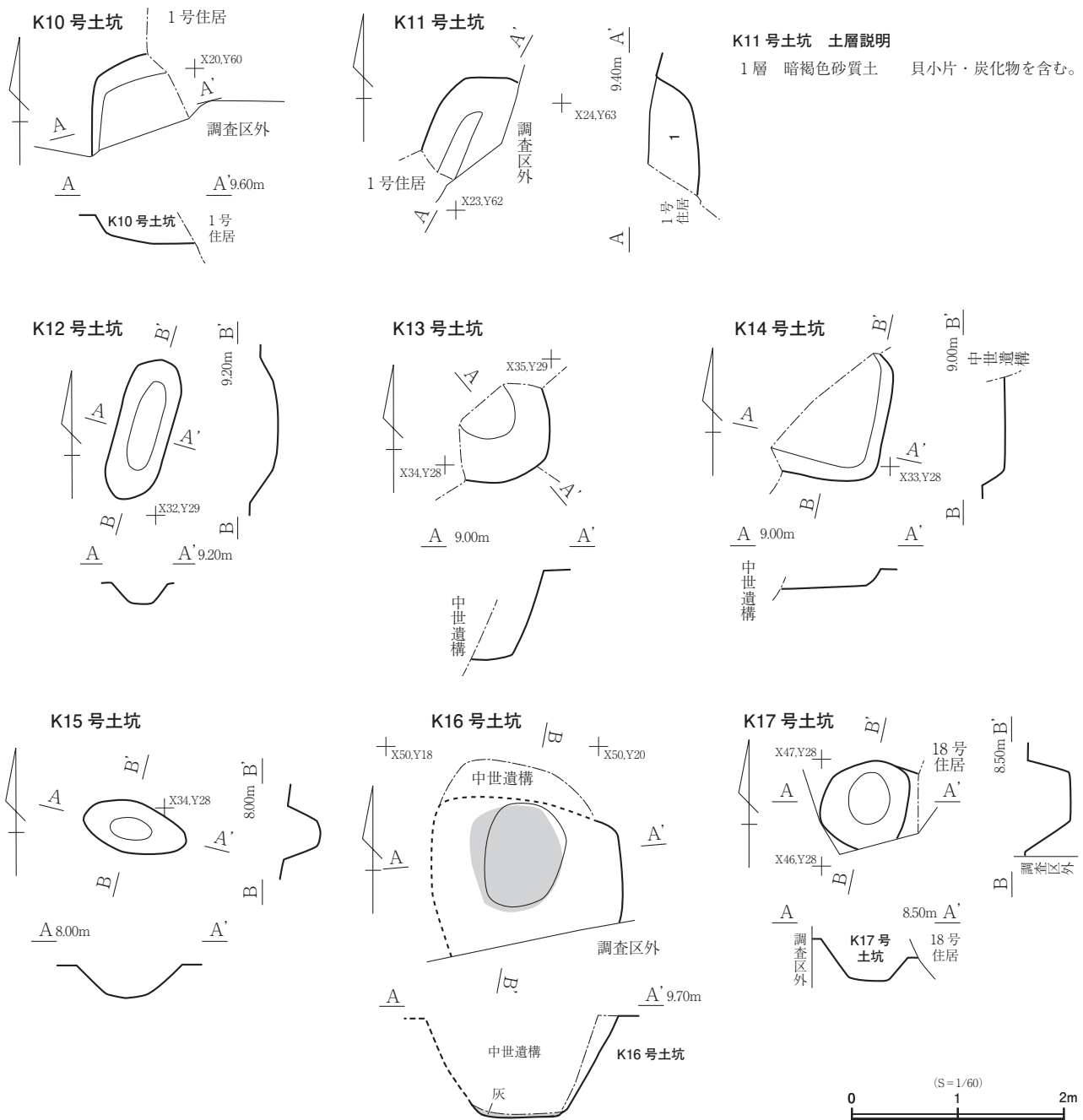


図43 2面土坑

土している。

K10号土坑

本址はI区のx19～20、y59～60間に位置している。東側を1号竪穴住居址に壊され、南側は調査区外へ延びている。平面形は方形になると思われる。確認規模は長軸98cm、短軸(70)cm、深さ26cm、底面レベルの海拔は9.16mを測る。

K11号土坑

本址はI区のx23～24、y61～62間に位置している。南側を1号竪穴住居址に壊され、東側は調査区外へ延びている。平面形は長楕円形になるものと思われる。確認規模は長軸110cm、短軸(67)cm、深さ42cm、底面レベルの海拔は8.72mを測る。

K12号土坑

本址はII区のx32～33、y28～29間に位置する。11号竪穴住居址の覆土を壊している。平面形は長

楕円形で確認規模は長軸 136cm、短軸 52cm、深さ 23cm、底面レベルの海拔は 8.82m を測る。

K13 号土坑

本址はⅡ区の x33～34、y28 の間に位置し、北西側は中世溝に壊されている。11 号竪穴住居址の床面で確認、新旧関係は不明である。平面形はほぼ円形で、確認規模は長軸 113cm、短軸 78cm、深さ 83cm、底面レベルの海拔は 7.95m を測る。覆土中からは土師器甕（図 47 - 46）が出土している。

K14 号土坑

本址はⅡ区の x32～33、y26～27 の間に位置し、北西側は中世溝に壊されている。11 号竪穴住居址の床面で確認、新旧関係は不明である。平面形は隅丸方形と思われる。確認規模は長軸 122cm、短軸 100cm、深さ 18cm、底面レベルの海拔は 8.60m を測る。

K15 号土坑

本址はⅡ区の x33～34、y27～28 の間に位置する。15 号竪穴住居址の床面付近で確認、新旧関係は不明である。平面形は楕円形で、確認規模は長軸 100cm、短軸 48cm、深 31cm、底面レベルの海拔は 7.46m を測る。

K16 号土坑

本址はⅢ区の x50、y18～20 の間に位置し、上層を中世遺構に壊され、南側は調査区外に延びている。覆土は黒褐色砂質土で、底面に灰と炭化物が混じった土層が硬く締まった状態で検出された。この土層の上部から碗型土器の完形品（図 47 - 47）が出土している。中世遺構の調査時に本址の覆土まで掘り抜いてしまい、確実な平面形を確認できたのは東側の一部にすぎない。推測規模は長軸(180)cm、短軸(145)cm、深さ 101cm、底面レベルの海拔は 8.62m である。

K17 号土坑

本址はⅢ区の x46～47、y28～29 の間に位置し、東側を 18 号竪穴住居址に壊されている。平面形は円形で、確認規模は長軸 89cm、短軸(76)cm、深さ 37cm、底面レベルの海拔は 7.95m を測る。

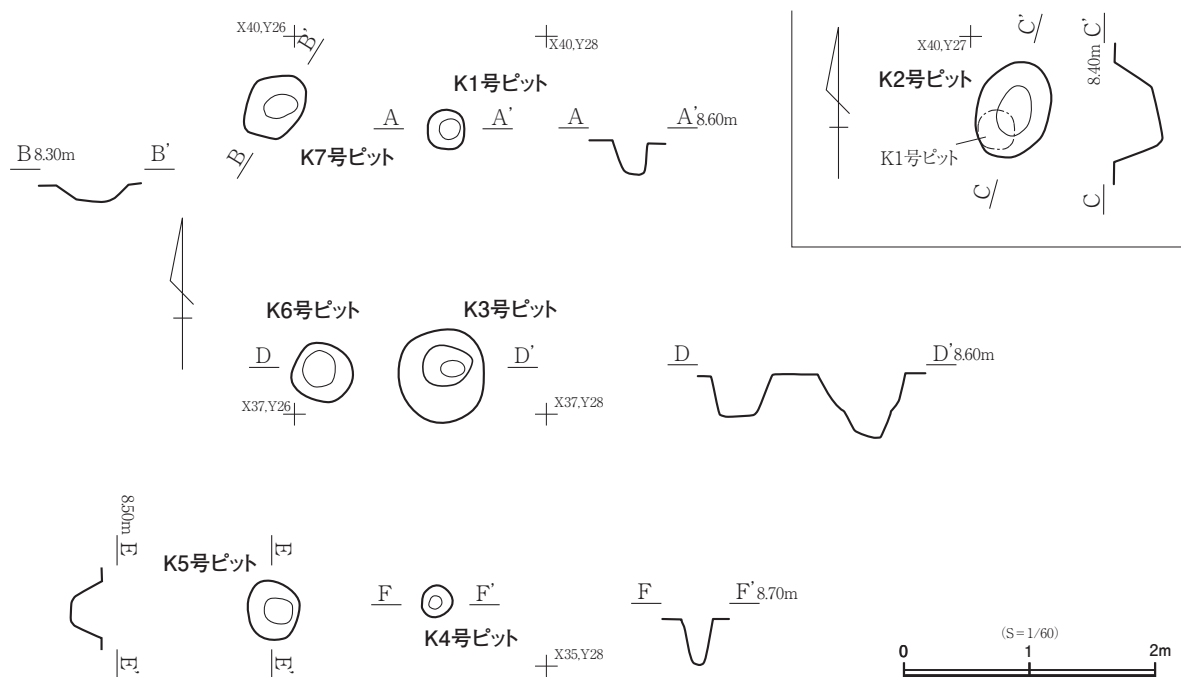


図44 2面ピット

(4) ピット

2面に属すと判断したピットは10基である。K8～K10ピットはK1号溝に伴う可能性があるため溝

とともに報告する。K1～K7号ピットは8号竪穴住居址の底面下及びその周辺で確認され、付近では4基の土坑（K12～K15号土坑）も確認されている。堆積土層（図5）で示したように、周辺では平面的に検出できなかった竪穴住居址と思われる掘り込みが密に重複して存在しており、確認された土坑、ピットはこれら掘り込みの付帯施設であった可能性もある。

いずれのピットからも遺物は出土していない。

K1号ピット

本址はⅡ区のx39～40、y27～28の間に位置している。K2号ピットを壊している。平面形は円形で、確認規模は長軸31cm、短軸28cm、深さ26cm、底面レベルの海拔は7.93mを測る。

K2号ピット

本址はⅡ区のx39～40、y27～28の間に位置している。南西側をK1号ピットに壊されている。平面形は楕円形で、確認規模は長軸80cm、短軸58cm、深さ38cm、底面レベルの海拔は7.93mを測る。

K3号ピット

本址はⅡ区のx37～38、y26～27の間に位置し、8号竪穴住居址の床下で確認されている。平面形は円形で、確認規模は長軸73cm、短軸68cm、深さ54cm、底面レベルの海拔は8.01mを測る。

K4号ピット

本址はⅡ区のx35～36、y27～28の間に位置し、8号竪穴住居址の床下で確認されている。平面形は円形で、確認規模は長軸25cm、短軸24cm、深さ36cm、底面レベルの海拔は8.21mを測る。

K5号ピット

本址はⅡ区のx35～36、y25～26の間に位置し、8号竪穴住居址の床下で確認されている。平面形は円形で、確認規模は長軸48cm、短軸44cm、深さ25cm、底面レベルの海拔は8.14mを測る。

K6号ピット

本址はⅡ区のx37～38、y26～27の間に位置し、8号竪穴住居址の床下で確認されている。平面形は円形で、確認規模は長軸48cm、短軸45cm、深さ34cm、底面レベルの海拔は8.18mを測る。

K7号ピット

本址はⅡ区のx39～40、y25～26の間に位置している。平面形は円形で、確認規模は長軸59cm、短軸43cm、深さ12cm、底面レベルの海拔は8.06mを測る。

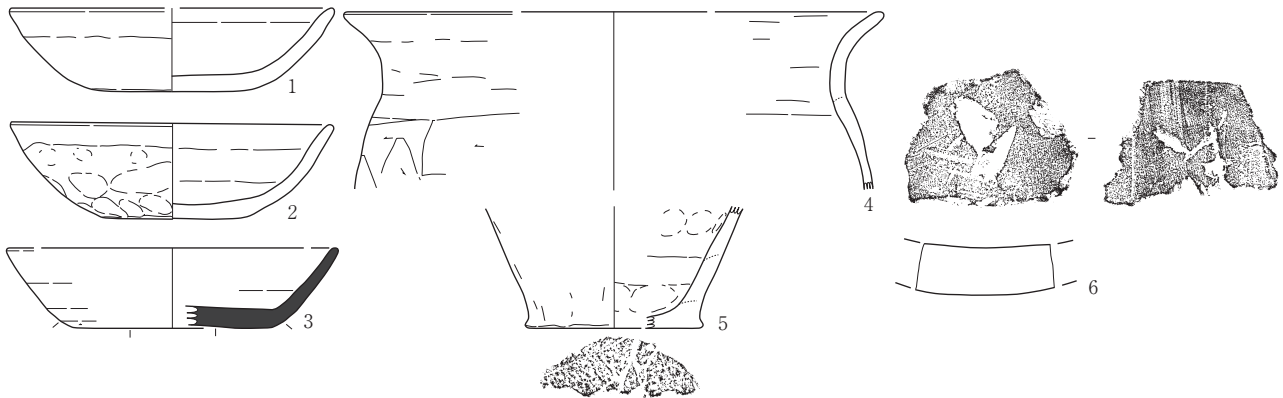
(5) 2面出土遺物

2面の遺構内と遺構確認時に出土したもののほか、中世遺構に混入していた遺物である。2面遺物として適当でない時期を示すものも含まれるが、鍵となる標準土層が確認されない地点で取り上げられており、所属する生活面を特定できないため本節で報告する。図48～49は土師器坏で外面はヨコヘラミガキ、内面には放射状暗文が施されている。図48～49は台付き甕で弥生時代の伝統を残す土器。口唇部の装飾がなく、頸部の輪積み成形痕は最下の1段を残しナデ消されている。

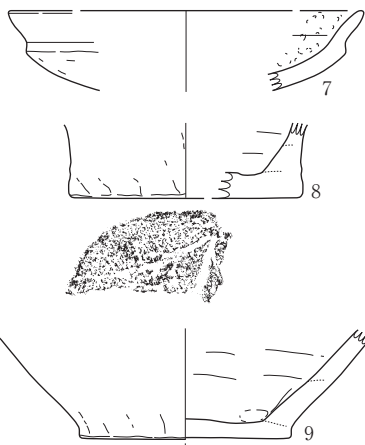
図45～図47には、2面に帰属する遺物のうち47点を掲げた。遺物個々の特徴については観察表に譲ることとし、ここでは時期比定に資する資料を中心に、大まかな様相を説明する。

1～6は1号竪穴住居址から出土。1・2は土師器坏で1は相模型、2は南武蔵型。ともに薄く黒変しており、灯明具として使用された可能性がある。3は須恵器坏。東金子窯産か。外面の体下端部から底部周縁には糸切り離し後の回転ヘラケズリを施している。2はカマド前面の床面上で出土しており、住居の廃絶時期に近い所産年代を示すであろう。ただ鎌倉では南武蔵型坏の出土例が少ないため、単体で

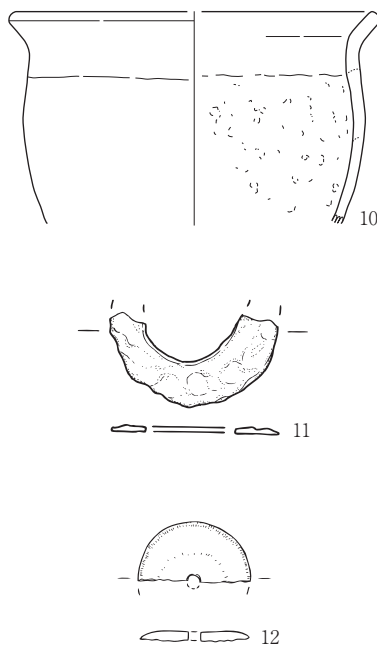
1号竖穴住居址



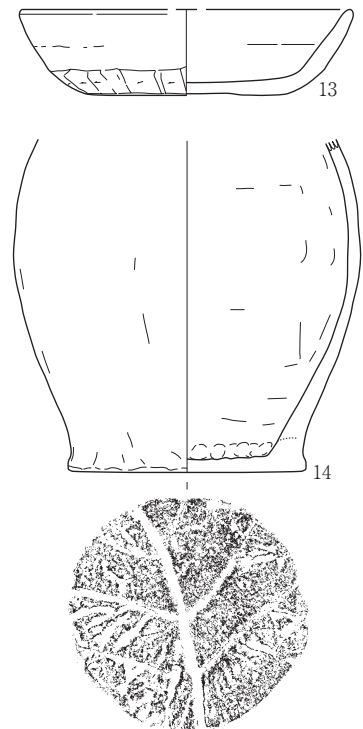
2号竖穴住居址



4号竖穴住居址



5号竖穴住居址



6号竖穴住居址

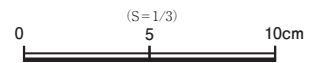
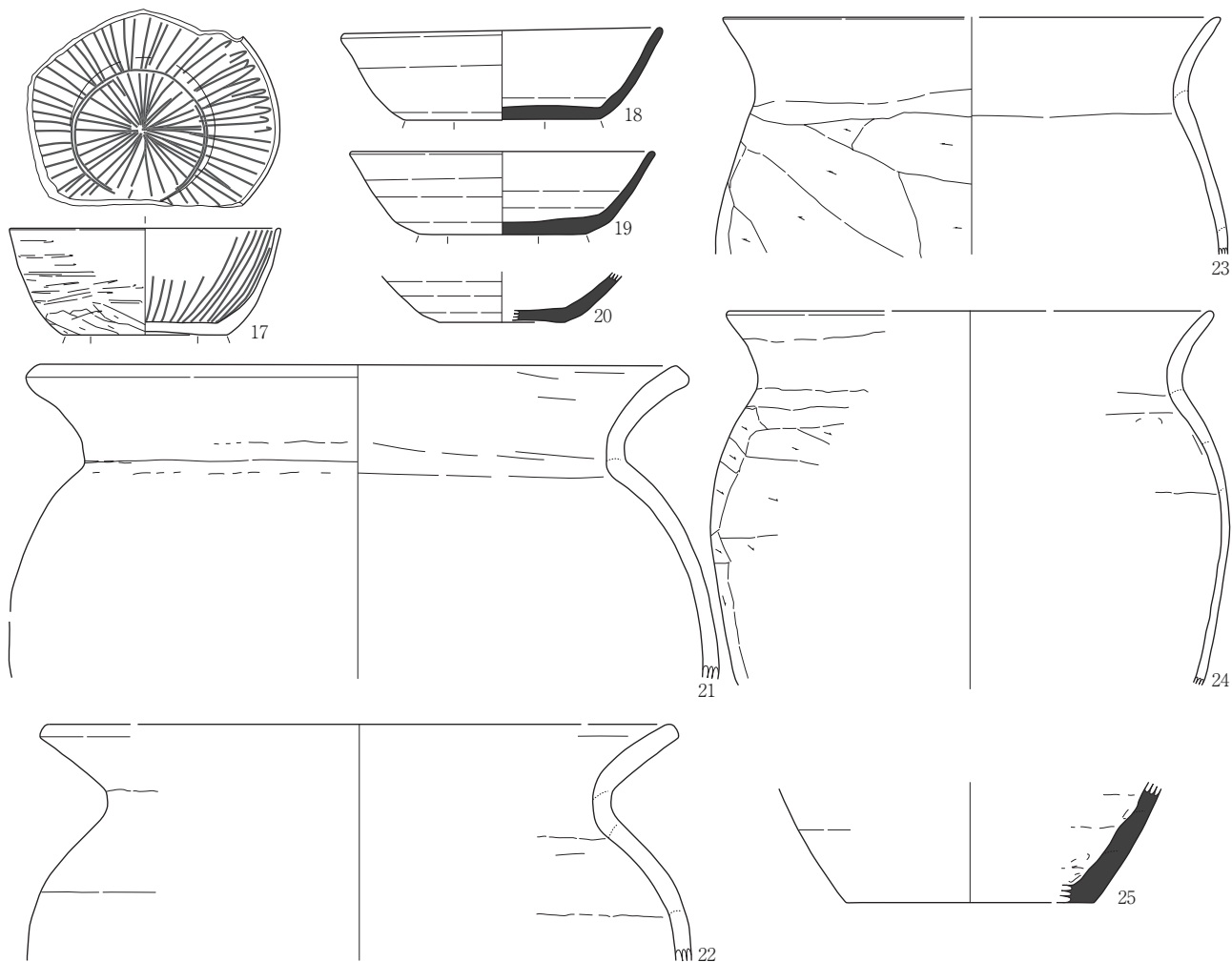


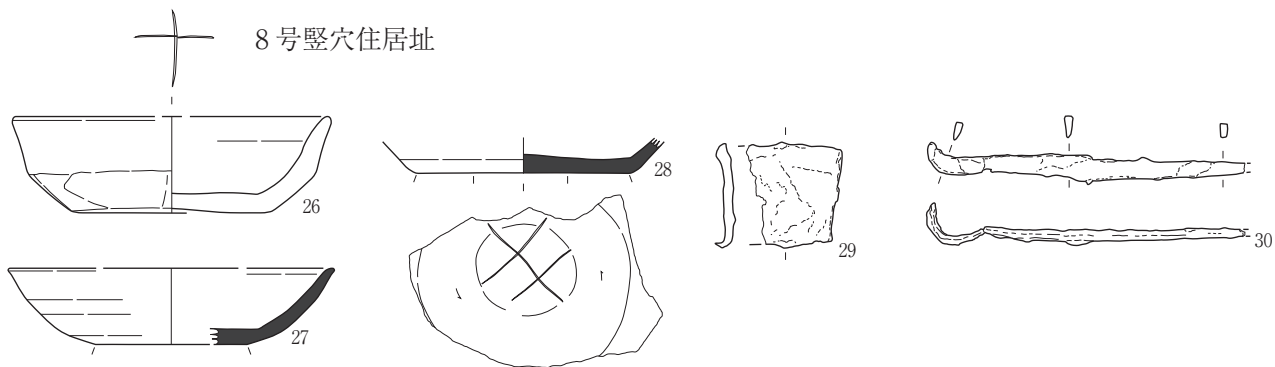
図45 2面遺構出土遺物 (1)

の年代比定は難しい。4の武蔵型甕は「コ」字状の口頸部形態に近いことから、9世紀前半～中頃を住居の使用年代と考えておきたい。2・3号竖穴住居址は出土遺物が少ないが、遺構間の切り合い関係から3号住居址が1・2号住居址に先行して使用・廃絶したことはいえる。7の有稜坏は古墳時代後期からの器形を残しているので、7世紀末～8世紀前葉頃の所産とみなせよう。4号竖穴住居址も図示できる遺物が少ない。5号竖穴住居址出土の土師器坏（13）は相模型成立から間もないもので、8世紀中葉頃の所産となろう。7号竖穴住居址は出土資料に比較的恵まれており、土師器・須恵器の坏（17～20）は法量から8世紀後葉～9世紀前葉の所産とみなせる。土師器の甕には相模型（21・22）と武蔵型（23・24）があり、後者は口頸部が「く」字状に屈曲し、前記の年代観と矛盾しない。16・17号竖穴住居址も、8世紀後葉～9世紀前葉の年代幅に収まるだろう。

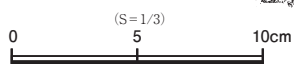
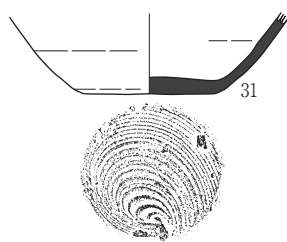
7号竖穴住居址



8号竖穴住居址



10号竖穴住居址



14号竖穴住居址

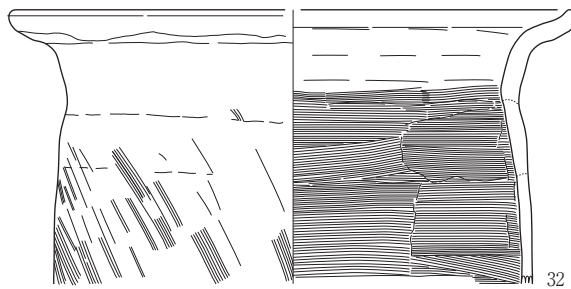
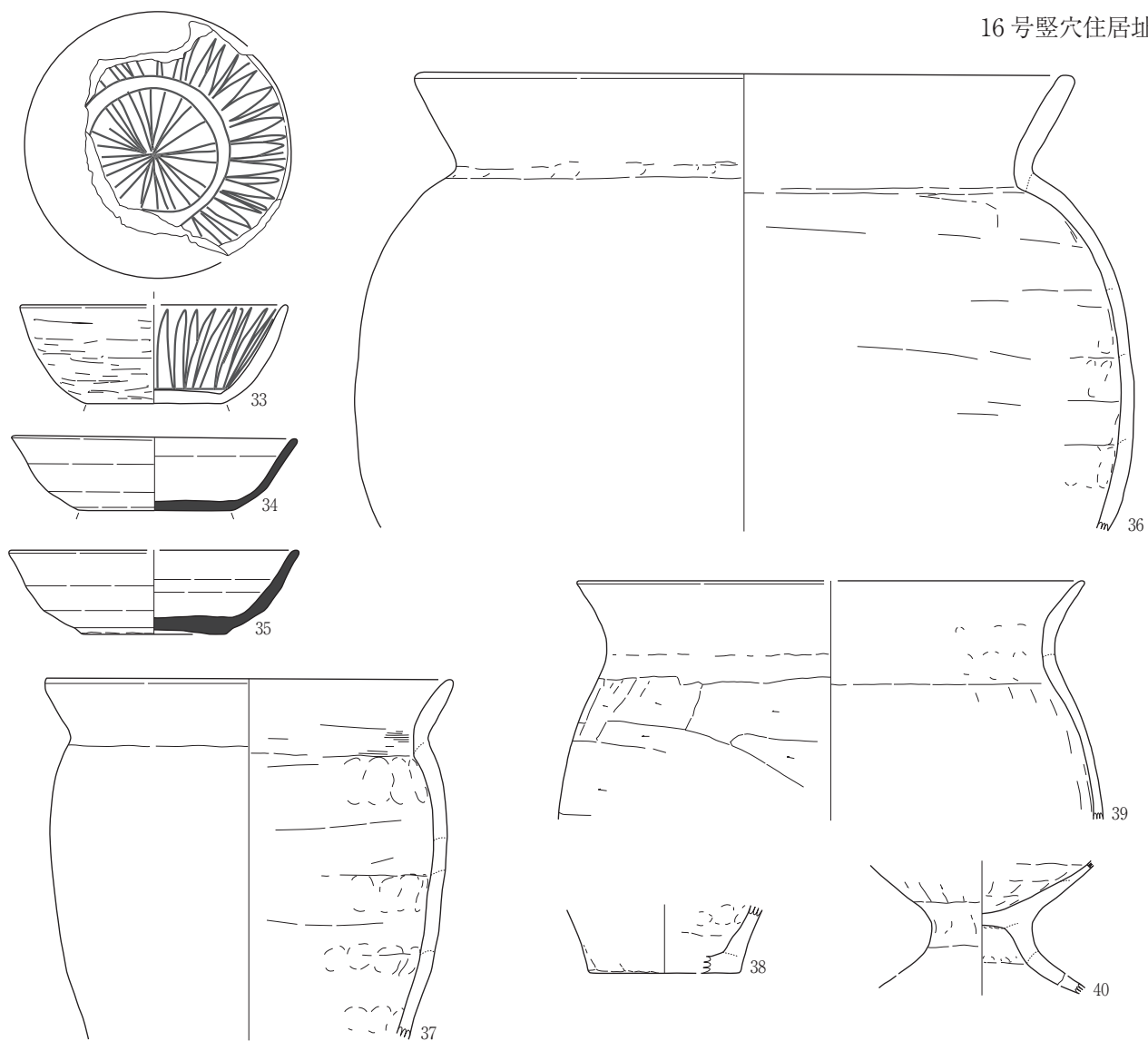
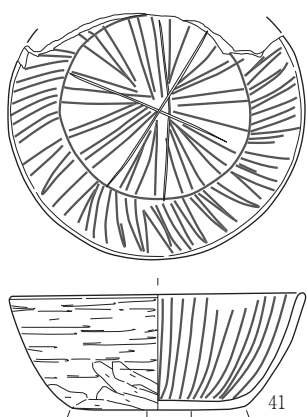


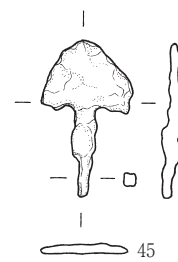
图46 2面遺構出土遺物 (2)



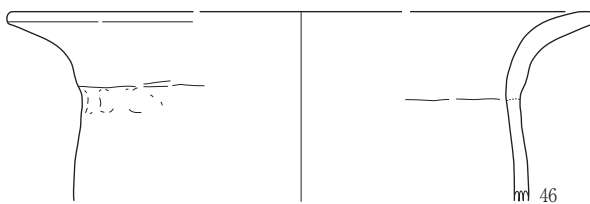
17号竖穴住居址



18号竖穴住居址



K13号土坑



K16号土坑

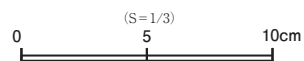
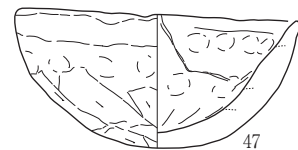


图47 2面遺構出土遺物 (3)

2面遺構外

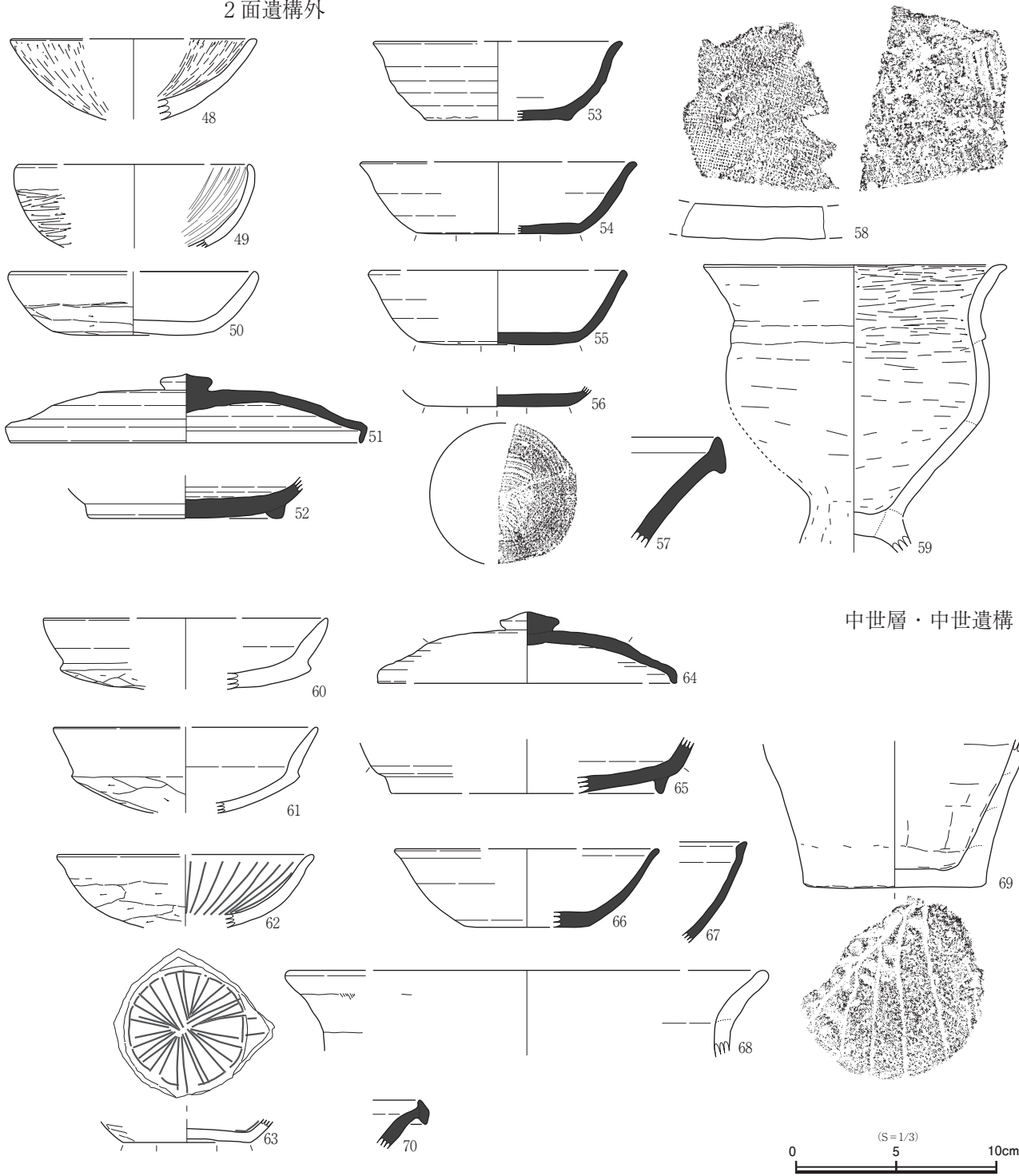


図48 2面遺構外出土遺物

図48には遺構外および中世層・中世遺構から出土した古代遺物を掲げた。傾向としては、所産年代が7世紀代～8世紀前葉の一群（52・60・61など）と、8世紀後葉～9世紀前葉の一群（54・55など）に大別ができそうである。本地点では、近隣での事例が増しつつある9世紀後半の資料は少なく、地点によって集落の中心時期が異なっていた可能性がある。

表6 2面出土遺物観察表(1)

図版 No.	番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
				口径	底径	器高	
45	1	土師器	相模型環	(12.6)	(6.6)	3.3	残存:1/3 焼成:良 胎土:密、小礫 色調:淡橙灰色
45	2	土師器	南武蔵型環	12.5	5.6	3.8	残存:3/4 焼成:良 胎土:密 色調:暗橙褐色/黒灰色
45	3	須恵器	環	(13.0)	(7.6)	3.2	残存:1/6 焼成:良 胎土:密 色調:灰褐色 東金子産か 内底径:(8.0) cm
45	4	土師器	武蔵型甕	(21.0)	—	[7.0]	口1/6~胴 焼成:良 胎土:微砂粒多量、角閃石少量 色調:赤橙色/黒色
45	5	土師器	相模型甕	—	(7.0)	[4.8]	底1/3 焼成:良 胎土:細砂質 色調:灰褐色
45	6	瓦	平瓦	—	—	厚さ 1.9	残存:小片 焼成:不良 胎土:密、泥岩粒 色調:灰黒色/灰褐色 凹面・凸面ともヘラナデ
45	7	土師器	環	(13.8)	—	[3.2]	残存:口1/6 焼成:良 胎土:密、相模型環に近似 色調:淡橙色
45	8	土師器	相模型甕	—	(9.2)	[3.0]	残存:底1/3 焼成:良 胎土:細砂質 色調:灰褐色/黒灰色
45	9	土師器	相模型甕	—	8.3	[4.3]	残存:底4/5 焼成:良 胎土:細砂質 色調:淡黄灰色/黒灰色
45	10	土師器	相模型甕	(14.0)	—	[8.4]	残存:口1/4~胴 焼成:良 胎土:細砂質、金雲母 色調:橙褐色
45	11	鉄製品	台座?	径 6.6	—	0.2	残存:1/2
45	12	骨製品		径 (4.3)	—	0.4	残存:1/2
45	13	土師器	相模型環	(13.0)	(7.8)	3.4	残存:1/3 焼成:良 胎土:密 色調:淡橙色
45	14	土師器	相模型甕	—	9.4	[13.1]	残存:胴~底完存 焼成:良 胎土:細砂質 色調:淡橙灰色
45	15	鉄製品	刀子	長さ [5.8]	幅 (0.9)	厚さ (0.2)	残存:欠損(25か) 重量:[3.8]g
45	16	鉄製品	刀子	長さ [14.0]	幅 1.5	厚さ 0.5	残存:切っ先部欠損(24か) 重量:[21]g
46	17	土師器	甲斐型環	(11.1)	6.7	4.4	残存:口1/6~底4/5 焼成:良 胎土:密 色調:橙色
46	18	須恵器	環	13.2	8.0	3.7	残存:3/4 焼成:良 胎土:密、白色針状物質 色調:暗灰色 南比企産 内底径:(8.0) cm
46	19	須恵器	環	(12.6)	7.0	3.4	残存:1/2弱 焼成:やや不良 胎土:密、白色針状物質 色調:暗灰色 南比企産 内底径:(8.2) cm
46	20	須恵器	環	—	(5.0)	[2.1]	残存:底1/2弱 焼成:良 胎土:密 色調:灰色 内底径:(5.2) cm
46	21	土師器	相模型甕	26.6	—	[13.0]	残存:口完存~胴 焼成:良 胎土:細砂質、白色針状物質、白色粒 色調:淡橙色/灰黒色
46	22	土師器	相模型甕	(25.6)	—	[9.8]	残存:口1/8~胴1/4 焼成:良 胎土:細砂質 色調:淡橙色/灰黒色
46	23	土師器	武蔵型甕	(20.4)	—	[9.8]	残存:1/2弱 焼成:良 胎土:微砂粒多量、雲母微量 色調:橙色/黒灰色
46	24	土師器	武蔵型甕	(20.0)	—	[15.5]	残存:口2/3~胴(歪み強いため反転実測) 焼成:良 胎土:微砂質、雲母微量 色調:赤橙色/黒色
46	25	須恵器	瓶	—	(10.4)	[5.0]	残存:底1/6 焼成:良 胎土:密、白色針状物質 色調:灰褐色 南比企産
46	26	土師器	相模型環	(12.2)	8.1	3.8	残存:口1/3~底3/4 焼成:良 胎土:密 色調:淡橙色 底部内面に焼成後の線刻「十」
46	27	須恵器	環	(12.6)	(6.0)	3.0	残存:1/6 焼成:良 胎土:密、白色針状物質 色調:灰色 南比企産 内底径:(7.0)cm
46	28	須恵器	環	—	8.3	[1.4]	残存:底2/3 焼成:良 胎土:密、白色針状物質微量 色調:灰色/黒灰色 南比企産 内底径:8.4cm 底部外面に焼成後の線刻「キ」字状
46	29	鉄製品	鉦尾か	長さ 4.2	幅 [3.8]	高さ 0.8	残存:不明 重量:[17]g
46	30	鉄製品	小型工具	長さ [12.7]	幅 1.1	厚さ 0.3	残存:完形か 重量:[11]g 先端部側面に刃部
46	31	須恵器	環	—	5.4	[3.3]	残存:底完存 焼成:良 胎土:密 色調:灰白色 内底径:5.7cm
46	32	土師器	相模型甕	21.9	—	[10.8]	残存:口完存~胴 焼成:良 胎土:細砂質 色調:にぶい橙褐色/黒灰色
47	33	土師器	甲斐型環	(11.4)	6.4	4.3	残存:口1/3~底4/5 焼成:良 胎土:密 色調:赤橙色/黒灰色 底部外面に疎らなヘラミガキ
47	34	須恵器	環	12.2	6.5	3.2	残存:2/3 焼成:良 胎土:密、白色針状物質 色調:暗灰色 南比企産 内底径:7.5cm
47	35	須恵器	環	(12.4)	6.2	3.7	残存:2/3 焼成:良 胎土:密、白色針状物質 色調:暗灰色 南比企産 内底径:7.5cm

表6 2面出土遺物観察表(2)

図版 No.	番号	種別	器種	法量 (cm)			その他の特徴
				口径	底径	器高	
47	36	土師器	相模型甕	(27.8)	—	[19.9]	残存：口1/2弱～胴 焼成：良 胎土：細砂質、白色針状物質、雲母微量 色調：橙褐色 / 灰黒色
47	37	土師器	相模型甕	(17.6)	—	[15.7]	残存：1/2弱 焼成：良 胎土：細砂質 色調：橙褐色 / 黒灰色 37と同個体か
47	38	土師器	相模型甕	—	(6.7)	[3.0]	残存：底1/6 焼成：良 胎土：細砂質 色調：橙褐色 / 黒灰色 36と同個体か
47	39	土師器	武蔵型甕	(22.0)	—	[10.4]	残存：口1/3～胴 焼成：良 胎土：中粗砂粒多量、角閃石微量 色調：赤橙色 / 灰黒色
47	40	土師器	武蔵型 台付甕	—	—	[5.7]	残存：脚基部完存 焼成：良 胎土：微砂質 色調：赤橙色 / 灰黒色
47	41	土師器	甲斐型坏	11.5	6.9	4.6	残存：3/4 焼成：良 胎土：密 色調：赤橙色 底部内面に焼成後の線刻
47	42	鉄製品	鎌か	長さ [8.1]	幅 1.0	厚さ 0.6	残存：完形 重量：13g
47	43	鉄製品	鎌	長さ [8.1]	幅 1.0	厚さ 0.6	残存：茎端部欠損 重量：[9]g
47	44	骨製品		直径 4.2	幅 —	厚さ 0.2	残存：完形 キザミ文様
47	45	鉄製品	鎌	長さ 6.1	幅 3.6	厚さ 0.6	残存：完形 重量：14g
47	46	土師器	相模型甕	(22.8)	—	[7.5]	残存：口1/6～胴 焼成：良 胎土：細砂質、雲母微量 色調：淡黄灰色 / 黒灰色
47	47	土師器	碗	11.0	—	5.3	残存：略完形 重量：210g 焼成：良 胎土：粗雑 色調：橙褐色 / 黒灰色
48	48	土師器	坏	(11.7)	—	[4.0]	残存：1/8 焼成：良 胎土：密 色調：赤橙色
48	49	土師器	坏	(11.4)	—	[4.2]	残存：口1/8 焼成：良 胎土：白色針状物質微量 色調：赤褐色
48	50	土師器	相模型坏	(12.0)	(7.8)	3.2	残存：1/3 焼成：良 胎土：密 色調：淡橙色
48	51	須恵器	蓋	(17.6)	—	3.5	残存：1/3 焼成：良 胎土：白色針状物質 色調：灰色 南比企産
48	52	須恵器	高台付坏	—	(8.6)	[2.0]	残存：底1/2弱 焼成：良 胎土：密 色調：灰色 湖西産か
48	53	須恵器	坏	(12.0)	(7.2)	3.9	残存：1/4弱 焼成：良 胎土：白色礫 色調：灰色 内底径：(6.6)cm
48	54	須恵器	坏	(13.2)	(8.0)	3.6	残存：口1/6～底1/3 焼成：良 胎土：密、白色針状物質 色調：灰色 南比企産 内底径：(8.2)cm
48	55	須恵器	坏	(12.5)	(8.0)	3.8	残存：1/6 焼成：良 胎土：密、白色礫 色調：灰色 内底径：(8.2) cm
48	56	須恵器	坏	—	(7.1)	[1.0]	残存：底1/3 焼成：良 胎土：密 色調：淡褐色 内底径：(8.5)cm 底部外面に焼成後の線刻「十」
48	57	須恵器	甕	—	—	[5.5]	残存：口小片 焼成：良 胎土：白色礫 色調：灰黒色
48	58	瓦	平瓦	—	—	厚さ 1.7	残存：小片 焼成：良 胎土：白色粒 色調：灰色 凹面布目、凸面タタキ
48	59	土器	台付甕	14.7	—	[14.3]	残存：口完存～脚基部 焼成：良 胎土：粗砂、小礫 色調：暗灰橙色 / 黒褐色
48	60	土師器	坏	(14.0)	—	[3.5]	残存：1/6 焼成：良 胎土：密 色調：淡橙褐色
48	61	土師器	坏	(13.0)	—	[4.5]	残存：1/3 焼成：良 胎土：密 色調：淡橙灰色
48	62	土師器	坏	(12.5)	—	[3.6]	残存：1/3 焼成：良 胎土：石英粒微量 色調：淡橙褐色
48	63	土師器	甲斐型坏	—	6.2	[1.2]	残存：底完存 焼成：良 胎土：密 色調：赤橙色
48	64	須恵器	蓋	(14.4)	—	3.5	残存：ツマミ完存～口わずか 焼成：良 胎土：密 色調：灰白色 湖西産か
48	65	須恵器	高台付坏	—	(13.6)	[2.8]	残存：底1/6 焼成：良 胎土：密、黒色鈹物粒 色調：灰褐色 湖西産か
48	66	須恵器	坏	(13.0)	(6.1)	3.8	残存：1/6 焼成：良 胎土：密、白色粒子 色調：灰色 南比企産か 内底径 (6.0)cm
48	67	須恵器	坏	—	—	[5.0]	残存：口小片 焼成：良 胎土：やや砂質、白色針状物質 色調：暗灰色 南比企産
48	68	土師器	相模型甕	(23.8)	—	[4.2]	残存：口1/6 焼成：良 胎土：細砂質 色調：淡橙灰色
48	69	土師器	相模型甕	—	9.0	[7.2]	残存：底3/4～胴 焼成：良 胎土：細砂質 色調：橙褐色 / 黒色
48	70	須恵器	甕	—	—	[2.4]	残存：口小片 焼成：良 胎土：密 色調：淡灰色 湖西産か

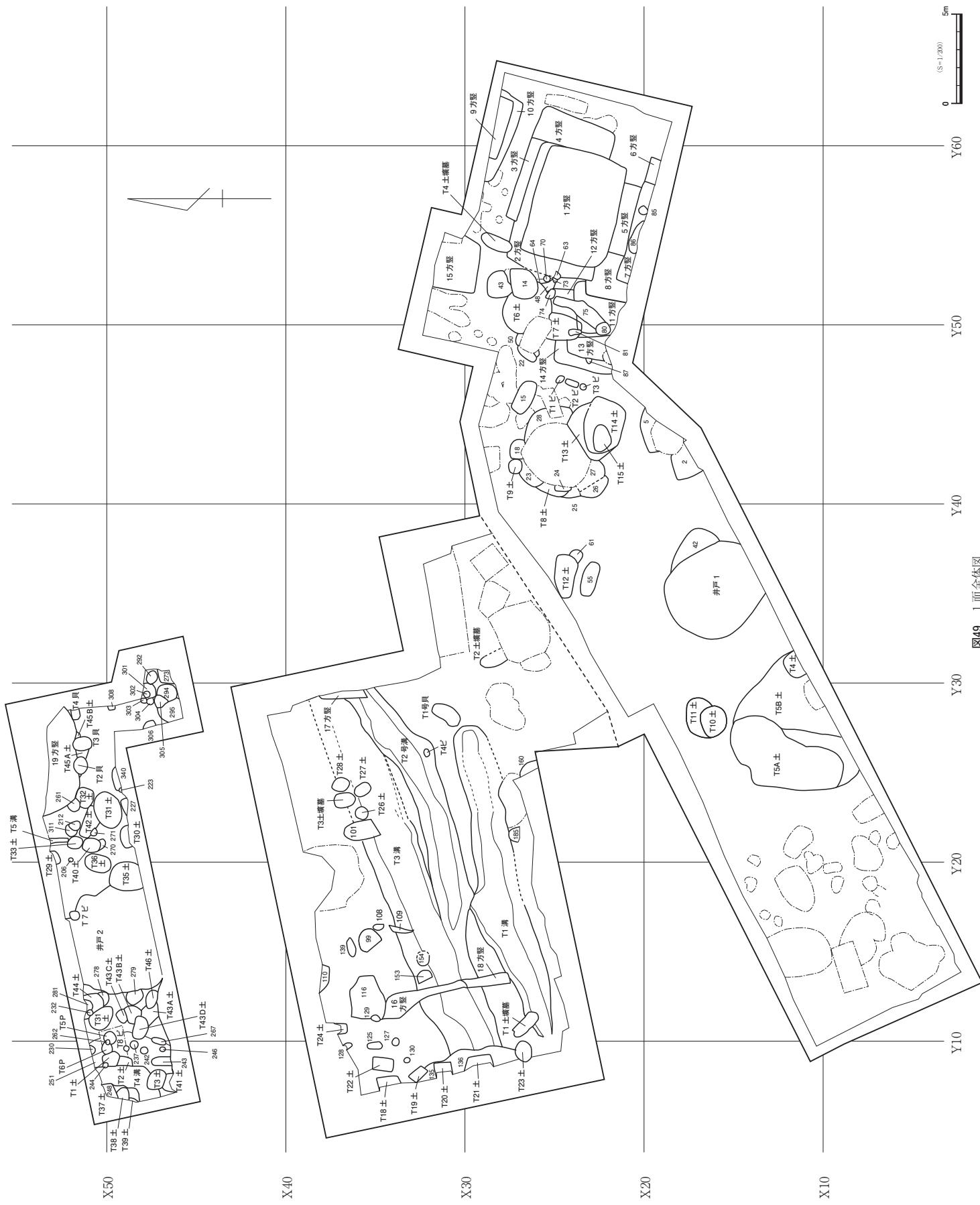


图49 1面全体图